

とこしえの
黄昏の国

朝陽遥

とこしえの黄昏の国

地の涯には、とこしえの黄昏の国がある。

若い頃から放浪の旅をくりかえしてきたというアシェリ、私の父親からその話を聞いたときには、またいつにもまして荒唐無稽な法螺話をするものだと、呆れかえったことだった。

生まれ育った故郷の地を、遠く離れて旅をするということ自体が、すでに狂気の沙汰だというのに、まして地の涯までいこうという。実の娘の私にも、いったいなにを考えているのか、さっぱりわからなかった。ろくでもない男だ。……ああ、お前には祖父にあたる男のことを、あまり悪くいうのも何だがね。まあ幸い、お前はアシェリには似なかったようだ。

母もまた、アシェリのその悪癖には、随分と悩んだようだった。だが、よその男がそうするように、目と鼻の先でよく知っているほかの女の寝床に通うよりも、まだ知らない土地で、見知らぬ女のあいだをさまよい歩いているというほうが、いくらかは気の休まることではあったらしい。その気持ちは、いまとなってみれば、私にも少々わかる気がする。ああ、別にお前のことを、あてこすっているわけではないさ。そもそも男というのはそういうものなんだろう。

そら、男がそういう顔をするものじゃない。情けないったらありゃしない。そういえば、なんという名前だったかね、あの機織の、気立てのいい娘は、息災にしているかね。そうか。孫たちも、みんな元気なんだろう？ それならいい。

話を戻そう。アシェリに限らず、私の故郷の人々は、ときには旅くらいするし、ここの人たちがそうするように、場合によっては移住もする。だがそれは、歩いて数日、そうでなければ灰鱗馬に乗って日のあるうちにというようなものだ。ここいらは道がいいから、それよりは少し遠出もするかもしれないが、それにしても限度がある。ひと月もかけて旅をしてきたというような変わり者がいるとすれば、ミシエゴの民の行商くらいのものでしょうよ。彼らだって、荷をやりとりするために、街道にそって往復するのがせいぜいだ。道なき道を往ってまで、違う言葉話す人々がいるとかいう、見知らぬ土地になど、そうそう足を突っ込むものではない。

まして、私の故郷からは、ちょっと北へと向かえば、異相の獣が吼え声を上げる、この世のものとも思えないおそろしい森が広がっているし、といて南へと向かえば、やがて河がもうもうと湯気を上げ、半刻もあれば人が蒸し焼きになって湯気を上げるような、灼熱の大地が顔を出す。そんな土地を旅するアシェリのことを、故郷の人々はみな口を揃えて狂人だといったし、娘である私自身が、ほかの誰よりもそう思っていた。

それなのになぜ、私は涯の地なんていうものを目指したのだろうかね。

アシェリがさも面白おかしく語る、荒唐無稽な風聞が、魅力的に聞こえたからというわけでは、なかったように思う。むしろ、旅先で灼熱の陽射しに焼かれて、同じ年頃のほかの男たちよりもよほど早く皺だらけになったアシェリの肌や、何度か山越えをしたときに、吹雪に襲われたせいで、手足の指が何本も欠け落ちてしまっていることや、そういうものをこそ、私はこの目でまじまじと見てきた。

月が何度巡っても、家に戻ってこないアシェリ。よその家の父親は、どれほど愛情の醒めた無精な男であっても、ひと月に数日は顔をみせるものなのに、その義務さえ果たそうとしないろくでなしの父親。だが私は、なぜかあの男が好きだった。

もっと頻繁に家にやってきて、私にもたっぷりの愛情を注いでくれる、ほかの弟妹の父親がいたというのにな。気まぐれにしか顔を出さず、出しても途方もないような法螺話ばかりを自慢げに垂れ流すだけで、頭ひとつなでてくれるでもないアシェリのほうが、私はずっと好きだった。弟妹たちは、アシェリのこと

を気味悪がって、なかなか近寄ろうとはしなかったというのに。

それは血のなせるわざだろうか。母はそう信じ込んでいるふしがあったけれど、私にはその考えは、どうにもじっくりとこない。

私がアシェリを好きだった理由はともかく、たしかに私はあの男の血を引く娘であるらしかった。そもそも女の身で一人旅に出ようということ自体が、狂気の沙汰としか思えない。皆が口を揃えてそういったし、自分でもそう思った。もっとも、美しい母ではなく、どこもかしこも無骨でおおづくりな造作のアシェリに似てしまった私は、顔にせよ体格にせよ、女だからという理由で、身の危険を感じるようなものでもなかったがね。なんせ、母以外の誰一人、私が旅先で遭難することを心配こそすれ、旅先でどこぞの男に襲われでもしたらという想像のほうは、ちっともしなかったのだから。

けれど実際のところ、ところが変われば美しさの基準も変わるものらしい。故郷では自他ともに認める醜女だったはずの私が、遠い異国の地では、何度か一目ぼれもされたし、これでけっこう、求愛もされた。いま、笑ったな。まあ、信じなくてもいいさ。

ともかく、そういう意味では、身の危険は覚えなかったな。というのも、私は女だてらに、腕っ節もまあ強かった。いまでこそ、歳をとってこの有様だけれど、狼藉者の二、三人くらいは、簡単に追っ払って見せたものさ。怖いのは人間ではなくて、森や崖壁や砂漠に棲む、爪や牙の鋭い獣や、おそろしい毒をもつ虫たちのほうだった。それでもこうしてこの歳まで生きているのだから、私は相当に幸運な部類なのだろうね。なんせ、アシェリが死んだのは、噂を信じれば、いまの私の半分ほどの歳だったのだから。それでも最後に会ったあの男は、実際よりもずっと老いて見えたものだったが。

そういえば、デットアルタよりも東の地に住む人間は男も女もみな頑健で腕が立つとか、そういうような噂が、一時期このあたりで広まったようだった。あれはもしかすると、私のせいではなかったかな。実際は、こちらの人々と同じように、故郷の女たちはか弱いものだった。私が変わり者だったのさ。

ああ、年寄りの話は、すぐ脇道に逸れてよくないな。ともかく、若かりし私は、その地の涯とかいう場所を目指したのだ。アシェリの語った道筋を追って、おそろしい獣の棲む北の森を抜け、自分の倍ほどもあるろうかという背丈をした船頭の漕ぐ渡し舟に乗り、ゲルガ大河を渡って、雪と氷に閉ざされたシジ・シャガラ連峰を越えた。右足の指が二本欠けているのを、お前には見せたことがあるだろう。あれも、アシェリと同じように、高い山の上で吹雪に見舞われた結果だった。

ああ、雪をお前は知らないか。無理もない。そうだね、寒い土地では、雨が凍って雪というものになるのだよ。

凍る、がわからないか。そうだね、水がうんと冷えると、塊のようになるのだよ。雪というものは、軽くて、白くて、ふわふわと風に流されて降ってくる。小さくて、指で触るとあっという間に溶けて消えてしまう。けれど、ときには殴りつけるように降り、驚くほど厚く降り積もる。触ると、優しく包んでくれそうな外見を裏切って、鋭いほどに痛い。それほどに冷たいのだよ。手足が冷たいまま、ずっとほうっておくと、指が腐れて落ちることもある。ああ、想像もつかないか。まあ、それならそれでいいさ。

なんでそこまでしたのかって？ さて、あまりちゃんと考えてみたことはないな。

ああ、だが多分私は、知りたかったのだろう。わが父アシェリ、あのほら吹き、の、気狂いの、腰の据わらない薄情な男が、愛した女と娘を置いて、遥かな地にある何を見たかったのか。いったい、遠くの地にある何が、アシェリに私たちを捨てさせたのかを。

あるいは私自身が、故郷の地にうんざりしたからだったかもしれない。いまにしてみれば懐かしい故郷だが、それでもあの町に戻りたいとは思わない。ああ、そりゃあ、一人で遠くまで旅に出ようと思うほどの変わりものだからね、色々と悶着もあったのさ。ちょうど弟妹たちが大きくなって、手がかからなくなったのも、いいきっかけだった。

だからといって、同胞と離れて、一人っきりで生きようなんて思う人間は、そうはいないさね。だが私の場合は、ほかに逃げる道があるということを、父親が体現してみせていた。いや、考えてもみればアシエリの場合は、それでもたまには帰ってきてはいたのだから、私ほどには薄情でもなかったのだろう。

アシエリは面白がって、私に遠い異国の地で食べた野草や、狩りの仕方や、見知らぬ土地の言葉を、たびたび話して聞かせていた。そのおかげで私は、あの男自身に比べたら、まだ楽に旅をしたのではないかな。言葉の通じぬところから、背格好も肌の色も違う人間の間に飛び込んで、自分は敵ではないのだと訴えるという、ただそれだけのことが、どれほど難しいものか、お前に想像ができるだろうか。戦の絶えない土地ならば、なおさらのことだ。ふん、考えてみれば、アシエリは半ば、予想していたのかもしれないな。私がいつか、故郷を飛び出すのではないかということ。

それで、とこしえの黄昏の地はどうなったのかって？ そうだね、その話をしていたのだった。ああ、そうせかすもんじゃないよ。若い者は気が短くていけない。

結論からいえば、その国はたしかにあったのさ。遠く北の涯の、そうだね、ここからだとな人の足ならば、月が二十も満ち欠けするほど延々と歩かなければ、辿りつかないような場所だ。歩くだけでは無理だね。船も使う。四ツ脚鳥の背中にのって山越えもする。十人が通って、九人は命を落とすような、そんな険しい道もある。人が誰も通らない獣道も通る。大きな獣も襲い掛かってくる。いったいそんな涯の地に、どうやって人が住み着くようになったのだろうね。

だが私は幸運にもその道を越えたとし、そこにはたしかに人が暮らしていたのだ。

アシエリから聞いた話では、その国に棲んでいるのは、人ならぬ精霊や妖精、古代の生き物たちではないかということだったのだが、実際に行ってみればなんていうことはない、そこに暮らしているのも、当たり前の人と獣たちだった。

私は北の涯という場所は、もっと寒いものかと思っていた。いや、たしかに信じられないほど寒くはあるのだが、かつて越えたシジ・シャガラの上頂付近に比べれば、凍えるほどではなかったな。その証拠に、あの山の上のほうには樹の一本も生えていないが、涯の地には、針のように細い葉をたくさんつけた、背の高い樹々が、うっそうと繁っていた。

畑もあった。四足の、ほかでは見たことのない毛深い動物がいて、人々はそれを飼い、乳もとっていた。海にはときに氷が流れてきたし、雪も降ったけれど、そこは少なくとも、人が生きていけないような場所ではなかった。

とこしえの黄昏の国という、その呼び名のとおり、その地には昼も夜もなかった。日がな一日、太陽は地平線すれすれを掠めるように、横に滑ってぐるりと周りを回るのさ。月だってそうだ。地上に半分だけ顔を出して、ぐるぐると回っている。欠けながらゆっくりと太陽に近づいて、やがて離れていくから、そのときどきで、うっすらと見えたり、見えなかったりする。

その国の東南には、低い山脈がづらなっていたから、太陽がそのあたりを通るときだけ、ほんの少し、あたりが暗くなる。あとは天気の崩れたときにも、やっぱり暗くなるね。だが、それだけだ。太陽が天高く

上って日差しが肌を焼くこともない。日が沈みきって空に星が瞬くこともない。いくつかの明るい星だけが、太陽のあるほうと反対側の空に、いつもちらついていた。

日差しが弱いせいか、人々の肌は抜けるように白かった。そして、彼らは夜に休むということを知らないから、いつときまどろんでは起きて、働き、起きている間が合った者と語らい、疲れればおのおのの好きな時間に眠るといったぐあいだった。その必要があるときには、時間を決めて、交代で眠る。それで体に堪えないのかと思ったが、その土地で長く暮らしてきた人たちだからね、すっかりそういう体の作りになってしまっているのだろうさ。実際、私もそこでいつとき過ごすうちに、世界に昼夜というものがあることを、忘れてしまいそうになった。

その国の人々は皆、ゆったりとした口調で話をした。さすがのアシェリも、その言葉までは知らなかったようで、私は一から十まで身振り手振りで、彼らに意思を伝えなくてはならなかった。その手振りさえ、故郷では感謝を意味する手の振り方が、彼らにとってはまるきり違う意味の合図になってしまうようだった。そりゃ、はじめは苦労したさ。それでも、さすがは日の沈まない国というべきかな、皆、どこかおっとりとした人たちでね。ともかく私に敵意のないことだけでも伝わると、あとは誰も彼もが、根気強く相手をしてくれた。

不思議なもので、言葉や仕草はまるきり違っていても、笑ったり怒ったりする表情は、さほど違わないものだ。何か月かをそこで過ごすうちに、私は少しずつ、彼らの言葉を覚えていった。彼らの畑の世話の仕方も教えてもらった。あの国では、作物が育つのが遅い。だから皆、念入りに畑を見回り、せっせと世話をやいた。お前は知っているだろうか。お前や私がさっき食べたノイオ麦の飯、あれは、植えてひと月で実るだろう。あれだけ短い期間で育って、保存もきき、あれほど滋養のある作物は、とても珍しいものなのだよ。おかげでこの土地に住み始めてから、ひもじい思いをしたためしがない。

ノイオ麦は、このあたりよりほんのちょっとでも北に行けば、寒すぎて育たないし、わずかでも南に行けば、今度は暑すぎて実がつく前に枯れてしまう。この土地はとても恵まれているのだよ。それだからこそ、過去には戦も多かったのだろうがね。私の故郷なんぞは、貧しい場所だからね、誰も争ってまで奪おうなんて思いやしない。

涯の国では、彼らの漁にも混ぜてもらった。北の海は寒かった。間違えて落ちたら、あっという間に手足が痺れてまともに泳げず、下手をするとすぐに心臓が止まってしまうほどだ。それだから、船はとても頑丈なつくりだったし、彼らの船の扱いは目を疑うほど巧みだったね。この辺りの海の男の比じゃない。ああ、別にお前の仕事を馬鹿にしているわけではないよ。お前は立派な漁夫だ。本当にそう思っているよ。さっきの魚も旨かった。

ともかくその国で、私は一人の男と出会った。

その男、フィリオルの瞳は、よく澄んだ明け方の空のような、ごく淡い青をしていた。その髪は、よく晴れた日の夕陽が、雲をやわらかく照らすときの、あの空の色と同じ、黄金の色をしていた。おや、信じないのかい。だがあの国には、金や銀の髪の人々が、緑や水色や灰色の瞳の人々が、たくさんいたのだよ。私はこの目で見えてきた。ミシエゴの商人の中に、たまに目の色がやたらと明るいのがいるだろう。あれがもっと極端になるだけだ。何がおかしなことがある。

世界には、背丈も、髪や目や肌の色も、食べ物も言葉もまるきり違う人々が、それぞれに暮らしているのだよ。多くの人が、それを知らずにいるだけなのだ。

フィリオルは、いつもどこか夢見るような目つきをしていた。背が高くて、そうだな、私よりも頭二つは大きかった。睫毛まで髪と同じ、日に透かしたような金色をしていた。

ところでこの辺りでは、男は好いた女たちの家に、数日おきに通うだろう。女は、産んだ子どもを自分の家で育てるし、男たちはその子どもらにも会いに通ってくる。女だって、別々の男の子を孕むのだって、珍しいことでもない。私の故郷でもそうだった。いま、何を当たり前のことをいっているのかと、そういう顔をしているね？ それが当たり前でないと聞いたら、お前は思うかね。

あの国では、違っていたのだよ。といっても、女が男のところに通うのではない。互いにたった一人の相手を伴侶と定めて、生涯連れそうのだ。

実感が湧かないか。そうだろうね。

私はフィリオルと恋仲になった。ふ、そう変な顔をするのはおおよしよ。私にだって娘時代はあったさ。

いつの間、私たちはそこで一緒に暮らした。さあ、どれほどの期間だったのだろうか。あの場所では、時が流れないのだ。いや、ほんとうに流れないわけではないのだがね、日も沈まないばかりでなくて、星の動きもよくわからないから、時の流れを誰も気にしていないようだった。いまにして思えば、月の満ち欠けするのを、しっかり数えていけばよかったのだろうがね。

あの国では、伴侶はいつも同じ家で寝起きする。畑に出たり、漁にいったりしている間は、別々に過ごすこともあるが、帰ってくる家はいつも同じだ。樹を切って、四角く削った石を組み合わせてつくる、頑丈な家だ。床には毛皮を敷き詰める。外は寒いが、その家の中は驚くほど温かい。薪を伐ってきて、いつも絶やさず火を焚いている。

そこでの暮らしは、このあたりに比べたら、厳しくはあった。作物が育つのがゆっくりだから、たまたま何かあって、そのときに作っていた畑が全滅すると、とたんに喰うものに困る。そうになると、毎日魚と乳とわずかな草の実ばかりで過ごすようになる。寒いのとひもじいのが重なれば、人は弱る。

だがそんなときは稀で、大抵はなんとか凌ぐことができた。それというのも、魚がよく獲れたのだ。その点だけは、ここいらよりもよほど豊かだったとっていい。

だから、黄昏の国での暮らしに、不満があったわけではなかった。だが、私はいまここにいる。何故だか、お前にはわかるだろうか。

フィリオルが、外の世界を見たいといい出したのだよ。

惹かれあうからには、それだけの理由があるのだろうね。お前の見てきた世界を、昼と夜のある世界を、俺もこの目で見てみたいのだと、あの人はいった。遠く温かい土地を、険しい山並みを、まるで相の異なる草木や獣や鳥たちを、違う言葉と違う習慣のもとに生きる人々を。世界のありようを、この目で見てみたいのだと、フィリオルはいったのだ。

私はためらいはしたが、長くは迷わなかった。

やはり私は、薄情な女なのだろう。よくしてくれた舅や姑を、あの人の兄弟たちを、生まれ育った北の大地を、あの人に捨てさせたのだから。

二人の旅は、困難なことには変わりなかったが、いま思い返しても、とても幸福なものだった。昼と夜の過ごし方を、高山での暖のとり方を、嵐のしのぎ方を、平らな土地での方角の見出し方を、行きの道々で覚えた草木の名前や、鳥や獣の狩り方を、料理や細工や、その土地の精霊への祈り方を、人々の言葉や習慣を、知っている限り、私はあの人に話して聞かせた。逆に、かの地へ向かう道で私が気づかないままでいたことに、あの人が目留めて、私に知らせてくれたりもした。人は一人では、己のものの見方しかできないものなのだということが、あの頃、つくづく身に沁みた。

何度となく危ない目にもあった。悲しい思いもした。人にだまされたこともあった。虎だの人食い魚だのに襲われたこともあったし、大小の怪我もした。だが、あの人新しい世界を見つめるとき、空色の瞳には、いつも眩しいような光があった。

アシェリが見たかったものを、彼がいまこの目で見ているのだと、そう思った。

ふ、それがどうしたという顔をしているね。

お前がさっき、持ち帰ってきた銅貨があっただろう。あのお顔が、どなたのものか、お前は知っているかね。そう、三代前の王様だ。その銅貨が、通用しない土地があることを、お前は考えてみたことがあるかね。

この国に、いくつの都と町があるか、知っているか。このミッティス、隣のフロウ、その先にあるバーディエラ、北のフォン、ベラウ、シアティ……。もう出てこないか。もうちょっとあるね。私の記憶は少し古いかもしれないが、三つの都と、二十あまりの村と町、それをあわせたものが、この国だ。この王様の銅貨は、そこでしか使えないのだよ。

それじゃあ、この国の外にいくつの国があって、そこにどれほどの町や村があるか、お前は知ろうとしたことがあるだろうか。ああ、私だって、正しい答えを知っているわけじゃない。

とこしえの黄昏の国を発って、この町に至るまでに、あの人とふたりで通ってきたのは、あわせて七つの国の六つの都と、二十の町と、四十いくつだかの集落だった。

それはこの広い大地の上にある、あまたの国の、そのほんの一部だ。私だって、この大地の隅々までを旅したわけではないのだよ。故郷の地と、とこしえの黄昏の国と、この町との間の、ほんの一部の土地を巡っただけなのだ。それだけの旅路でも、その土地のそれぞれで、いったい何種類の銅貨と銀貨があって、いくつの言葉があって、何十柱の土地神と精霊が、何百の祠と神殿に祀られているのを見たと思うかね。海辺の港町と、山奥の小さな村と、人のおおぜい集まる都とで、どれほどに暮らしが違うか、食べるものが違うか、祖先の祀りかたが違うか、この町を出たことのないお前に、想像ができるだろうか。

それだけの道のりを経て、この土地のすぐ近くまで、私たちはやってきたのだよ。ただ生きて通ることさえ困難な道も、いくらもあったというのに。

あの人倒れたのは、もう一日も歩けば、この町にたどりつこうかという辺りだった。

ジャハラ熱だ。お前もかかったことがあるね。地元の子どもらならば、一晩も熱を出せばけろっと治って、二度とかからないような、たわいのない病だ。

お前は知っているかね。土地の人にはたいした障りもないようなささやかな病が、違う土地に運ばれたとたん、次々に人の命を奪うこともあるのだよ。

微熱があるといい出してから、二日ともたなかった。薬の備えもね、なかったわけではないのだよ。だが熱さましも、ろくに効かなかった。あの国の人々の体と、私たちの体と、何がそれほど違っているというのだろうか。無学者にはわからないが、いまでもひとつだけ、はっきりとわかっていることがある。私はあの男を、生まれた土地から連れ出すべきではなかったのだ。

あとでわかったのだが、私はそのとき、孕んでいた。

フィリオルの亡骸を辻に埋めたあと、そんなことにも気がつかないまま、私はこの町まで歩いた。歩いたのだと思う。その次に覚えているのは、産声をあげるお前を、呆然と抱きかかえているところだ。初めて顔を見るような産婆が、私の肩を叩いて労ってくれていた。知らない女たちが、お前と私を囲んで、安心したように、あるいは私を安心させるように、笑っていた。なるほど、地の涯ほどの遠い国でも、人々の笑顔は、それほど違わないものだ、あらためてそう思ったのを、よく覚えている。

どうやってこの町の人々に、自分の身の上を説明し、住む場所を貸してもらったのか、どうやって産婆を呼んでもらったのか、それまでの記憶は、まるで思い出せない。

ほら、およしよ。男がそんな情けない顔をするものではないと、いったらろう。

だがまあ、この歳になるまで生い立ちを話さなかったことで、お前も、つらい思いをすることもあつたらう。近所の子どもらが、お前のその明るい色の瞳に、栗色の髪に、ひどい言葉を投げかけるところを、何度も見かけたよ。大人が口出しをすれば、お前はかえって嫌がると思ったから、何もいわなかったけれど。

なぜこれまで、お前の生い立ちを話さなかったのかは、もう、うすうす察しがついているだろうか。私は自分が子どもだったころ、アシェリの話信じたことで、周りの子らに嘘つき娘だと、端から決め付けられていたのだ。そうでなければ、狂人の子だと哀れまれていた。私はお前に、同じ思いをさせたくはなかった。

私は誰に身の上を聞かれても、故郷の町が、さもこの町からほんのちょっと離れたところだというふうにするまっていたらう。同じよそのものでも、似たような習俗を持つ近くの土地の人間であるほうが、まだ人々の風当たりは少ないと、身を持って知っていたからだ。本当はそれどころではない。ここから東に山を三つ越え、河を渡り、さらに南に下って森を抜け、あわせてふた月ほども歩かねばならないところに、私の故郷はある。お前の祖父母が生まれ育った土地だ。

そうした話を、もっと早くに聞かせてやればよかったのだろうか、いま時分になって思うようになった。お前は昔から、自分の父親の話を聞いたそうにしていたが、一度も聞いてはこなかったな。遠慮していたのかい。

お前は、私が何度か男たちの求愛を断ったことを、不思議に思っていたようだったが、それでも訳を訊いてはこなかった。これでわかっただろうかね。

私の男、私の夫。互いにたった一人と思い決めて、生涯を連れそう伴侶が、私には既にいたのだよ。

納得がいけないという顔をしているね。それならばそれでかまわない。人は自分の信じられるものしか信じないものだ。

地の涯にはとこしえの黄昏の国があつて、そこでは昼も夜もなく、金銀の髪と色とりどりの淡い目をした人が、時の流れるのも知らず暮らしている。そんな荒唐無稽な話は、信じなくとも生きていける。生きてはいけるのだ。

灼熱の海の向こう

なあ、ヴィトラカよ。俺はいつだったか、海の話を書かせたことがあったな。そうだ、どこまでもひたすらに水が満々と湛えられて、その岸边には、いつも波が打ち寄せている。なに、嘘だといわれたって？ その辺のガキどもにか。ったく、あいつらときたら、自分の足で町の外を歩いたこともなく、簡単に人の話を法螺だと決め付けやがる。まあ、あいつらの親がそういう態度なんだから、子どもはそりゃあ、真似するさな。

なあ、真面目に聞けよ。ここから南西にずっと行くと、そこには本当に、海があるんだ。

はるか南西には、砂漠がある。足元には硬い大地がなく、見渡す限りが熱い砂に覆われている。そこを越えてさらにずっといけば、どれほどしっかりと工夫を凝らしたところで、とても人の踏み入れないほどの熱さになる。地面の上だって焼けて、とてもじゃないが、昼間に近寄れたもんじゃない。夜の、日が落ちてだいぶ経ったころなら、かろうじて足を伸ばせるってところだ。それも、もたもたして、日が昇ってしまえば、あっという間に干からびて死んでしまうだろう。

その砂漠を越えてゆくとな、その先には海がある。水はぐらぐらと沸きかえって、夜でももうもうと蒸気が立ち込めている。海の上はろくすっぽ見とおせない。しかもその上、あたりは轟々と風が吹きすさんでいる。ああ、その先までは、さすがに俺も見たことはない。見たやつは誰もいないだろうさ。その前に、茹で上がって死んでしまうからな。

あるいはひたすら北西へと向かうと、そちらには人の住める、冷たい海がある。そこでは、海辺にもたくさんある村があって、海の中には、川に棲んでいるのとはまた違う魚や、貝がいる。そこで人々は、漁をして暮らしている。海の上に住んでいるやつらもいる。こう、木材を組んで、海の上に張り出した家を作るんだ。たまに嵐がきて、壊される。そしたら風が静まるまで、どっか陸の洞窟なんかでしのいで、嵐が静まったら、また一から家を作るんだ。その家の窓から釣り糸を垂れて、獲れた魚を捌いて喰う。暑くなったら、そのまま海に飛び込んで泳ぐ。いい暮らしだよな。

まるきり船の上で暮らしているという連中も、どこかの海にはいるんだそうだ。船というものに、俺は何度か乗ったことがあるが、あれはな、天気が悪くなると、揺れる。ため池に浮かんだ木の葉も、風が吹いたら揺れるだろう。ああいうもんだ。よくそんなものに、何年も乗り続けていようと思えるもんだよな。しかし、船暮らしの連中は、天気を読む不思議なわざを身につけているんだそうだ。風が吹き荒れそうになったら、早くからそれと察して、こう、先回りしてよけるらしい。

嘘をつけて、お前なあ。まあ、信じないならそれでいいけどな、その口調はいただけねえ。

なあ、ヴィトラカよ。お前もそろそろ少しは、娘らしくしてはどうだ。お前、そんな調子では、通ってきってくれる男もおらんだろう。はは、ろくすっぽ顔も出さなくせに、父親面するなってか。そりゃあそうだ。

海の向こうには、何があるのかって？

西の涯の海、その向こうに、何があるのか、俺にはわからん。海辺の連中に聞くと、何もないという。少なくとも、船でいける限りのところには、陸地は見当たらんのだそうだ。信じられないような顔をしているな。広たっていったって、たかが水溜りじゃないかって、思うんだろう。俺もそう思ったさ。だがな、ヴィ

トラカ、信じられるか。この世界ではな、陸地よりも、水に沈んでいる場所のほうが、ずっと多いんだそうだ。

もっとも、そういつている連中も、海辺に住んでいて、内陸のことはその目では見て知らないわけだからな。俺らが世界の涯まで陸地が続いていると思っっているように、自分たちが信じていることを、そのまま語り継いでいるだけなんだろうさ。さて、どっちが本当なんだろうかな。

なに？ 南の海の、その先には、何があるかって？

くくっ、お前ってやつは、つくづく俺の娘なんだなあ。一面に煮えたぎって真っ白に曇り、魚の一匹も棲めない、そんな場所の先に、何かがあると、お前は思うのか。

怒るな。笑ったからっていつて、馬鹿にしてるわけじゃねえよ。

西の海には、涯がないように見える。じゃあ、南はどうなんだろうな。煮えたぎる熱湯の海の、向こう側は。やっぱり何も、ないんだろうか。

ヴィトラカよ。この地面の下、ずっとずっと掘り進んでいつたら、そこに何があるか、お前は知っっているか。

まあ聞け。お前の聞きたいことに、この話はちゃんとつながつているから。

地面の下を、森に積もる枯葉の下を、どこまでも掘っていつても、そこにずっとやわらかい土が詰まっっていると、お前はそんなふうと思ってはいないか。

この地面をずっと、ずっと掘っていくとな、やがてどこかで、固い岩にぶつかるんだ。深さに違いはあるが、どの土地でもそれは同じなんだそうだ。俺たちが土を耕し、そのうえに作物を作るのは、大地の上の、ほんの薄皮一枚の話なんだな。

お前は固い岩に、穴をあけることができるか。そう、無理な話だ。だが、それをやっつてのける連中も、この広い世界には、ちゃんといる。ああ、これも話したことがあつたか。そう、土人と呼ばれる連中だ。やつらは鶴嘴と火薬をうまく使っつて、固い岩の中にも、なんといふことなく穴をあけてしまう。

その連中が、地面の底の深いところに掘つた、秘された道があるといふ。噂だ。この目でみたわけじゃない。実際に通つたつてやつを、じかに聞いたこともない。ただ旅先で、そんな話を耳に挟んだつていつただけだ。

ともかく、その地面の下の道は、海の底よりもずっと深いところまで、延々と深く下つていくんだそうだ。……おい、近場で試すんじゃないぞ。ため池の下をくぐる道なんぞ、ガキの力で作れるもんか。

その海の底の道つていつのは、どんなところなんだろうなあ。地面の下だからな。少なくとも、日の光は届かない。さぞ、真っ暗な道なんだろうな。ずっと日が当たらないんだろうから、寒いのか、それとも、蒸し暑いんだろうかな。

ともかく、噂によると、その道をひたすら歩き続けると、やがて「向こう側」に抜けるんだそうだ。

向こう側がどんなところなのかって？ 俺は知らないな。ただ、そうだな、ここから南に行けば行くほど、基本的には暑くなる。それでもどんどん先に行けば、やがては煮えたぎる海がある。だからその向こうは、石も鉄もどろどろに溶けるような、炎の渦巻く世界だと、そんなふう考えるのが、普通なんだろうか。なあ、お前はどう思っつ？

そんなところに暮らすものがあるとするれば、それは神々か、精霊か、それとも死者か。

それともあんがい、そこにも、当たり前の人間が住んでいたりしてな。

ふ。そうだったら面白いって話だよ。あんまり真に受けるな。

なんでそんなに、世界中を見て回らなきゃならないのかって？

さてな。考えたこともない。

血、かもしれねえな。俺の親父は、風の一族だったというから。

聞いたことがないか。そうだよな。ここらの連中は、そういうやつらがいることさえ、知らないものな。

風の一族ってというのは、流浪の民だ。流浪って、わかるか。俺みたいにふらふらして、一つところに住まない人間のことだ。

いや、ミシエゴの民とは違う。あいつらは、定期的に同じ道を往復するだけだろう。まあ、俺の親父は、あいつらの隊商に混じっていたそうだから、あながち間違いでもないんだが。

なんでそういう暮らしをする必要があるんだろうな。同じところで、おとなしく暮らしてりゃ、それでいいじゃないかって、そう思うよな。山が崩れて住めなくなったとか、土地が枯れて作物が育たなくなったとかいうならわかる。だが、そこに食べ物があって、水があって、寒さをしのげる場所があるのなら、わざわざ放浪する必要が、どこにある。そう思うだろう。

俺だってそう思うよ。けどな、風が呼ぶんだ。

風はしゃべらないってか。くくっ。まったく、可愛げのないガキだ。

なあ、ヴィトラカよ。お前、次に俺が来るときまでに、少しは女らしくなってるよ。そんなつっけんどんな物言いはっかりしてねえでよ。そんなんじゃ、お前、男どもも近寄ってこないだろうが。

男なんかいらんってか。馬鹿たれ、男と女ってのはな、いいものだぞ。

ろくに顔も出さないお前がいうなって？ 　ふ。まだまだガキだな。俺がどれだけ、お前の母親に惚れてるか、見てわからないんだからな。

まあいい。

さあ、もういいかげん、ガキは眠る時間だ。明日は俺は早くに発つからな。見送りはいらねえよ。ゆっくり寝てるといい。

ああ、今度は、ずっと北のほうに行ってくるつもりだ。土産話を楽しみにしているよ。……ふ、そういいながら、ほんとうは、聞きたいんだろうが。お前、なんだかんだいって、目が輝いてるもんな。まったく、俺の娘だよ。

ああ、北だ。お前にはたしか、話したことがあっただろう。ずっと北のほうには、一日じゅう陽が沈まない国があるらしい。よく覚えてるな。そうだ、とこしえの黄昏の国だ。さあな、寒いところらしいとは、聞いたが。国っていったって、そんなところのいったい、誰が住んでいるというんだろうな。精霊か、妖精か。それとも本当に、死者の国かもしれねえな。くくっ。

嘘だと思うか。まあ、それでもいいさ。もし嘘じゃなくて、この目で見ることができたなら、また話して聞かせてやるよ。次に帰ってきたときに、な。

それまで、達者でな。ああ、おやすみ。

夜明けを告げる風（前編）

ちょうどいまごろが、一年でもっとも星明かりの眩しい時節だ。ヨブはめざす南西の空を見上げて目を細めた。

満天の星空の中、下弦の月が天頂をすぎて、ゆっくりと沈みゆくようにしている。西寄りの低い空、ふたつ並んで青白い光を放っているのはタ・ディハル《七の導きの星》。その位置を頭の中で暦と照らし合わせて、ヨブは夜明けまでの時間を数えた。今夜は少し、急いだほうがいいのかもかもしれない。

ヨブが歩調を早めると、忠実な驢馬は何の不満もみせずに従ったが、人間の連れのほうは、そうはいかなかった。

「急ぐのか」

ひびわれ、枯れた声だった。慣れないせいで砂を吸い込んでしまうのだろう、歩きながら、ときおり不器用に咳き込んでいる。

「日干しになりたくなければな」

ヨブが素っ気なく答えると、連れの男は苦笑をひとつ漏らして、急ぎ足になった。砂を踏む音に、疲労がにじんでいる。

見れば、男は歩きながら震えていた。外套を羽織りなおして、男は白い息を吐いた。「寒いな」

ヨブは肩をすくめた。これくらいは寒いうちに入らない。

「これほど寒いというのに、ひとたび陽が昇れば灼熱の地になるとはな。この目で見ても信じられない」

そう呟いて、男は目をしばたいた。

何を当たり前のことを、といいかけて、ヨブは言葉を発する前に気がついた。砂漠の外は、そうではないのだろう。

男は砂漠の涯（はて）よりさらに遠く、はるか北の土地からやってきたのだという。砂漠に外というものがあることを、ヨブは知識として知ってはいるが、そのことが身に迫って感じられたためしはない。それほどヨブの知る砂漠は広大だった。不毛の海をのぞむ、南西の断崖を別にすれば。

「お前の郷（くに）では、夜は冷えないのか」

退屈のぎのつもりでそう訊くと、男は真面目な顔でうなずいた。

「もちろん、昼間に比べれば少しは冷える。だが、これほどではない」

それから男は目を細めて、故郷の話をした。男の生まれた町は、山の中腹にあるのだという。怪訝な顔をしたヨブに気づいて、男が補足したところによると、山というのは、巨大な砂丘のようなものらしかった。ただし砂ではなく、湿った土と岩とで出来ており、その斜面には数え切れないほどの草木が繁っているという。人々は石と煉瓦ではなく、伐り倒した木で家を作る。

その話の何から何までが、ヨブには眉唾もののように思えた。このあたりでは、雨は二月か三月に一度も降ればいいほうだし、木というものが、建物の材になるほど太く育つというのが、まず信じられない。

だが口を挟みはせずに、ヨブは黙って男の語る風景に耳を傾けた。男がひどく楽しげに、それを語ったからだ。痩せた麦から丁寧に実を外す、年寄りたちの皺ぶかい手。高くそびえる樹々の、梢に繁るあまたの葉。その隙間から漏れる陽射し。その枝に、月が満ちるごとに実る酸い果実。競うように樹に登ってそれをもぐ子どもらの、泥に汚れた足の裏。

そうした話を聴きながら、ヨブはオアシスで待つ息子たちのことを思った。この話を聞かせたならば、まだ幼い息子らは、どのような顔をするだろうか。

彼から濃灰色の瞳を受け継いだ、三人の息子たち。それぞれの顔を思い浮かべて、ヨブは驢馬の背を撫

でた。それから小さく首を振った。彼らに再会できる日は、ずっと先のことだ。道行きは長い。

いかにも異国の風貌をしたこの男が、ヨブの部族が暮らすオアシス、ファナ・イビタルを訪れたのは、三日前、イデイスの月の七日の出来事だった。

それは部族にとって重要な聖祭日、一年の降雨を祈願する祭りの日だった。この日にオアシスを訪れるものは、鳥であれ獣であれ、大変に縁起がいいとされ、古来、殺生を固く禁じられている。

くたびれた外套をまとった男は、隊商からはぐれたのか、あるいは驢馬を失ったのか、たったひとりでもわずかばかりの荷を背負って、よろよろと歩いてきた。それでも水と食べ物を与えられて顔色を戻すなり、驚くほど必死に人々の間を乞うて回った。砂漠の涯にあるという灼熱の海へと、誰か、案内してはもらえないだろうか。

オアシスは騒然となった。その海岸そのものは、何も特別な禁忌の地というわけではない。だがそこは、部族の聖域にほど近かった。よそものが訪れたいといって、けして歓迎される場所ではない。男がやってきたのがその日でさえなければ、物騒な話になっていてもおかしくはなかった。

しかし男はほかでもないその祭日にオアシスを訪れたのだし、その上、真摯に彼らの助力を乞うたのだった。どこで身につけてきたものか、それはたどたどしいながらも砂漠の部族であればどこでも通用する、正式な作法にのっとった請願だった。また、男はその無理な願いにふさわしいだけの報酬を積んだ。

古来より交易で身を立ててきたファナ・イビタルの男たちは、砂漠の案内人として名高い。その知恵を頼んでやってくる者は珍しくもないが、それにしてもこのような妙な出来事は、そうあるものではない。

だが、ヨブの知っている限りでは、かつて一度だけ、似たような来訪者があった。その男もやはりイデイスの聖祭日にオアシスを訪れ、灼熱の海への案内を乞うた。もう十年も前のことになる。

そのときの男を案内したのが、ヨブだった。十年を経て、奇妙な類似を思わせる二人目の男がやってきたことを知ったとき、ヨブは喧騒に満ちた広場の隅で、眩暈を覚えて立ちすくんだ。

その晩、長が呼んでいると遣いの男が告げたとき、ヨブはその呼び出しが来ることを、なかば予期していた。できることならばその予感が外れてほしいと願いながら。だが夜更けになって、遣いはやってきた。不安げな顔をする末の息子の肩を叩いて、ヨブは急ぎ足に長の邸へと向かった。

――入るがいい。

声にしたがって垂れ絹をくぐると、銀糸で施されたきらびやかな刺繍が、視界の端に尾を引いた。

常にそうであるように、部屋の脇には二人の番兵が控えていた。ヨブは視線を伏せたまま、部屋の半ばまで進み出た。奥にしつらえられた椅子の主を、直視することが耐えがたかった。ヨブは頭を垂れたまま、長の言葉を待った。

――奇妙なものだ。

長は重々しくいって、言葉を切った。それから、ヨブが身じろぎひとつしないのを確かめるように、じっと見下ろす気配があった。

長すぎる沈黙のあとに、長は言葉を続けた。

――あのような不毛の海へと、案内を請う男があらわれるとは。それも二人目だ。

ヨブは相槌をはさまなかった。うなずきもしなかった。ただ伏せた顔の下で、床を凝視していた。敷き詰められた数え切れない日干し煉瓦、そのひとつひとつに職人の手によって彫られた、精緻な彫刻を。

表に出すことを許されない反発の、それが精一杯のあらわれだった。だが、長がそうしたヨブの感情に

気づいているとは、とうてい思えなかった。長がおもむろに椅子から立ちあがる音が、ヨブの耳に届いた。

――ヨブ・イ・ヤシャル。お前ならば、今度もまた、立派につとめを果たしてくれるだろう。

それはすでに定められたことがらを語る声だった。

たとえ脇に控える番兵がおらずとも、逆らうことなどできるはずがなかった。無言のまま顔を上げると、長の掛けていた椅子、その肘置きに施された装飾が、まっさきにヨブの目に飛び込んだ。それは床の彫刻と同じ短刀の意匠で、部族の威をあらわすものだ。

長はじっとヨブを見下ろして、皺ぶかい顔に微笑を浮かべていた。それはいかにも、部族の優秀な若者に期待をかけているというような表情に見えた。ただその中で、濃灰色の眼だけが、ひどく温度の低い光を宿していた。

――亡き父の、名誉にかけて。

ヨブは低く答えて、長の顔を見つめたが、その表情には、欠片ほどの変化も見られなかった。立ち上がり、ヨブは一礼して踵を返した。

日取りを考えれば、翌日の晩には発たねばならなかった。すぐに退出しようとしたヨブの背中を、低い声が追いかけてきた。

――わかっているな。

振り返ると、長はもう微笑を浮かべてはいなかった。ヨブはうなずき、振り返らずに部屋を出た。背中にいやな汗をかいていた。悪夢にうなされたあとのように。

次の夜には、ヨブは旅支度をすませて、驢馬の一头を借り受けた。そうして会ったばかりの男と二人、はるかな旅路についた。

十年前に涯の海へ導いた旅人と、いまヨブの隣を歩く男の顔立ちは、どこか似通っているように、ヨブの目には映った。異国の者はたいてい似たり寄ったりの顔に見えるものだが、もしかするとそればかりではなく、出身が近いのかもしれない。

「お前、名はなんというのだったか」

いまさらのようにヨブが問うと、男は困惑したふうに目を瞬いた。

「悪い。すっかり名乗ったつもりになっていた」

「いいや。皆の前で名乗るのを聞いていたが、覚え切れなかった。音が、耳になじみがないから」

ヨブがそういうと、男はああ、とうなずいて、気を悪くしたようすもなく名乗りなおした。

「俺の名はアシェリという。故郷では、風を意味する言葉だ」

アシェリ。口の中で二度呟いて、ヨブはうなずいた。

「今度は覚えた」

それを聞いた男は、歯を見せて人懐こく笑った。

「あんたのヨブという名には、どういう意味があるんだ」

ヨブは面覆いの下で、わずかに顔をしかめた。それに気づいたのか、アシェリは困惑したふうに首をかしげた。

「俺は何か、失礼なことを訊いただろうか」

「いや。ヨブというのは、鳥の名前だ」

「へえ。気に入っていないのか」

「そうではないが。どうせなら父も、もう少し遅しそうな名をつけてくれればよかったのには思う」

ははあ、とうなずいて、アシェリは笑った。「なるほど、たしかにあんたには、もっと強そうな名前が似合うかもしれないな」

肩をすくめながら、ヨブは奇妙な既視感を覚えていた。十年前の道行きで、似たような会話を交わしたのだった。

あのときの男はイーハと名乗り、アシェリがそうしたように、続けてその名の意味するところを説明したのだった。それは男の育った土地の言葉で、夜明けを意味する名だということだった。

いわれてみれば、男の眼は、黎明の空を思わせるような紺青色をしていた。しかしヨブがそういうと、イーハは怪訝そうに首をかしげた。そうだろうか。そのようにいわれたことはなかったが。

やがて旅の途中、明けゆく東の空を見て、イーハはようやく腑に落ちたようにいった。なるほど、砂漠の夜明けとはこうしたものなのか。長年さまざまな地を旅してきたが、このような空を、初めてこの目に見た。俺の父親の生まれは砂漠地帯のどこかだと聞いていた。お前のいうように、この空を思っ、俺にこの名をつけたのかもしれないな。

ほかでは言葉少なだった男が、ゆいいつ自ら長く語ったのが、その話だった。男はいかにも異国の者らしい風貌をしていたが、それでも黒い髪と浅黒い肌とを持っており、砂漠の民族の血を引いているといわれれば、うなずけないことはなかった。

十年前のあのとき、あの異国の男を連れて歩いた旅路で、ほかにどのような話をしたのだったか。ヨブは口をつぐんで、遠い記憶を探った。静かなまなざしをした男だったのが、印象に残っている。寡黙で、ぼつりぼつりと切れ切れに言葉を落とした。

アシェリはしばらくのあいだ、ヨブの沈黙につきあっていたが、ふと思立ったように、慣れない手つきで驢馬の背を撫でた。

「それにしても、こいつは変わった馬だなあ。前に通った町でも、何度か似たようなのをみかけたが、砂漠の馬は、みなこのような姿をしているのか」

ヨブは振り返って、思わずアシェリの顔をまじまじと見上げた。表情を見る限りは、どうやら真面目に知っているらしかった。

「お前、驢馬を知らないのか」

「へえ。これは驢馬というのか。なかなか愛嬌のある顔をしている。こいつの名前は、なんというんだ」

「驢馬に名前などつけるものか。……お前、驢馬もしらずに、どうやってファナ・イビタルまでたどりついたというのだ」

思わず強い剣幕で問いただすと、アシェリは肩をすくめた。

「金がなかったのだ。あんたたちへの謝礼をかき集めるだけで、精一杯だった。あんたたちの町へ向かう星のたどり方は、ひとつ手前のオアシスで、地元の少年に教わったのだが」

それでも最後の一日は水も食糧も尽きて、あやうくのたれ死ぬかと思った。アシェリはあっけらかんとそういった。

「それにしても、あの少年は、やけに熱心に道を教えてくれるものだと思ったが、あれはもしかすると、俺の無謀さに同情してくれたのだったかな」

「そうだろうな」

ヨブが呆れてうなずくと、アシェリは照れ隠しのように笑って頭を掻いた。

「それにしても、あんたたちの星の読み方は、信じられないほど詳しいなあ。俺もどうにか、いくつかは覚えただが」

アシェリはそういって、進行方向の低い空にある、ひときわ眩しい星を指した。「あの白い大きな星が縦

に並んでいるのが、イオ・イディス《賢人の杖》。南西にある二連のものがタ・ディハル……」

つられて遠景に目を投げたヨブは、遠くの地平に町の明かりを見いだした。

「ああ、見えてきたな」

夜明けにはまだいっとき時間がある。間に合ったことに安堵しながらそういと、アシェリは訝しげな表情になった。

「どこだ」

「そら、あそこに灯があるだろう」

指さしてみせても、アシェリは首をひねるばかりだった。

「ちっともわからない。砂漠の人間は目がいいと、噂には聞いていたが、ほんとうなのだなあ」

感心するようにいって、アシェリは笑った。

それにしても、よく笑う男だった。これほど頻繁に表情を変える男を、ヨブはほかに知らない。女子どもならいざしらず、立派な男は、おいそれと感情を顔に出すものではないからだ。

だがアシェリは、そうしたことを、ちっとも恥とは思っていないように見えた。そのことに毒気を抜かれるような思いをしながら、ヨブは驢馬の手綱を引いて足を速めた。

オアシスに辿りついた二人は、安宿をたずねて大部屋の一角を借り、水の値についてそれなりに満足のいく交渉をすませた。前払いの代金を銅貨で支払ったヨブが、驢馬に水を飲ませていると、アシェリが感心したようにうなった。

「あれだけの水で足りるものだろうか、正直なところ不安に思っていたのだが。着いてみれば、ずいぶんと余裕があったな。さすがは名に聞く、イビタルの案内人だ」

何をいうかと思えばと、ヨブは肩をすくめた。

「ふたつ先のオアシスまでもつだけの水を用意するのは、砂漠を旅するものの鉄則だ」

「へえ、そういうものか」

「あてにしていたオアシスに、ようようたどりついてみれば、すっかり水が枯れていたということも珍しくはないのだ。それがたとえ、何百年と続いた町であっても」

声を落として、ヨブは説明した。この町もまた、二百年あまりの歴史を誇るオアシスだった。

「それで、二つ先か。なるほどなあ」

いちいち感心したように、アシェリはうなずいている。ヨブは呆れて首を振った。

しかし通常の道行きであれば、そもそももっと水場の多い道を通るものだった。砂漠の中ほどを横切るように大河が流れており、その周囲には人里もまた多い。河の流域に沿って旅をできるときには、多少遠まわりをしてでもそのようにする。大河ならばオアシスに湧く水と違って、水量が減ることはあっても、枯れることはまずないからだ。

だが今度の道行きは、まったく別の方角で、しかも人里の少ないほうへ、少ないほうへと向かっていく。途中からは、よほど正確に進路をとらなければ、灼熱の太陽に焼かれてあつという間にひからびてしまう。交易を生業とする旅なれた者でも、避けたがる道だ。

アシェリは軽い気持ちで持ち上げてみせたのかもしれないが、ファナ・イビタルの者、それもよほど南部の地理に精通している一握りの男以外では、灼熱の海へ生きて案内することは、まずできない。ヨブにはそれだけの自負があった。

そうした場所へ、大金を積んでまで、なぜ行こうというのか。案内された大部屋で隅のほうの寝台へ陣取りながら、ヨブは何度目かの問いを口に乘せた。

「なぜお前は、涯の海などへ行きたがるのだ」

アシェリは曖昧に笑うだけで、答えない。だがヨブとしては、なんとしてでも確かめねばならないわけがあった。その近くには、禁域があるからだ。

部族の中でさえ一握りの者以外にはその場所をかたく秘された土地が、砂漠の南西にはある。アシェリがもしも言葉どおりに海へ向かいたいのではなく、その存在をかぎつけて秘密を探ろうとしているのなら、捨て置くわけにはいかなかった。

だがこの男が何も知らない場合、下手な問い詰め方をすれば、かえって隠したいものがあることを勘ぐらせてしまうかもしれない。ヨブはひとまず追及することを諦めて、嘆息した。

「まあいい。午後遅くに買出しに出かけて、日が沈んだ直後に発つ。しっかり休んでおけ」

「わかった」

アシェリは素直にうなずいて、さっさと寝台にもぐりこんだ。

その場所に近づくまでに、うまく聞き出す方法を考え出さねばならない。蚤の跳ねる掛布にもぐりこんで、ヨブは目を閉じた。

考え事のせいか、眠りはなかなか訪れなかった。空が白んだあとになって、ようやくヨブは浅い眠りについた。そしてきれぎれの夢の中で、この旅を命じた長の、表情のない顔を見た。わかっているなど念を押し、温度のない眼を。

翌日は風がなかった。砂は舞い上がらず、空がよく澄んでいる。その分だけ陽射しはより強く、二人は予定よりも日が傾くのを待ってから宿を出た。

「それにしても、砂漠に入って以来、女の姿をほとんど見ないな。いてもガキか、婆さんばかりだ。いったい女たちはどこにいるのだ」

アシェリがそんなふうにはぼやいたのは、市場で食料を買い込んでいる最中だった。固焼きパンと引き換えに、店主へ銅貨を渡しながら、ヨブは振り返らずに答えた。

「女がおいそれと外を出歩くものではない」

「そんな話があるものか。夜中だとでもいうならわかるが、まだ空も明るいのに」

「陽が高かろうが、若い女が、男のいる場所に姿を見せるものではない。そのようなことをするのは、娼婦くらいのものだ」

ヨブが苦々しくいきると、アシェリは唾然として、手にしていた荷を取り落としかけた。だがヨブは、男の無知を笑いはしなかった。北の国々では、女たちが顔を晒してそのあたりの道を歩いているところもあると、前に聞いたことがあったからだ。眉唾もの話だと、耳にしたときには思ったが、アシェリの様子からすると、それも本当のことなのだろう。

「では、どうやって暮らすのだ。水を汲むのは。日々の買い物は」

「売りにくる。それで足りなければ、子どもか下男でも使いに出すだろう」

それを聞いたアシェリは、頭を振ってため息をついた。

「なるほどなあ。女たちを家の中に隠しているというわけか。値の張る持ち物をそうするように」

その口調は、皮肉めいてはいなかったが、ヨブは思わず顔をしかめた。

「では訊くが、お前たちは自分の女にそのあたりを出歩かせて、平気だということか。どこの誰とも知らない男の、目に付くところに」

くくっと喉の奥で笑って、アシェリはいった。

「なるほど、賢いやり方なのかもしれないな」

言葉としては肯定だったが、納得したというような口調でもなかった。それからふと思いついたように、アシェリは問いを重ねた。

「それでは、貧しい男たちはどうするのだ。女を家で遊ばせておくような、資産のない男は」

「そのような男に、妻を娶る資格などあるはずがない。小金があるときに、安い娼婦でも買うだろうさ」

財のある男は何人でも妻を持つのが当然のことだし、逆にそれだけの男でなければ、父親もなかなか娘をやりたがらない。食料を買い込む合間に、ヨブがそう説明すると、アシェリは理解し難いというように、首を降って肩をすくめた。

「娘をやる、というのがまずわからん。女とは、やったりもらったりするものではないだろう」

「では、お前の故郷ではどうするのだ。妻を娶らなければ、子は。家は誰が継ぐのだ」

「ふつうは男も女も、己が生まれた家で一生を終えるものだ」

アシェリはあっさりとした調子でいった。「女はその家で子を産んで育てる。その顔を見るために、男はせっせと女のもとへ通う」

あまりの話に、ヨブが言葉をうしなう番だった。アシェリはため息交じりに付け加えた。

「いっておくが、俺の故郷だけではないぞ。いままで見てきた限りでは、そういう国がほとんどだった」

その家にあまりに女ばかりが生まれすぎるようなら、家を分けるか、養女に出されることもあるが。そう説明しながら、アシェリは未練がましく、女の姿のない雑踏を見渡した。

「しかしそれではいったい誰が、女たちを食わせるのだ。親兄弟か」

「男がわざわざ食わせずとも、女たちは勝手に食うさ」

なんということもないようにアシェリはいい、ヨブはとっさに天を仰いだ。

女に外で働かせるなどということは、男にとって、恥以外のなんでもない。戦や病で稼ぎ手を失えば、女もやむに止まれず酌婦もやろうし、体も売ろう。気の毒な話とはいえ、しばしばあることだ。だがアシェリにとっては、女が働くというのは、むごいことでも何でもないようだった。

「山あいの、畑だの織物だので食っていくような村ならば、女たちのほうが、男よりもよほど働く。まあそうした按配は、土地ごとに違うものだが」

ヨブは首を振って、それ以上の質問を差し控えた。聞けば聞くほど、頭の痛くなるような話だった。

妻たちが自分の知らない間に出歩いて、気軽にほかの男と口を訊くところを思い浮かべて、ヨブは己の想像に勝手に腹を立てた。

風がない分、昨夜よりいっそう星明かりが眩しかった。その中を歩きながら、アシェリは砂漠の暮らしについて、飽きずにあれこれと質問をかさねた。それにひとつずつ答えてやりながら、それにしても口数の多い男だと、ヨブは面覆いの下で苦笑した。

やがて夜ふけになり、背後から上ってきた月に照らされて、二人分の影が細く伸びた。自分の影と、その横でより長く落ちる連れの影を見ながら、そういえば十年前のあの男も、アシェリと同じようにひどく背が高かったと、ヨブはふとそのことを思った。

「砂漠の外では、みなお前のように背が高いのか」

アシェリはさて、と首をかしげた。

「俺はまあ、故郷のほかの連中と比べれば、かなり背のあるほうだったが。しかし、土地によってさまざまのようだ。ずっと北のほうの土地には、まるで巨人のような大男たちがいるからなあ」

「まるでおとぎ話だな」

半信半疑でそう返すと、アシェリは笑ってうなずいた。「遠い国の話というのは、そのように聞こえるものだ」

砂漠は広い。異なる三つの言葉を話す何百万もの人々が、四つの国と五十を越える部族にわかれて、各地の水場に点在するように暮らしている。いま目指している南西の海岸をのぞけば、まるで涯がないように思えるが、その砂漠にも限りがあるのだという。そのことに、ふと眩惑されるような思いがして、ヨブは首を振った。

「世界は、砂漠をいくつも集めたよりも、ずっと広いのだというが」

ヨブの眩暈に対して、アシェリはどこか厳かな調子でうなずいた。ヨブはいっとき無言で、砂漠よりも広い大地というものを、想像してみようとしたが、じきに諦めた。途方もない話だ。

「この砂漠では、太陽や月は、ほとんど頭の上を通るだろう」

アシェリが突然、そのようなことを言い出したので、ヨブは面食らった。怪訝な思いを隠しもせず、それでもいちおううなずいて見せると、アシェリは楽しそうに目を輝かせていった。

「では、北にゆけばゆくほど、その通り道が低くなるのを、あんたは知っているか」

この問いにも、ヨブはうなずいた。南北へ旅をすると、月や星の高さはわずかに変わる。地平線の向こうに隠れて見えなくなる星もある。そのようなことも知らずに、砂漠の旅などできようはずがない。

「へえ、さすがは旅人の国だな。俺の故郷では、誰ひとりその話を知らず、何をいっても信じようとはしなかった。俺はあの村では、頭のおかしい男だと思われているのだ」

そういうわりには、それを気に病むふうもなく、アシェリはさも可笑しそうにくつつと笑った。

「それではあんたは、さらにどこまでも北を目指すと、その涯にはどのような場所があるか、知っているか」

「冷たい海があるのだろう」

聞きかじりの知識でヨブが答えると、アシェリは笑って首を振った。「そのさらに北だ」

ヨブが降参の意味で首を振ってみせると、アシェリはにやりとした。

「北の涯の、そのさらに最果てまでゆくとな、そこには太陽の沈まない国があるのだそうだ」

「なんだ、馬鹿馬鹿しい」

ヨブは一蹴して、真面目に話を聞いた自分の馬鹿らしさに腹を立てた。

「信じないか」

「信じられるはずがないだろう」

ヨブがいうと、アシェリはあっさりとうなずいた。

「そうだな。俺も実は、まだ信じられない。自分の目で見たわけではないからな。だが、いつかは行って、確かめてみたいものだ」

そういうアシェリの目は、楽しげに輝いている。その少年じみた表情を見て、ヨブは首をひねった。外見からは自分と同じ年頃のように見えていたが、もしかするとこの男は、思っていたよりも若いのではないかという気がした。

「お前、歳はいくつだ」

「歳？」

鸚鵡返しに聞き返されて、ヨブはまさか、と思った。

「お前、自分の歳も知らないのか」

「歳というのは、いったいなんのことだ」

ヨブは目を剥いた。異国の者だけに、ただ単に歳という単語を知らないだけかとも思った。

だが、何度か訊き方を変えてみても、アシェリは困ったように首をかしげるばかりだった。ヨブは恐る恐る質問を変えた。

「まさかお前たちの土地では、自分が生まれてから何年が経ったかを、数えないのか」

「待ってくれ。年、というのはなんだ」

絶句して、ヨブは目の前の男の顔をまじまじと見た。だが、そこにはとぼけてみせるような調子は、まるで見当たらない。

「……空の星は時間が経つにつれて、ゆっくりと空を巡るだろう。あの位置が、日を追うごとに少しずつずれていくのは知っているな」

もちろんだといって、アシェリはうなずいた。そのことにいくらか安堵しながら、ヨブは続けて確認した。

「では、月が満ち欠けするのを十六と半分かぞえると、星の位置がすっかりもとに戻るということも、知っているだろうな」

ヨブとしては、まさかというつもりで訊いたのだが、アシェリの相槌はあろうことか、「へえ、そうなのか」という呑気なものだった。

とっさに言葉を失って、ヨブは額を押さえた。アシェリは感心したように唸って、空の星を目で追いかけている。

「お前によほど学がないのか、それともお前の故郷では、誰もそのことをしらないのか」

訊くと、アシェリは困ったような顔をした。

「俺はたしかに、学問がない。だがこれまでどこの国を旅していても、そのようなことを真剣に数える人々を見たことがなかった。ただ、砂漠に住む人々が数を大変に重んじるというのは、たしかに耳にしたことがある」

日が何度昇り、月が何度満ち欠けしたか。そうした以上の長い単位で時を数える必要を、これまでに感じたことがなかった。アシェリはあっさりとなんなふうに入った。

確かに、砂漠の暦はほかのどの場所のそれよりも、はるかに優れているのだという話は、どこかで聞いたことがあった。だが、そもそも暦を数えない人々がいるということは、ヨブの想像の外のことだった。

いっとき打ちのめされてから、ヨブは唸った。

「学問は俺にもないが、それにしても暦くらいは、子どもにでも読めるだろう。お前はいくつもの土地を旅してきたというが、暦を知らずに、どうやって星を読むというのだ」

ああ、とアシェリはうなずいて、急にわかったような顔になった。何を納得したものか察しがつかず、ヨブが眉をひそめていると、アシェリは面白がるような目をして説明した。

「きっと、それだよ。この砂漠では、星をよく読まなければ旅ができない。だからあんたたちの間では、そうしたことが重んじられるのだろう」

いっていることの意味がわからず、ヨブが聞き返そうとしたとき、急に強い風が吹いて、驢馬がいち早く身を伏せた。

彼らはいっとき足を止めて、その場で姿勢を低くした。砂が舞い上がり、激しく体を打つ。ヨブは面覆いを引き上げて、しっかりと目を閉じた。アシェリが咳き込むのが、風の音にまぎれて聞こえる。

やがて風が止むと、彼らは立ち上がって目を開けた。服を手で払い、顔についた砂をぬぐう。足元には、つい先ほどまでとはまるで違う風紋が広がり、やってきたときの足跡は、すっかり砂に埋もれてしまっ

いる。方角を確かめるために空を仰ぐと、《七の導きの星》は空の端で、ほとんど沈みかかっていた。

アシェリが顔についた砂をこすりながら、話の続きをはじめた。

「ほかの土地では、何も星を読まなくとも、旅はできる。前後左右、どちらを見ても同じような景色というのは、砂漠の外ではそうそうないものだ。たいていもっと、地形がはっきりしている」

歩きながら、アシェリは説明した。驢馬の手綱を引きながら、ヨブは信じられないような思いでその話を聞いた。

「だが、歳を数えないというのなら、お前の郷の男たちは、どうやって兵役につくのだ」

その質問に、アシェリは妙な顔をした。

「俺の故郷か。ほかの人里からずいぶん離れた小さな村で、役人がわざわざ兵士を募りにくるような場所ではなかった。だが、そうだな、俺がこれまで立ち寄った土地では、たいてい兵隊には、なりたいたいものがあるようだったが」

「なりたくないものがあるのか」

「いるさ、そりゃあ」

ごく普通のことをいうように、アシェリはいった。「あんたらは違うのかい」

「当たり前だ。そんな臆病者がいるはずがない。いるとすれば、それは男ではない」

あきれ果てて、ヨブは吐き捨てるようにいった。アシェリは反論せず、小さく口の端を上げて、感心してみせた。

「そうか。砂漠の男は皆、戦士なのか。そいつはすごい」

言葉自体は賛辞だったが、その声は本気の調子ではなかった。ヨブは憮然として問い返した。

「それではお前たちの土地では、敵に攻め込まれたら、どうするのだ。兵士でない男は、女子どものように、敵から逃げ惑うのか」

「そうだなあ、と首をひねって、アシェリはいった。「まあ、逃げるやつもいるだろうし、いざとなれば鍬でも持って、なりふりかまわず戦うやつもいるだろうな」

「ろくな訓練も受けずにか」

「そうとなればな」

アシェリはうなずいて、それから小さく笑った。

「でも、まあ、俺の故郷では、戦に巻き込まれることなど、まずないからなあ。なんせ、貧しいところだから」

のんびりとそう言って、アシェリは目をこすった。砂が入ったのだろう。面覆いをきちんとつけていないからだと思っただけ、それよりも、話の内容のほうが気になった。

「そんな土地が、あるのか」

「ある。奪ってもうまみのない土地というものは、けっこうどこにでもあるものだ。そんなところにでも住む人間はいる、というべきだろうか。……ここらでは、戦は多いのか」

「戦など、珍しくもない。水が枯ればすぐだ」

「よそのオアシスを襲って、水を奪うのか」

「ほかにどうする。移住できるような距離に、ほかの水源があるならば、話は別だが」

だがそのような場所は、めったにあるものではない。ヨブがそう続けると、アシェリは何か、考えこむようだった。顎を撫で、鬚の中に絡んだ砂をつまみながら、いつか沈黙していたが、やがて口を開いた。

「金を払って、分けてもらうことはできないのか」

面食らって、ヨブは目をしばたいた。連れの男の正気を疑いかけたが、アシェリの表情を見る限りでは、どうやら真面目にいつているらしかった。

「隣のオアシスが枯れたということは、地下水脈の動きが変わったということだ。こちらのオアシスも、じきに枯れる可能性がある。そのようなときによそものに水を分けて、自分の一族を渴かせる危険をおかす長など、そういうものか。いるとすれば、よほど金に目の眩んだ愚か者だ」

「そういうものか」

アシェリは納得しがたいように首をひねって、遠く、地平線を見渡すような仕草をした。そんなことをしても、砂漠の遥か地下の水脈が、透けて見えるわけでもないだろうが。

やがてふたたび風が吹いて、砂が舞い上がり始めた。今度は足を止めねばならないほどのものではなかった。砂が目や口に入らぬよう、ヨブは面覆いを上げて、足を速めた。

歩きながら、ヨブは渴きを恐れずにいられる世界に思いをめぐらせた。いつでも雨が降り、女たちが自由に外を出歩く土地。年月を数えることを知らぬ人々の暮らすという土地に。

途中で一度だけ、砂嵐が激しく足止めをくらった晩があったが、そのほかではごく順調な道行きだった。いくつものオアシスを転々と辿りながら、南西へ進んでゆくにつれて、砂はいっそう熱さを増す。やがては夜になっても、かなりの時を待たねば、靴を履いた足が焼けると思えるほどに。

各地のオアシスを辿りながら、十二夜をかけて歩いたところで、延々と広がっていた砂の海は、ひび割れた赤い大地へと変わった。南西の岩砂漠、人の住まぬ不毛の大地だ。

宙を舞う細かな砂がない分、空はくっきりと澄んで、北の砂漠では見わけることのできない暗い星までが目に映る。空を見上げて、ヨブは目を細めた。流星が南の空へふたつ続けて、尾を引いて落ちていく。

新月を過ぎて、いまは徐々に月が膨らんでゆく時期にあたる。アシェリがつられたように青褪めた半月を見上げ、ふとため息を漏らした。

「それにしても、不思議なものだ。土地が変われば、月がのぼる高さどころか、色まで変わる。これほど青い月を、俺は初めて見るぞ」

ヨブは黙って肩をすくめた。案内人としては、この先の道のほうがいっそう神経を使うのだが、岩砂漠に入ってから、アシェリの足取りは、むしろ軽くなったようだった。

「この先には人里がない。辛い道になるぞ」

そう告げても、そうかとうなずくばかりで、アシェリは不平の一言も口にしない。それがヨブには、意外なように思えた。

「しかし、そういうわりには、水はあまり積まなかったのだな。食糧はずいぶんと、多めに買い込んだようだったが」

アシェリは不思議そうに言って、荷を運ぶ驢馬の黒い瞳を覗き込んだ。

「ああ。水場を辿ってゆくからな。だが、人の住む町はない」

「水があるのに、住む者がいないのか」

「夜にしか外を歩いていないから、実感が湧かないかもしれないが、ここまでくればもはや、短い時間ならば太陽の下に出ているという土地ではないのだ。人などあつという間に、焼け死んでしまう」

そのような土地に人は住めまい。そうヨブが説明すると、アシェリはへえ、と感心したような声を上げて、足元を指さした。

「だが、獣や虫はいるようだ」

その指の先には、赤茶けた毛皮の鼠がいた。器用に虫をつかまえて食べていたのが、こちらの視線に気

づいて耳をぴくりとさせると、あっという間に走り去ってしまった。

「砂漠では、夜のほうが賑やかだな。ああしたやつらは、昼間はどこにいるのだろう」

「砂の中に。岩陰に。あるいは地の底に」

「地の底？」

聞き返されて、ヨブは思わず苦笑した。この男と話していると、まるで小さな子どもにもものを教えているようだった。とりわけものを知らないことを、ちっとも恥ずかしがらないところが。

「そうだ。砂漠の地下には、水脈があるといっただろう。地面の下にはところどころ、水に削られた空洞がある。そういう場所を辿って、ここから先の道をゆくのだ」

「日中を、地下にもぐってやり過ごすのか」

「ああ」

ヨブがうなずくと、ひどく感心したように唸って、アシェリは顎をこすった。

「そういう場所は、たくさんあるのか」

「まれだ。だから、正しく辿る道を知らなければ、このあたりの土地を生きて通ることはできない」

二度うなずいて、アシェリは遥かに煙る地平線を、見通すような目をした。ここから海が見えるわけでもあるまいが。

夜も更けた頃、ヨブは少し休息をとろうとって足を止めた。驢馬にも荷を下ろさせて座ると、赤い大地はすでに熱を失っており、二人の尻を冷やした。

熱い珈琲を沸かし、塩の欠片を舐めるあいだ、アシェリはいつか無言で座っていたが、やがてぽつりと問いかけを落とした。

「海までは、あとどれほどだ」

「九夜を歩けば、その次の夜の早い時間には、海をのぞむ場所へ出る」

ヨブは断言した。砂嵐はここまではやってこない。また、精確な日程と道のりを辿って、かならず陽の昇る前に次の地下洞窟まで辿りつかなければ、どのみち灼熱の陽に焼かれて死んでしまう。

熱い珈琲を、苦そうにちびちびと舐めながら、アシェリはふと思いついたように、話を蒸し返した。

「なあ、このあたりに人里は、まったくないのか」

「そういっただろう」

呆れたように答えながら、ヨブはひやりとするものを胸のうちに覚えた。

「そうか。そうだよなあ」

「なぜ、こんな不毛の大地に、人が住むと思うのだ」

穏やかならぬ内心を押し殺して、ヨブは訊いた。

「あんたが道をよく知っているから」

アシェリはなんでもないのでいって、辺りを見渡した。「用もないのに、こんな遠くの土地まで、道を知り尽くしている必要はないだろう」

「塩を取りにくるのだ」

用意していた言葉を口にして、ヨブはアシェリの表情を観察した。だがいくら見ても、言葉以上の他意をそこに見出すことはできなかった。

「目的の海辺からは少し離れるが、よい塩が採れる場所がある。だがそこは、我々の聖地でもある。けして盗もうなどと思うなよ。神罰が下るぞ」

嘘ではないが、事実のすべてでもないことを告げて、ヨブは厳しい目を向けた。だがアシェリは肩をすくめて、あっさりと言いはらした。

「盗むもなにも、あんたが道を教えてでもくれないかぎり、俺はそこにたどりつけもしないだろうさ。そ

れに、あんたらにとって塩は貴重品かもしれないが、ほかのたいていの土地では、それほど高価なものでもない」

そんなふうにご答えたアシェリの表情は、こちらの言い分をまるきり信じているように、ヨブの目には見えた。

真実は、塩どころの話ではなかった。もしもアシェリが、聖地の真実を知り、あるいは探るそぶりを見せようものならば、それなりの手段に出ねばならなかった。長の冷ややかな眼を思い出して、ヨブは暗澹たる思いをもてあました。

秘された聖地の名を、エルトーハ・ファティスという。いま彼らがいるこの場所から、歩いてほんの数日の距離に、その場所への入り口がある。

ヨブはアシェリに、こんな場所に人は住めないといったが、それは地上の話だ。地下深くには何千人という人々が、身を寄せ合って暮らしている。

彼らは遙か遠い過去にイビタルの一族から分かれた、遠い遠い血族だ。豊かな水を湛える暗がりの町で暮らす彼らと、毎年さだめられた日にファナ・イビタルから訪れた商隊とは、ひそかに荷のやりとりをする。

なぜ聖地の存在が、固く秘されなければならないのか。人々がなぜそうまでして、このような不毛の地に隠れ住まなければならないのか。

エルトーハ・ファティスでは、尽きせぬ銀が採れるのだ。

明け方まで間もない時刻に、二人は最初の地下洞窟の入り口へとたどりついた。

ひたすら平坦な地面にときおり岩の転がる、広大な岩砂漠の中で、その辺りだけ地面にいくつも亀裂が入り、あるいは突如盛り上がって崖を為している。その崖にひび割れが開いて、そのまま奥深くまで続いていた。

こうした洞穴には天然のものもあれば、かつて掘られた鉱脈のなごりもある。この場所は前者だった。

最後のオアシスから距離があったため、ふたりはこれまでの旅路よりも、早足で歩かねばならなかった。旅の前半では、アシェリのほうが疲れをあらわにしていたのだが、打って変わって、いまではヨブよりよほど余裕があるように見える。それがヨブには意外に思えたのだが、訊けば、アシェリはあっさりとして笑って説明した。これまでは砂に足をとられることに慣れていなかったため、体力を消耗したのだという。なるほど、もともと世界じゅうを旅してまわっているというだけのことはあった。

空の端はもう白みかかっている。驢馬を先にくぐらせてから、洞穴の入り口で、ヨブはふと立ち止まった。

「どうした」

怪訝そうな声を上げるアシェリを、ヨブは手で制した。

「少し待て。長くはかからない」

「急がなくて大丈夫なのか。陽射しは危険なんだろう」

「そうだが、夜が明けた直後までは、まあ大丈夫だ。地面が熱せられるまでに、少しは間があるから」

なるほど、とうなずいて、アシェリは首をかしげた。

「ならばいいが、いったい何を待っているんだ」

ヨブは答えず、入り口の岸壁にもたれて空を見あげた。

断ったとおり、長くは待たなかった。じきにヨブは、白みがかった空の端を、無言のうちに指さした。ア

シェリが顔を上げて、その指の先を見つめる。

白い影がいくつも、薄明に包まれた空を切り裂くようにして、空を横切っていく。最初に三羽。あっという間にそれらが通り過ぎていき、そのあとを、次の四羽が追いかけてゆく。数羽ずつの小さな群れとなってやってきた鳥たちは、はるか地平線の彼方へと、次々に吸い込まれていく。

「あの鳥がヨブだ」

アシェリは空を見上げたまま、眩しげに目を細めた。

「きれいな鳥だな」

鳥たちの姿はじきになくなり、二人はひび割れの奥へ向かった。洞窟は、ゆるやかな下りの勾配になっている。中は暗闇で、入り口から遠ざかると、すぐに足元が危うくなる。ひとりずつ、岩壁に手をつきながらゆっくり進まねばならなかった。

岩肌はひんやりと湿っていた。さらに奥のほうでは、かすかに水音が響いている。先に入らせた驢馬は、陽の届かない場所でおとなしくうずくまっていた。砂漠に生まれた獣の本能で、いわれずとも太陽の恐ろしさを知っているのだろう。

暗闇の中で軽く食事を済ませて、驢馬のそばで待っているようにアシェリへ言い残すと、ヨブは手探りで奥に向かった。少し距離はあるが、それでも歩いて下れるところに、細い水の流れがある。

二人ぶんの皮袋に水を満たして、ヨブは何度も暗闇の中を往復した。次の水場まで、ここで汲んだ水でもたせなくてはならない。

やがてじゅうぶんな量を汲んだところで、ヨブも腰を下ろし、体を休めた。先に眠っていたかと思ったアシェリは、岩壁に背中をもたれかけさせて、水音に耳をすませていたようだった。

「不思議なものだ。外はもう、灼熱の大地へと変わっているのだろう。さっきの鳥たちは、どうやって生きているのだろうか」

まだどこか心を空に残したような声で、アシェリが呟いた。

「あの種類は、翼が強い。この目で見たわけではないが、話にきくところによると、焼け死ぬ前に砂漠の上空を抜けて、さらに遠くの空まで飛んで行くのだそうだ」

へえ、と感心したようにいって、アシェリは笑った。「いい名前じゃないか」

洞窟の中は暗すぎて、ヨブにその表情は見えなかったが、目じりに皺を寄せて笑うそのようすが、目に浮かぶような気がした。

この妙な男を気に入っている自分に、ヨブは気がついていて、そしてそれは、けして都合のいいことではなかった。もし、アシェリが聖地の存在をかぎつけたとして、果たして自分にこの男を殺せるのだろうか。ヨブは自問したが、答えは見出せなかった。

「なぜお前は、灼熱の海などを見たいというのだ」

ほとんど切実な思いで、ヨブは何度目かの問いを口にした。

アシェリは笑ってごまかす代わりに、言葉を探しあぐねるような沈黙を置いた。何度か、なにかを言いかけては、口ごもる。

どうか話してくれと心のうちに念じながら、ヨブは待った。何か、俺が納得し、安心してお前を連れ帰ることができるような、そういう理由を聞かせてくれ。

「もう少し」やがてアシェリは、ぼつりといった。「もう少しして、海が見えたなら、そこで話そう。いまはまだ、どうにもうまい言葉が見つからない」

そうかと答えて、ヨブは嘆息をこらえた。

ヨブは眠る前に、自分の荷を引き寄せた。香料を取り出して、壁にこすり付ける。闇になれた目が、かすかにものの影を捉えている。真暗闇に見えても、入り口の亀裂からの光が壁に弾かれて届くのだろう。

「何か、妙なおいがるな。薄荷のような……」

アシェリがいて、落ち着かないように影が揺れた。

「我慢しろ。蛇よけの香だ」

へえ、と感心したように相槌をうって、いつか沈黙してから、アシェリは感慨深げに呟いた。

「蛇というものは、どこにでも仲間がいるのだなあ。山の中しかり、水の中しかり……」

何にそれほど感心するのかわからなかったが、ヨブは口をはさまずに、アシェリが話すに任せて耳を傾けていた。

「俺は実際にやってくるまで、砂漠というものは、もっと生き物のいない、不毛の地だと思っていた。だが、人は大勢住んでいるし、ちゃんと虫も獣も、蛇までいる。セスはさすがに、いないだろうなあ」

「セスとはなんだ」

「水の中の生き物だ。蛇のような鱗があって、蛇ほど細長くはない」

「ああ、魚のことか」

いるのか、と驚いたような声を上げたアシェリに苦笑して、ヨブはいった。

「いるさ。なんなら帰りにオアシスの水を、のぞいて見るといい。ただし、水泥棒に間違えられないよう、気をつけることだ」

話しながら、この男を連れてファナ・イビタルへ戻るつもりでいる自分に気がついて、ヨブは暗闇の中で目を伏せた。

四日後、五つ目にたどりついた地下洞窟は、ほかとくらべて、ずいぶんと広さがあった。水音も、遠くでひっきりなしに響いている。身体を休めようと横になりながらも、その音が気になるのか、アシェリはなかなか寝付けないようだった。何度も身じろぎするせいで、そばにいる驢馬が落ち着かず、迷惑そうに耳をぴくぴくさせている。

ずいぶん口数の多い男だと思っていたが、目的地が近づくにつれ、なぜかアシェリの口は、少しずつ重くなっていくようだった。この日はとうとう、歩きながらほとんど何も話さなかった。

それでもさすがに、やってこない眠気をもてあましたのか、アシェリはほとんど何時間ぶりかで、物憂げに口を開いた。

「この奥には、何があるんだろうな」

その問いに、ヨブは闇の中で険しく目を細めた。それでも声に警戒を出さないように、努力を払いながら、なんでもないように答えた。「滔々と流れる、冷たい水が」

「この空間は、どこまで続いているんだろうか。途中ですっかり水に埋まってしまうのか」

「さてな。……奥へ入ってみようなどと思うなよ。命の保障はできないぞ」

「あんたは、ずっと奥までいったことがあるのか」

「いいや。だが、こういう洞窟の奥には、ときに蛇ばかりではなく、人を襲う獣がいる」

「こんな、日も射さない闇の中にか」

アシェリは驚いたようだった。ヨブは相手に見えないことを承知でうなずいて、重々しくいった。

「そうだ。目でものを見るかわりに、鼻と耳が利く。鋭い牙と爪を持つ、凶暴な獣だ」

ヨブは話しながら、自らも闇の奥に目を凝らした。

「足元が脆くなっている場所もある。砂漠の地下水脈は、地上のようすからは想像もつかないような激流

だ。落ちれば、ひとたまりもないぞ」

「見てきたようにいうのだな」

ひやりとしながら、それを声に出さないように、ヨブは言葉を返した。

「いくつもの話が、語り継がれているのだ。砂漠に暮らすものならば、幼い子どもでも聞き知っている」

へえ、と感心してみせる声が、いくらか元の明るさを取り戻したようだった。「なにか、聴かせてくれるか」

アシェリのその言葉に、他意はないように思われた。

「俺はあまり、よい語り手ではないが」

そう前置きして、ヨブは少し考えた。それから語り始めた。砂漠の地下洞窟に広がる、暗闇について。

真アデイス暦で九八一年のことというから、三百年あまりも昔の話になる。ああ、そうだ。十六と半月で一年だと教えたな。つまりは月が、五千も満ち欠けするほどの遠い昔のことだ。

いまはとうの昔に枯れた南東部のオアシス、ファナ・ノーヴィスに暮らしていた部族の若者が、遠路はるばるこの南の岩砂漠まで、五人の手勢を率いてやってきた。いや、いま俺たちがいるこの洞穴ではないだろう。正確な位置は知られていないが、おそらくはもっと東のほうの地下洞窟ではないかと思う。

五人の手下を率いてきた男の名は、イ・ハイダル。まだ十七歳の――成人してさほどたたない歳若い者で、その部族の長の、三番目の息子だった。

彼は二人の兄に比べれば腕が立たず、学も劣るということで、父である長からは、つねづね軽く扱われていた。それで何とかして功を上げ、その目に留まろうとしたのだな。

しかしあいにくというべきか、長く戦がない時期が続いていた。当たり前にしては手柄の立てようもない。それでイ・ハイダルは男たちを従えて、新しい道を拓こうと思った。我々の部族が見つけたような質のよい塩か、そうでなければ砂漠のどこかに眠っているかもしれない、何らかの新しい資源を求めて。

だがこの岩砂漠を生きて通ろうと思えば、いま俺たちがそうしているように、日のないうちに次の洞穴へとたどりつかねば、まず命はない。しかし彼らは初めてその土地に足を踏み入れたのだし、夜更けまであてもなく彷徨い、あるかないかもわからない洞穴を探さねばならなかった。それも、身を潜めて陽を避けるに十分な深さのものでなければ、意味がない。そうした場所が見つからなければ、夜明けまでに急いで引き返すよりほかはない。

それだけでもイ・ハイダルの手下たちにとっては、貧乏くじであったのに、さらに、この若者は血気盛んで、年若いものにありがちなように、無謀さをこそ勇敢な男の証だと思い込んでいた。

彼らは最後のオアシスを拠点に、夜毎に岩砂漠を歩きとおしては、そのたびに肩を落として引き返した。また次の夜には、何の確信もないままに、前の夜と違う方角へと向かう。そのようにして、十日目の夜更け、ようやく彼らは最初の水場を見つけた。

夜明けを告げる風（後編）

岩砂漠に入って十日目の夜は、もはや寒くはなかった。あたりはむっとするような湿り気に包まれている。海が近づいてきたのだ。

ほんの数日前には、アシェリが夜の冷え込みに震えていたというのに、いまでは深夜になっても蒸し暑く、ともすればのぼせ上がりそうだった。面覆いも外套もとっくに外して、荷物の奥にしまいこんでいる。暑さそのものには慣れているヨブでも、空気が孕んだ水気の多さにあてられて、疲労が増すように思われた。

広大な岩砂漠は途切れ、足元はいつしか水を含んだ土へと変わっていた。風に流される砂でも、硬い岩の大地でもない。それはヨブにとって長いあいだ、世界の涯を象徴する、ひどく特異な光景だった。しかし、アシェリがやってきた砂漠の外では、ほとんどの地面はこのようにやわらかく湿って、風が吹いてもほとんど形を変えないのだという。

だがアシェリの語る大地には、数え切れないほど多くの草や木が、見渡す限り繁っているということだった。比べていま彼らの足元には、ただ赤茶けた土ばかりが延々と広がっている。

流れ落ちる汗を拭いながら、アシェリは辺りを見渡した。

「洞窟の中には苔が生えているのに、一步外に出たとたん、草木の一本もないのだな。見れば地面は湿って、いかにも植物が芽吹きそうに見えるのに」

「夜でこそ、こうして外を出歩くこともできるが、昼間には湯を沸かす鍋の真上のように、熱い蒸気が満ちている。昨日の昼間にいた洞窟でも、ずいぶんと奥のほうまで潜っただろう。それでもせねば、地上の熱気から逃れられないのだ」

「ここは、死の大地なのか」

妙に深刻な顔つきで、アシェリがそう囁いた。だが、ヨブは首を振った。

「いいや。まったく生き物がいないわけではない」

「沸き立つ鍋の上のようだという、地上にもか」

ヨブはうなずいた。嘘ではなかった。しかしいま、辺りは見渡す限り死のような静寂に包まれている。彼らの足音のほかは、風の音が響くばかりだった。アシェリは腑に落ちないという顔をして、もう一度、周囲を見渡した。

「だが、もう夜だというのに、まるで生き物の姿を見ないぞ」

「いまはな」

素っ気なくいって、ヨブはそれ以上の説明をしなかった。アシェリは首をひねったが、さらに重ねて問うことはしなかった。

一晩を歩きとおすと、赤茶けた崖に、縦に細長く切れ目が入っているのが見えた。細いといっても遠目に見ての話で、近づいてみれば、充分に人の通れる幅がある。ここは水や風の抉った洞穴ではなく、人の手で作られた空洞だった。

ここからまた少し西へ進むと、本当に塩の採れる場所がある。だが、そこまでのあいだには、もう天然の洞窟がない。正確にいうと、かつてはあったのが、五十年ほど前に落盤で、すっかり埋まってしまったのだという。それでヨブの遠い祖先たちが、繰り返しここまで足を運び、夜のわずかな時間を縫うようにして、長い時をかけて人工の洞穴を作った。

「ここが最後の中継地だ」

そういって、ヨブは洞穴の中に驢馬を押し込んだ。人の手で均一に掘られた洞穴には、かなりの奥行き

と深さがあり、その奥では、岩壁から冷たい水が滲み出している。彼らは暗闇の中で水を汲んで、体を休めた。

涯の海まではもうわずかな距離だ。しかし、いまからすぐに発って、夜明けまでに戻ってくるには時間が足りない。もうひとつ昼をやり過ごして、次に陽が沈んでから出立することになる。

「それにしても、すごい霧だな」

アシェリが唸ったとおり、辺りは白い霧に満ちて、それは洞穴の中にまで忍び込んでいた。外に出たところで、もはや空に星の並びを正確に見出すことなど、望むべくもない。だがそれは、あらかじめわかっていたことだ。煮えたぎる海にほど近いこのあたりでは、いつでもあたりは霧に覆われている。その代わりに、濃い霧を透かして頭上に輝く月を頼りに、方角を知るのだ。そのために、満月の夜に到着するように日程を組まねばならなかった。

「ここまで来れば、海は間近だ」

「そうか」

アシェリは、どういふわけか、沈鬱に沈んでいた。あれほど来たがっていた場所が、もう目の前だというのに。

量の少ない食事を終えると、ヨブは壁にもたれかかって眼を閉じた。

アシェリは、まだこの地を目指した理由を、話してはいない。問いただすべきか、ヨブは迷った。銀に用がないというのなら、理由など何でもかまわなかった。だが長は、それでは納得しないだろう。

しかし、どこか思いつめたように沈黙しているアシェリに向かって、無理に問い詰めることもためらわれた。

迷ううちに、いつしか眠りに落ちていたらしい。やがて頬をなでる湿った風に起こされて、ヨブは体を伸ばした。洞穴にふたたび、白い霧が流れ込み始めている。夜がやってきたのだ。

それからさらにしばらくの時を、二人は腹ごしらえをしながら待った。洞窟の奥深くでは、霧はただ湿っているばかりだが、外の熱せられた蒸気がほんとうに冷めるまでには、時間がかかる。

干した果物は、最後のひとつを半分ずつにわけた。干し肉はまだ余裕があるが、人里のある場所に戻るまでのあいだ、帰り道の食事は、味気のないものになるだろう。

やがて無言で身支度をして、ヨブは不安げに鼻を鳴らす驢馬の背を、なだめるように叩いた。そして自ら背負ってきた荷物のほとんどを、そのそばに置いて、水の袋とナイフだけを腰に括りつけた。

「こいつは、置いてゆくのか」

「目指す場所までは、じきだ。水だけを持って出ればいい。驢馬は、帰りに迎えに来る」

説明すると、アシェリが同じように支度をする物音がした。

二人は無言で洞穴を後にした。空を仰ぎ、丸い月の形と崖の地形とを見比べてから、ヨブは慎重に一步を踏み出した。このような霧の中では、方向感覚はすぐに狂う。月と、おぼろげに見える地形だけが頼りだった。

頻々に空を見上げながら歩くうちに、やがてほとんど何年ぶりかに嗅ぐ潮のにおいが、ヨブの鼻をくすぐった。濃い霧と前方の丘とに遮られて、まだ海はこの目に見えないが、あとは時間の問題だった。

やがて、低くどうどうと響く音が、霧を越えて二人の耳に届き始めた。それは、地下洞窟にいるときにはるか足元から聞こえる音にも、どこか通じるものがあったが、それよりもさらに低く、そしてゆったりとした強弱があった。

「潮騒だ」

アシェリは呟いて、耳を澄ませた。ヨブは驚いて、勢いよく連れの横顔を振り返った。それが潮騒だとわかるからには、同じ音を、かつて聞いたことがあるに違いなかった。

「お前は、海を見たことがあるのか」

「ああ」

アシェリはあっさりとうなずいた。

「それならば、いったいなせ道案内などが必要だったのだ」

ヨブが納得のいかない思いを抱えて問うと、アシェリはかぶりを振った。

「俺が知っているのはもっと北の、冷たい海だ。見たかったのは、ここの海なのだ。ほかのどの海辺でもない、砂漠の涯の、灼熱の海だ」

その声は、砂に嘎れたためばかりでなく、ひどく掠れていた。

アシェリがかつて見たという、煮えたぎっていない海、北の冷たい海というものを、ヨブは想像しようとしてみた。だが叶わなかった。ヨブにとって海とは、いつでもぐらぐらと沸き返り、蒸気を吹き上げて先の見通せない、黒い水の溜まりのことだった。

そして、見たかったというわりには、海辺に近づくにつれてアシェリの足取りは鈍く、重くなるようだった。それにつきあって、ヨブもまたゆっくりと歩いた。

霧の向こうに透ける真円の月が、ぼんやりとした明かりを夜に投げかけている。辺りには潮騒と、二人ぶんの足音が響くばかりだった。

「あんたに鳥の名をつけたという親父さんは、どんな人だ」

突然、アシェリがそのようなことを聞いてきて、ヨブは面食らった。

「さて。よくは知らないのだ。俺が生まれる前に、死んだというから」

そうかとうなずいて、アシェリは何かいいよどんだ。

「そら。あの丘を越えれば、海が見える」

おぼろげに霞む前方の丘を、ヨブが指さして見せると、アシェリは立ち止まり、その指の先をじっと見つめた。それから再び重い足を動かして、ゆっくりと歩き出した。

「俺の親父は、俺がまだほんのガキの頃を最後に、顔をみせなくなった」

アシェリはヨブのほうを見ずに、正面の丘へと視線をやったまま、きれぎれに話しだした。

「もっともその前から、いつでも旅に出ていて、めったに村には立ち寄らなかつたようだ。……風の民、というのだそうだ。俺のようにひとりで好きに旅をして回るのではなく、一族のすべてが一つところにとどまらず、つねに放浪しているのだという。それでもたまには顔をみせていたのだが、ある日を最後に、完全に消息が絶えた。行き先は、お袋も村のほかの連中も、まったく知らなかつた」

ヨブは黙ってうなずき、よけいな相槌をはさむことは控えた。アシェリが約束通り、この海を求めた理由を話しているのがわかつたので。

砂漠では、人はよく旅をするなど、アシェリはいった。

「とりわけ、あんたらのような商売人は。だが俺の故郷のあたりでは、人はめったに、旅などはしないものだ。どの父親だって、村の、すぐ近くの家に住んでいて、数日とあけず子どもらの顔を見に通ってくる」

風が鳴り、二人の背中をゆったりと押していた。ヨブの知る限り、このあたりではいつも、風は海に向けて吹いている。アシェリは淡々と続けた。

「なぜ自分の親父だけが、いつまでも戻ってこないのか、なぜ遠くに旅に出る必要があるのか、俺にはわからなかつた。近所のガキどもにもわからなかつただろう。お袋と俺は、親父から捨てられたのだと、皆が思っていたし、俺もいつからか、そう思っていた」

小さく息をついて、アシェリは続けた。

「ずいぶんと時が経ち、やがてもう二度と戻ってはこないのだろうと、すっかり諦めた。俺はやがて、自らもあてのない旅に出るようになった。べつに、親父を探すという意識はなかつたんだがな。だがそうなっ

てみると皮肉なもので、最近になって、旅先で偶然、親父と同じ一族の人間に行きあったのだ」

アシェリは言葉を切って立ち止まり、いつとき眼を閉じた。

「親父は最期に、この灼熱の海を目指したという。そうして煮えたぎる海へと入って、命を落としたらしいと、その人はいった」

己の心臓が強く跳ねるのを感じて、ヨブは唾を飲み込んだ。だが、とっさに言葉は出てこなかった。アシェリはヨブの様子が変わったことに、気がついているのかいないのか、再び歩き出しながら、話を続けた。

「もし会うことがあれば、いつてやりたい文句は山ほどあった。会えないままだったのは残念だが、もう死んだというものはしかたがない。せめて親父が最期に見た風景を、この目で見てみたいと、そう思った」

丘の頂を踏みしめると、足もとにはもう海が見えていた。

アシェリは口をつぐんで、眼下に広がる光景を見つめた。ヨブもまた、蒸気の立ち込める水面へと、視線を向けた。海といっても、その全貌が見通せるわけではない。もうもうと立ち上る白い蒸気の切れ間に、ときおりわずかに黒い波間がのぞき、月明かりを鈍く弾いている。

「……だが俺は、心のどこかで思っていたのだ。煮えたぎる海などというものは、面白おかしく誇張された話に過ぎないのではないか。その光景を見たものがあるというのなら、そこにも人が生きて通る道があるのだろう。それならば案外、親父はその海を渡って、海の向こうにある別の天地を、呑気に旅でもしているのではないか。胸のどこかでは、そんなふうには思っていたのだ」

そうした話を、いままであなたに出来なかったのは、なんのことはない。そんなわけがないとあって、あっけなく否定されるのが、怖かったからだ。灼熱の海がどうしたものなのか、あなたはとっくに知っているはずだから。アシェリは力の籠もらない声で、そのようなことをいった。

波の音が轟々とうなり、しかとは見定めがたい水の存在を、強く主張している。風が渦巻き、熱い蒸気が二人に吹き付けた。

ふ、と息をついて、アシェリは顔をこすった。どうやら、自分のいったことを、笑いとばそうとしたようだった。だがその息は低く掠れて、いかにも力のない音にしかならなかった。

「だがこのような海に入って、人が生きていられるはずがないな」

アシェリは言葉を途切れさせて、ふと思いついたように座り込むと、そのままじっと海を見つめた。夜になってさえもうもうと蒸気を吹き上げる、灼熱の海を。

ヨブは黙って、その隣に腰を下ろした。小高い丘の上から見下ろしていると、波濤の碎ける音が、轟々と地響きのように押し寄せてくる。立ち上る蒸気のせいで、ひどく蒸し暑かった。アシェリは黙り込んで、ただ爛々と光る目で、じっと海を見つめている。

気が進まなかったが、確かめねばならなかった。ヨブは息を吸い込んで、重い口を開いた。

「お前の父親の名は、なんという」

アシェリは振り返らないまま、力のない声で囁いた。

「イーハ。あなたたちのような、姓はない。ただのイーハだ」

ああ。思わず漏れた息が、震えていた。ヨブは天を仰いで、手のひらで顔を覆った。

「その男をこの海まで連れてきたのは、俺だ」

アシェリは振り返って、信じられない話を聞いたというように、ヨブを見た。それから言葉を捜して、何度か息を飲み込んだ。

「……だが、それにしても、あなたは若いだろう。親父が死んだのは、ずいぶん前のことだというぞ」

「ちょうど十年前のことだ」

ヨブは答えて、眼を伏せた。アシェリの目を見て話せる自信がなかった。「俺は十五になり、ようやく一

人前と認められたばかりだった」

アシェリが絶句して己の横顔を見つめているのが、ヨブには見なくともわかった。

波が砕ける音が響き、それに遅れて熱気が海より吹き戻ってくる。背後から吹き付けているのは、風ばかりだろうか。何者かの手のひらが、自分の背を海に向かって押しているかのように、ヨブには感じられた。

やがてアシェリが、再び口を開いた。

「親父が死ぬところを、あんたは見たのか」

「いいや。だが……」

言いよどんで、ヨブは唇を引き結んだ。それからゆっくりと、首を横に振った。

問い詰めてくるかと思ったが、アシェリはどうしたことか、無言のまま、黒い海に視線を戻した。波頭がはじけて、蒸気を巻き上げる。風がときおり乱れて渦となり、また海に向かって吹きおろる。ただ座っているだけでも、のぼせそうに暑かったが、石のように動かないアシェリに付き合っ、ヨブもじっと海を見つめていた。

ヨブは言葉をさがして、話しあぐねた。何から話すべきか、どう話せばいいのか。語るべきことは、いくらでもあるような気がした。十年前、夜明けの名を持つあの男と、何について言葉を交わし、どんなふうにかこの海までの道を辿ったのか。あるいはどのようにして、ひとりきりの帰路についたのかを。

アシェリは父親について、何を知っていて、何を知らないのだろうか。自分はその男について、どれほどのことを知っているというのだろうか。

考えれば考えるほど、言葉はみつからず、ヨブはじっと、何かを待った。何を待っているのかは、自分でもわかっていなかった。アシェリが口を開いて己を問い詰めるのをだろうか。あるいは夜が終わりに近づくのか。

だが、満月が中天を過ぎて緩やかに下り、やがて低い空に滑り落ちて、アシェリは口をきかず、ヨブが隣にいることも忘れたかのように、じっと海を見つめていた。

その表情は、悲嘆に暮れているというには静かで、感傷に浸っているというには硬かった。

気の済むまで待っていてやりたかったが、月がじきに沈もうかという頃になれば、そうもいっていられなかった。やがてヨブは立ち上がり、アシェリの肩を叩いた。

アシェリは振り返らなかった。肩を叩かれたことにも、気づいていないかもしれない。それほど反応が薄かった。

「戻るぞ」

ああ、と生返事のかえして、しかしアシェリは動かない。ヨブは月を見上げて、それから黒々とした水面を見た。さすがに蒸気はいくらか落ち着いて、海は、打ち寄せる波の動きが見て取れるほどになっている。

「どうしても離れがたいというのなら、いったん引き返して、また夜が更けてから来ればいい」

帰り道を考えながら、ヨブはいった。食料の残りは心もとなかったが、幸い、洞穴まで戻れば水はある。だが、それでもアシェリは腰を上げなかった。ヨブは思わず、声を荒げた。

「お前が死に急ぐのは勝手だが、俺には待つ者たちがいる。こんな場所で死ぬわけにはいかないのだ」

アシェリは振り返らずにいった。「先に戻ってくれ。すぐに追いかける」

そういつて海を見つめる眼は、感情の読めない、奇妙な色をしていた。それが一瞬、十年前の記憶と重なって、ヨブはとっさにアシェリの肩をつかんだ。そしてほとんど怒鳴るようにいった。

「俺に二度、死にゆく友を見捨てさせる気か」

はっと顔を上げて、アシェリはようやく振り返った。その鳶色の瞳に、自分の顔が映りこんでいるのを、ヨブは見た。立派な戦士だと胸を張ってはいえそうもない、情けない顔を。

アシェリはゆっくりと目を伏せて、悪い、と呟いた。掠れた声だった。それからようやく腰を上げて、海

に背を向けた。

一晩中座っていたせいか、アシェリはいくらか足元がふらつくようだったが、それでも自分で歩き出した。

「大丈夫か」

歩きながら訊くと、アシェリはちらりと笑ってみせた。

「当たり前だ。べつに何も、薄情者の親父のあとなど、追うつもりはなかったさ。親が子のために命を懸けるというならわかるが、子が死んだ親のあとを追うなど、馬鹿げているにもほどがある」

そういう口調は、もとのあっけらかんとした調子を取り戻していた。

丘を越える前に、アシェリは一度だけ海を振り返った。じきに陽の光を受けて再びぐらぐらと沸き返るだろう、無慈悲な灼熱の海を。

急いで引き返すうちに、薄くなった霧越しに、東の空が端のほうから赤みがかってゆくのが見えた。それもじきに白へと色を変えて、辺りは徐々に明るくなってゆく。途中からは走りに走って、二人は驢馬を置いてきた洞穴を目指した。話をする余裕もなかった。

あと少しというところで、二人は太陽に追いつかれた。正面、洞穴のある崖の上から、白い鮮烈な曙光が朝靄を払って、彼らの視界へ飛び込んできた。じきにあたりは灼熱の大地へと変わるだろう。夜通し吹いていた風がさらに強まり、正面から吹き付けている。

「急げ！」

いわずもがなのことを叫んで、走る速度を上げたヨブは、アシェリが何かに気を取られて足を緩めたことに気がついた。

「あれは、なんだ」

アシェリが指さした先で、霧の合間の地面が蠢いていた。

説明する余裕はなかった。ヨブは怒鳴った。

「いいから走れ！」

走る二人の足元で、大地から緑の萌芽が顔を出して、見る間に丈を伸ばしてゆく。そこから葉が広がり、太陽の光を弾いて煌いた。

草が次々と芽吹いていく。その周りを飛びまわる、虫のようなものも、流れてゆく視界の隅をよぎった。驚きにアシェリが息をのむのが、ヨブの耳に聞こえたが、かまってはいられなかった。

洞穴の周りには、出るときには見かけなかった緑の草々が、朝陽を受けて葉を揺らしている。その上を駆け抜けて、二人は洞穴に飛び込んだ。

それまでの眩しい光景とうってかわって、洞窟の中は暗かった。乱れた呼吸が収まるまで、二人はいつとき、無言で肩を上下させていた。

奥のほうで驢馬がいなくなるのが、かすかに聞こえている。困憊した足を引き摺るようにして、ヨブは洞穴の奥へと向かった。そのあとに続きながら、アシェリが口を開いた。

「さっきの草、あれは、なんだっただ」

「いっただろう、この辺りにも、命がないわけではないのだと」

ヨブは言葉を切って、歩きながら水を飲んだ。喉がひどく渴いていた。アシェリはといえば、疲れよりも驚きが勝つのか、見えるはずもないというのに、何度も入り口のほうを振り返っている気配がした。

俺も詳しいわけではないが、と前置きして、ヨブは説明した。

「あれはどうやら、ああした植物なのだ。普段は地の中に隠れている。だが、ふつう草木というものは、陽の光がなくては生きられないものだろう。だから夜明けの、まだ辺りが灼熱の大地へと変わる前のわずかな時間だけ、外に顔をのぞかせるようだ。次の日に外に出ると、すっかり枯れきって土にまぎれ、元の姿の想像もつかない」

アシェリはいつとき沈黙していたが、やがてぽつりと呟いた。「あの断崖にも、同じような草が生えるのだろうか」

ああ、多分な。うなずいて、ヨブは驢馬の足元においていた荷から、食料を取り出した。あの場所で夜明かしするつもりなどなかったから、一晩何も食べていない。ひどく空腹だった。

包みを押し付けると、アシェリは黙って暗闇のなかで、それを手元に引き寄せた。硬くなったパンを、水で喉の奥に押し込むようにして、二人は食事をとった。

「さっき、あの草の生えていた場所を覚えたか。発つときに、少し掘ってゆこう」

「どうするんだ」

「食うのさ。地面の下の茎に、こぶのような芋がある」

へえ、と感心して、それからアシェリは少し笑った。「空腹も忘れていたようだ。今ごろ腹が減っている」
「そうだろうな、あの様子では」

呆れて見せてから、ヨブは水を飲み、そして息を吸い込んだ。今度は、話すべきことは自然に口から滑り出てきた。

「ずいぶん、寡黙な男だった」

途端に、アシェリが神経を張り詰めてこちら話を聞いている気配が、暗闇の中で感じられた。ヨブは語り急がないようにと、つとめてゆっくり話し出した。

イーハという名は、夜明けという意味だと、あの男はいった。たしかに砂漠の夜明けを思わせる、濃い青の眼をしていた。涯の海を見たいという、その理由については、頑として話さなかった。ちょうど、昨夜までのお前のように。

ただ、そうだな。後になって思えばひどく顔色が悪く、それに、痩せていた。年老いているようにも見えないのに、そのわりに皺が多く、もともとこれほど痩せていたわけではないのだろうと思ったのが、印象に残っている。いまにして思えば、もしかすると最初から、生きて戻るつもりがなかったのかもしれない。

最初にいったが、とにかく口数の少ない男だった。こちらから何か話しかければ、じっくり考えて、言葉少なに返事をした。砂漠の旅には、あまり慣れていないようだった。まだ若造の俺から、あれこれと頭ごなしに指図をされても、ちっとも気を悪くする様子がなく、真剣に耳を傾けていた。

あの男も俺の名を、いい名だなといった。

言葉こそ足りなかったが、それは偏屈というよりも、言葉で語る前に行動であらわす男なのだと、俺の目にはそのように見えていた。さて、そうとはいっても、いまだ世間をろくに知らぬ、若造の目だったからな。どこまで当てになるかはわからないが、お前の目には、どのように見えていたのだ。……いや、いい。無理に話さなくても、いいさ。

俺はあの男のことが、嫌いではなかった。お前の故郷でどうかはしらないが、そうした人間、行動で語る男は、砂漠では尊敬されるものだ。ああ、そうだな。誰にもいったことはなかったが、俺はあの男に、憧れ

ていた。

お前もそうだったように、イーハはこの海辺に近づくとつれて、ますます口数が少なくなっていった。あのとき、あの男はいったい何を考えていたのだろうか。あとになって何度も考えてみたが、いまでもよくわからない。

イーハはこの涯の海までやってくると、さっきの丘よりもさらに先、あともう一步を踏み出せば真っ逆さまに落ちるだろうという、断崖の際まで歩いていった。あの場所はいつも、海に向かって風が吹いている。危ないからよせと俺がいても、それを無視して、ずっとそこにとどまっていた。吹き上げる蒸気が、熱くはなかったのだろうか。そうして何かを見通そうとするように、じっと視線を遠くへ向けていた。

夜明けの色をした眼は、海面ではなくその向こう、涯の海のさらに果てを見通そうとしているかのようになり、俺の目には映った。どうせ蒸気のせいで、何も見えはしないというのにな。

海の向こうに、いったい何があるのだろうか。あのような恐ろしい場所の先に、見るべきに値するような何かがあるのか、果たしてあるのだろうか。

お前も、呆れるほど食い入るように、海を見ていたな。あれは、父親の面影ばかりを探していたのではあるまい。

蒸気の吹き上げる海を見つめたまま、あの男は夜明けが迫っても、腰を上げなかった。何をどういっても、俺が痺れをきらして腕を引いても、かたくなにその場から動かなかった。そして、ひどく静かな口調で、俺に案内の礼を告げた。おかげでずっと見たかったものを、この目で見ることができたと、イーハはいった。ここまで連れてきてくれたことに感謝する、お前はもう帰るといい。お前の生まれ育ったというあのオアシスで、なすべきことがあるのだろうかからと。

ぎりぎりまで俺はその場にとどまって、あの男を説得しようとした。だがイーハは何をいっても、頑として耳を貸さなかった。殴り飛ばして、無理やりかついででも連れてゆこうかと思ったが、大の男、それも自分よりもよほど体の大きな男をかついで、陽の昇る前に戻る事など、到底できないと思った。だからといって、一緒に死んでやるわけにはいかなかった。

俺は友を見捨てて、夜の海辺に背を向けた。

次の晩、再びあの海辺に戻って、俺は誰もいない崖を見た。あの男の座っていた場所のすぐそばまでいったみたが、そこには、あの男がいたという何の痕跡も、見つけることはできなかった。海を覗き込んでもみたが、お前も見たとおり、あの蒸気だ。いくら目を凝らしても、霧の向こうに、何も見いだすことはできなかった。

あの夜明け、友を置いてひとり逃げながら、黎明のなかで、諦めきれずに何度か振り返った。やがてずいぶん遠ざかった頃に、イーハが俺のほうを振り返って、ゆっくりと手を振った。その顔は、どうしたわけか、微笑んでいるように見えた。

あの笑みの意味が、お前にわかるのなら、俺に教えてくれないか。イーハの息子よ。

暗闇に慣れた目に、アシェリがゆっくりと首を振ったのが映った。長らく会ったこともない父親の心がわからずとも、当然のことだ。ヨブは短く謝って、口を閉じた。

息子がいるということ、イーハは話さなかった。このような地の果てで、たったひとりで最期のときを迎えるよりも、なぜ故郷に帰って、この男に顔をみせてやらなかったのだ。ヨブは十年越しに、胸のうちで友の面影に呼びかけたが、当然ながら暗闇の中からは、何の答えも返ってはこなかった。

「さあ、もう休め。外が冷えたら、今夜は出立を急ぐぞ。芋も掘らねばならないからな」

「ああ、そうだな」

そういつてすぐに横になったわりには、アシェリはなかなか眠れないようだった。硬い岩の上で何度も寝返りをうつ気配を、ヨブは聞いた。

「寝付けないのなら、驢馬の腹を枕にして眠るといい」

見かねてそう声をかけると、返事は返ってこなかったが、黙ってそのようにする気配があった。

暗闇に沈む岩天井をみつめながら、ヨブは十年前の帰途を思い出していた。

ひとりきりでオアシスに戻ったヨブに向かって、長は厳かにうなずいて、よくやったと、そういったのだ。

俺は殺してはいないと、ヨブはいった。だが長は、わかっているとうなずいて、満足そうに微笑むばかりだった。その眼を見て、それ以上の言葉を、ヨブは飲み込んだ。

長は、ときにぞっとするほど冷酷になる。しかしそれは、故なきことではない。その残酷さは、オアシスを守るためにこそ発揮されるものだ。ヨブにもそのことはよくわかっている。

だがそれでもあのとき、ヨブは声を上げていたかった。俺があつ男を殺したのではないと。

帰りの道もまた、長かつた。同じだけの日数をかけて岩砂漠を越え、オアシスを辿らなくてはならない。ヨブは星を見上げながら、胸のうちに旅立ってからの日数を数えた。

アシェリはもとの陽気な男に戻り、道々、見かける生き物や、星の名前など、思いつく端からヨブに訊ねた。

「それにしても、わかつたようなことをいいたくはないが……」

話が途切れたとき、ヨブは前置きをして、それからいった。「父親というものは、勝手なものだな」

己の口からこぼれ出してみれば、言葉はあまりにも空疎だった。ヨブは口に出したことを後悔しながら、空を仰いだ。

北の空には、ほのかに赤みをおびたアス・ディハル《三の導きの星》が、煌々と輝いている。言葉はいつでもむなしく、ただ星だけが、変わらずたしかな道を示してくれる。

だがアシェリは、思いのほか静かな声で、話の先を促してきた。「あんたが生まれる前に死んだという親父さんのことか」

ヨブはかぶりを振った。残されるわが子のことを思いもせずに、さっさと死んでしまう男たちのことも、勝手といえば勝手に違いなかつたが、頭にあつたのは、そのことではなかつた。

「いいや。俺は、不義の子なのだ。……俺の父は」

言いよどんで、ヨブは唇を湿した。それから続けた。

「俺の父親は、戦で死んだ男ということになっている」

それは、部族の人々の前では口に出来ないことだった。だが、いや、だからこそ、この男に聞いてほしいような気がした。

「だが、皆が知っている。それでは計算が合わないということ。そして長が、夫を失つたばかりの母のもとを、何度となく訪れたことも」

「では、あんたに名前をつけたのは……」

ヨブは皮肉に笑つて、アシェリの手をひきとつた。「いつか息子が生まれたら、ヨブと名づけよう。そ

う話していたという、亡き夫がつけた名を、母はそのまま、不義の子へと与えたのだ。そ知らぬ顔をして」
オアシスで帰りを待つ老母の顔を思い浮かべながら、ヨブは眉を寄せた。

「女が外を出歩くのが当たり前だと、お前がそういったとき、俺はそのことを馬鹿にしたな。だが、女を家の中に隠したところで、何のことはない、それでも俺のようなものは生まれる」

驢馬が水を求めて、顔をすり寄せてきた。ヨブは休憩にするぞとって、まだ熱のなごりの残る岩の地面に腰を下ろした。

火を熾し、残り少なくなった珈琲の用意をしながら、アシェリが珈琲の苦さにたびたび顔をしかめていたことを、ヨブはふと思い出した。「お前は白湯にするか」

「いいや、だんだんその苦いのが、くせになってきた」

アシェリは笑ってそういった。部族に独特の、とびきり香りの立つやり方で珈琲をいれながら、ヨブは軽い調子を作っていた。

「それにしても、女とは怖ろしいものだ。口を拭ってこれは誰その子だといえ、それで通ってしまうのだから」

「ははあ。どのような土地にいても、そればかりは変わらないものか」

ヨブの意図につきあって、アシェリは声を立てて笑った。それからやはり苦そうに、珈琲をちびちびと舐めた。

「しかし、お前たちのように女が家を継ぐのであれば、相続には争わずに済むかもしれないな」

「いや、どこでもそうしたことは、こじれるものさ。女が生まれず、家が絶えることもあるし」

アシェリはそういって、にやりとした。「じつは俺のところが、まさにそうだ。生きている間に、片付け方を考えておかねばなるまいよ。とはいえ、あるのは小さな家がひとつばかりだ。まあ、娘にやっってしまうだろうなあ」

面倒ごとのようにいいながらも、目を細めるアシェリの声は、楽しげなものだった。

「なんだ。お前、娘がいるのか」

あきれてヨブがいうと、アシェリはうなずいて、北の空を仰いだ。そちらに故郷があるのだろう。

「ああ。まだほんのガキだが。そろそろ一度戻って、顔を見せやらねばなるまいな。ふ、しばらく見ない間に、でかくなっているんだらうなあ」

まったく父親というのは、つくづく身勝手なものだ。アシェリはヨブのいった言葉を繰り返して、くつくつと喉で笑った。

「それならば、さっさと帰ってやれ」

呆れ混じりにそういいながら、ヨブはため息をついた。アシェリはそうだなと笑って、顔を上げた。

「お、あれはなんだ」

アシェリが指さしたのは、遠い崖にのぞく、古い廃坑の入り口だった。もう使われていないもので、特別に知られて困るものでもない。ヨブは説明してやりながら、つくづく呆れた。

「それにしてもお前、そのように好奇心をむき出しにしているのは、嫌がられることも、物騒な目にあうこともあるだろう。興味のないふりも肝要だぞ。秘密を探られたくないものは、ときに過剰なほどに、慎重を期するものだ」

そう言いかけると、アシェリはにやりとした。

「ああ、あんたも、何度か物騒な顔をしたものな」

ヨブはぎょっとして、思わず顔をこすった。

「そうか？」

「ああ。……だが俺は別に、あんたらの秘密だかお宝だかに、興味はないぜ。何を隠したがつてるのかは、

まあ、聞かないほうがいいんだろうな」

両の掌をひらひらさせて、アシェリは人の悪い笑い方をした。思わずため息をついて、ヨブは首を振った。

「お前は案外、油断のならないやつだな」

アシェリはからからと笑って立ち上がり、外套の土ぼこりを払った。

迷った挙句、ヨブはファナ・イビタルよりもひとつ手前のオアシスで、アシェリと道をわかっことにした。

長が、アシェリを生かして連れ帰ったことをどう受け止めるか、そのことを考えたとき、心配はいらないと説得できるだけの自信はなかった。長が話を信じた振りをして、その晩にアシェリの枕元に蠍の二、三匹を忍び込ませたとしても、自分は驚かないだろうとヨブは思った。

本来であれば、砂漠の旅は隊商とともにゆくのが一番安全だ。危険な獣もいれば、道に迷うおそれもある。信頼の置ける商人に渡りをつけて、砂漠の外まで安全にゆけるように、交渉してやりたいところではあった。

だがヨブはアシェリに星の辿り方と、食料や水の按配を細かく言い聞かせて、ひとりでゆかせることにした。つきあいのある商人に頼めば、いずれ長の耳にも入りやすくなるだろうから。もっとも、どことも知れぬ遙かな故郷に向かった人間を、追うすべもないだろうとは思えたが。

満天の星空の下、荷を担ぎなおしながら、アシェリはいった。

「案内人が、あんたでよかった」

親父の話も聴けたことだしなと、アシェリはそんなふうには笑って、名残惜しそうに、いつか驢馬の腹をなでた。

「気をつけてゆけ」

「ああ。また会おう」

そうやって手を差し出したアシェリに、ヨブは思わず苦笑した。もう会うこともないだろうに、それでもそのようにいうのが、砂漠の外の流儀なのかもしれなかった。だがヨブは、アシェリの手を握り返しながら教えた。

「このあたりでは、こういうのだ。星の導きが、お前とともにあるように、と」

アシェリは破顔して、同じ言葉を繰り返した。

何度となく振り返りながら、アシェリは宵闇に包まれた砂漠の道なき道を、ゆっくりと遠ざかっていった。

その姿が遠く離れ、とうとう見えなくなると、ヨブは驢馬の背を叩いて、自らの帰るべきオアシスへと足を向けた。それから胸のうちで独りごちた。さて、怪訝な顔をするだろう長へと、下手な話を聞かせてみせねばなるまいな。あの男が秘密をかぎつけて吹聴する心配はもういらないと、納得してもらうためには。

火の国より来たる者（1）

里のはての岩壁には、ぽっかりと空いた穴がある。

さして大きなものではない。大人なら、少し身を屈めなければくぐれないほどのものだ。あらゆる光を吸い込むような、黒々とした穴。その先は、暗闇の路へと続いている。

そこへ足を踏み入れることは、禁じられている。例外はふたつ。男たちが銀を掘りにゆくときと、葬儀のときだ。

暗闇の路のなかばには、死者の川がある。

轟々と音を立てて流れる、冷たい川だ。人が死ねば、なきがらはそこに投げ込まれる。

死者は川をどこまでも下ってゆき、やがては水底の国にたどりつく。彼らはそこで、永遠の眠りにつくといわれている。

暗闇の路は、死そのもののような、深い静寂に包まれている。それでいて闇の中には、驚くほど多くのものが息をひそめている。音を立てずに地を這う、目のない蛇。毒をもつ蜘蛛。それから、川を下りそこねた亡霊たち。

道すじはひどく入り組んでいて、そこで上げた声は、響く端からほうほうに跳ね返って、耳を惑わす。ひとたび迷えば、けして無事に戻ってはこられない。

けれど、その長く危険に満ちた路を、どこまでもたがわずに正しく辿ることができたならば、その先ははるか彼方の地、天上にあるもうひとつの世界へと続いている。

火の国。

その大地は、燃え盛る炎に包まれているという。

「今日からサフィドラの月になるのね」

その日の早朝、母さんが感慨深げにそういったのを、よく覚えている。部屋の中にまでほのかに霞のかる、しっとりとした涼しい朝だった。

その言葉を聞いたわたしは、ちっともいうことを聞かない縫い針から視線を上げて、母さんの顔を見上げた。母さんは、近頃とみに白髪の増えた頭をかしげて、わたしの手元をのぞきこんでいた。

「年があらたまるのをいい機会と思って、お前もそろそろひとつ、何か大きなものを仕上げてはどうかしらね」

母さんの声は、心配げな色を帯びていた。もう少し針が上達しないことには、嫁いだ先で困ることになりますよというのが、そのころの母さんの口癖だった。

けれどわたしはそのとき、ほかのことに気を取られていた。サフィドラの月という、聞きなれたはずの、けれどいつ聞いても不思議な響きのする名前のほうに。

サフィドラ、レヴェエ、ルークス、エオン、ヤクシェ、イディス、ユヴ……。ぜんぶで十七ある月の名前は、

どれもきれいだけれど、音の響きがよいという以外に、意味があるようには思えない。そういうものだと思っていただけれど、考えてみれば、そんなにたくさんの名前を暦を呼び分ける必要なんて、どこにあるのだろう。

ようやく言葉を覚え始めたばかりの幼い子どもには、一の月二の月と、数字で暦を教えるくせに、彼らが少し大きくなると、今度は正式な長い名前を覚えなおさせる。わざわざそんなことをする意味が、どこにあるのだろう。

「ねえ。月の名前って、なにか意味があるの」

母さんはすぐに答えず、日々の仕事に荒れた指先で、そっと額を押さえた。叱りつけたいのをこらえるときの、母さんのくせだ。

「さあ、どうかしら。もともとは星の名前からとられたと、導師が仰っていたと思うけれど」

ずいぶん前に聞いたことだから、忘れてしまったわ。母さんはそんなふうについて、小さく首をすくめた。

「星って、なあに」

「さあ、何かしら。難しいお話は、母さんにはわかりませんよ」

それよりも、と母さんが厳しい顔をしたので、てっきりお説教が続くものと思って、わたしは首をちぢめた。けれどそうではなかった。母さんはゆっくりと、噛み含めるようにいった。

「わかっていると思うけれど、今日は火の国の使者さま方がお見えになる日ですよ。続きは裁縫室でなさい」

はい、と返事はしたけれど、いわれるまでわたしはほとんどそのことを忘れかけていた。あわてて裁縫道具を抱え込んで立ち上がると、母さんがまたため息をつきかけて、飲み込んだ。

姉さんたちはみんなしっかりしているのに、あなただけ、いつまでも小さい子どものままだね。そんなふうに、何度ため息をつかれたことだろう。そのたびに首を縮めて、お説教をやり過ぎしながら、わたしは実のところ、ちっとも反省していなかった。母さんも、姉さんたちも、みなでよってたかってわたしを子ども扱いするのだから、いつまでも子どもっぽいのは当たり前だ。

ヒカリゴケに淡く照らし出される通路（ヤアタ・ウイラ）を歩きながら、わたしはそのとき、まだ月の名前のことを考えていた。

星、とは何のことだろう。

小さいころから、一度なにかを気にしだすと、答えを知るまでずっと気になり続ける性質だった。ソトゥの月だけがほかの月の半分ほどの日数しかないのはなぜだろう。どうして日経つことを、月が満ちるといっただろう。ひとたび気になりだすと、疑問は次から次へと湧き出してくる。わたしはこのとき、暦に秘められた謎に、すっかり夢中だった。

長い通路の先には、裁縫室がある。姉さんたちはすでにそちらに行って、縫い物なり、糸紡ぎなりに、精を出しているはずだった。

けれどわたしはその手前の、勉強室の前で足を止めた。母さんは、裁縫室で縫い物の続きをやるようにといったけれど、要は邸の奥に大人しくひっこんでいさえすれば、それでいいのだ。

サフィドラの月の頭から三日間、この邸に暮らす未婚の娘たちはみな、奥の部屋に籠もらなくてはならない。表のほうの部屋には、使者の方々をお泊めするからだ。

母さんたちは、導師のご指示を仰いで忙しく立ち働いている。男の人たちは今年の荷をあらためて、火

の国よりもたらされた物珍しい品々に、目を輝かせているころだろう。わたしたちだけが、にぎやかな表から切り離されている。わたしにはそんなふうに思えてならなかった。

使者はいつも、男のひとたちばかりのようだった。女性の使者さまはいらっしゃらないのですかと、導師に訊いてみたことがある。もし許されるものなら、火の国の話を聴いてみたいと思ったのだ。

――さて。女性（によしょう）の使者は、すくなくとも私がお役目についてからは、お見かけしたことがないが。

わたしががっかりして肩を落とすと、導師は困ったように微笑んで、ゆっくりと仰った。

――火の国からこの里へいたる道のりは、とてもけわしく恐ろしいものだということから、たとえ火の国の御方といっても、女性の足で通り抜けるのは、難しいのではないかな。

いわれてみれば、もっともな話だった。いつだって導師はそんなふうに、わたしの考えの足りないところを、やんわりと気付かせてくださる。

導師はお優しい。教えを請えば、たいていのことは詳しく答えてくださる。月の名前のことも、お訊ねすれば、教えてくださるだろうけれど……。

垂れ布をくぐって勉強室に入ると、立ち並ぶ書架が、持ってきた手燭のあかりに淡く照らし出された。この部屋だけの、独特のにおいが鼻をくすぐる。古びた紙とインク、それから埃のにおい。

誰もいない勉強室は、静かだった。

奥の裁縫室からは、ときおりはしゃいだ高い声が漏れ聞こえてきていた。自分もそちらにいて姉さんたちの話に混じろうかと、思わなかったわけではない。けれどわたしはそうしなかった。ひとりであるのが好きなわけではない。だけど、お裁縫はもううんざりだった。向かないのだ。

昔からずっとそうだった。まわりの娘たちと違うものに興味を惹かれ、皆が喜ぶものにはあまり関心を持たない。べつに意地を張ってそうしていたわけでもないのだけれど、自然といつもそうだった。

皆がわたしのことを変わり者だと思っているのは、知っていた。わたしのそういうところが母さんを心配させているのも、わかっていた。けれどそれでも、好きではないものを好きだということが、わたしにはどうしても耐え難かった。

わたしはため息を飲み込んで、奥の書架に向かった。

目に付いた本を取り出すと、それはずしりと手に重かった。その列の書架には、とくに古い書物が集めてある。表紙に張られた布は、端がほつれてしまっていた。綴じ糸もすでもろくなって、雑に扱えば、ばらばらになってしまいそうだった。

机まで運んで、明かりのそばでそっと表紙を開くと、中のページに記された文字は、すでに古び、薄れかかっていた。そろそろ写本をつくるべき時期にさしかかっているようだった。

わたしは以前から、導師が古い本を書き写されるのを手伝っていた。裁縫は苦手だけれど、読み書きならば、姉さんたちの誰よりも上手にできる。けれど母さんは、それをあまりいいことだとは考えていないようだった。

いずれお嫁にいつてしまえば、本など読むこともないのよと、母さんはいう。それが本当なら、嫁ぐというのは、なんてつまらないことなのだろう。

書物に記されているのは、古い叙事詩のようだった。在りし日、族長イグラン――というように、そのつづりは読めた――が、無用のいくさに明け暮れるあまりに、とうとう神々の怒りに触れて、水という水を奪われてしまった。渇きのために苦しむ一族に、ひと柱の美しい女神が心を痛め、天より降り立った。女神は道を示し、わたしたちの祖先を新たな地へ導いた。この豊かな水の溢れる楽園、エルトーハ・ファティスへと。

本の中には、その長く苦難に満ちた旅のことが、生き活きと綴られていた。

それは、いつか耳にしたことのある物語だった。母さんが寝物語に聞かせてくれたのではなかっただろうか。

けれど、記憶の中の話とは、細部がかなり違っていた。それに母さんの語った内容は、この書物のように詳しくはなかったと思う。己の過ちを悔いながら、民を率いて道を切り拓く族長の、人間的な苦悩に満ちたようす。それに、巫女の口をとおして語られる女神の託宣の、謎めいた、神秘的な響き……。

読みながら、わたしは何度もため息を漏らした。母さんは子ども向けに話して聞かせるために、話の難解なところをすべて省いてしまったのだろうか？

その書物のなかには、知らない言葉がたくさん出てきた。わからないところでは手を止めて、その単語をそっと指でなぞり、不思議な響きの音から自分なりの（きっとそのいくらかはとんだ見当はずれの）想像をめぐらせながら、わたしは夢中になってそれを読んだ。

読み終えていっときの間、わたしの心は古代の英雄たちの姿から離れることができなかった。

時がたって興奮がいくらかしずまると、今度は嵐のような疑問が押し寄せてきた。これは何百年前の話なのだろうか。この地が、苦難の果てにようよう見出された楽園だというのなら、その前にわたしたちの祖先が住んでいた場所は、どのようなところだったのだろうか。神々に水を奪われる前の、その土地は。

少なくともここより、ずっと厳しい土地だったのだろうか。深い暗闇にうち沈む、寒々しいところだろうか？ それとも話に聞く火の国のように、灼熱の土地なのだろうか。あるいは水を奪われるその前には、こことよく似た土地だったのだろうか。

導師にお訊きしてみたいと思ったけれど、この三日間は、勉強室にお見えにはならないだろう。使者の方々をもてなすのに、お忙しいはずだから。自分が入ってきたほうと反対側、ト・ウイラへ続く戸口をちらりと見て、わたしはため息をついた。

奥の裁縫室のほうで、誰かが歌っているのが、かすかに響いていた。耳を澄ませば、それは一番上の姉さんの声だった。

——愛しいひとの名を呼んで、
乙女は駆ける、暗闇の路を。

それは、古い恋歌だった。

炎の乙女の歌。火の国からの使者に恋をした乙女が、帰りゆく使者のあとを追いかけて、越えてはならぬ火の国との境を、とうとう踏み越えてしまう。そして乙女は炎に焼かれ……。

その歌が、わたしは昔から好きになれなかった。正直に言えば、悲しいばかりで、辛気臭い歌だと思っていた。どうせ歌うのなら、もっと楽しい歌がいい。

対抗しようと思ったわけではないけれど、つい、ちがう歌を口ずさんでいた。豊穡の歌。豊かな実りを大地の女神に感謝する歌だ。

それは本当ならば、女が歌うようなものではないのだけれど、ときおり男のひとたちの畑のほうから聞こえてくるのを、耳で覚えていた。その喜びにあふれた力づよい音律が、わたしはとても好きだった。

誰かの足音が、近づいてきた。それでもわたしは、歌を止めはしなかった。母さんたちか、姉さんたちの誰かだろうと思ったので。

けれど、その予想は裏切られた。

「——いい声だな」

心臓が、止まるかと思った。

あろうことか、それは、男のひとの声だった。いまこのとき、この場所に、導師以外の男のひとが、いるはずがないというのに。それどころか声は、ヤアタ・ウイラから聞こえた。女たちしか使ってはならないはずの通路から！

声の主は戸口のそば、ほとんど垂れ布のすぐ向こうから、話しかけてきたようだった。布に、うっすらと人影がうつっているのが見えた。

「もう、歌わないのか」

不思議そうに、通路の声はいった。低く、語尾のやわらかい、不思議な響き声だった。

「すまない。邪魔をしたらどうか」

「いえ……」

ようやく、どうにか喉から声を絞り出すことができた。声の礼儀正しい響きからは、少なくとも悪い人ではなさそうだと思えて、それでいくらか、わたしは落ち着きを取り戻した。

そちらがわの通路は、ヤアタ・ウイラですよと、そう声の主に教えようと思った。けれど口が勝手に、違うことをいっていた。

「もしかして、火の国からの使者さま？」

訊いてしまってから、考えが言葉に追いついた。それ以外に考えられることがあるだろうか？

男のひとの言葉には、あまり聞かないような古風ないまわしが混じっていたし、それに抑揚や声の響きも、どこか変わっていた。第一、里の男で知らずにヤアタ・ウイラに闖入するものなど、いるはずがない。

そうと知っていてわざと入り込んだ狼藉者の話ならば、耳にしたことはあるけれど、それにしても声の主は礼儀正しかったし、なによりここは、導師のお邸なのだ。使者のいらっしゃるこの大切な時期に、それほど愚かなことをする男がいるとは考えづらかった。いたずら盛りの子どもならともかく、声は、大人の男のひとのものだった。

「ああ……いや、そうだな。お前たちが、火の国と呼ぶ場所から、荷を運んできた」

ああ、なんていうことだろう！ 使者さまとお話しができるなんて。わたしは小走りに戸口のほうへと駆け寄った。

気分が高揚していた。母さんや導師に知られれば、ひどく怒られるだろう。わかってはいたけれど、そんな心配よりも好奇心のほうが勝った。

「今日の早朝に、ようやく着いたところだ。ほかの者は皆、まだ休んでいる。……ひとり早々に目が覚めたのはいいが、ここの暗さに惑わされて、どうやら道に迷ってしまったようだ」

弁明する声は、とてもまじめな調子だった。それがどうにも可笑しくて、わたしは小さく吹き出した。

「いやだ、お邸の中で迷うなんて」

そういつてから、慌てた。あまりに無礼な口のききようだったのだろうか。とても偉い方なのだということは知っていたけれど、そうといて、使者にどんなふうに礼を尽くすべきかなんてことは、誰からも教わらなかった。それも当然のことだ。わたしたちは、使者にお会いすることそのものを、厳しく禁じられているのだから。

けれど、使者はわたしの無礼を咎めるふうでもなく、ただ困惑したように呟いた。

「ここは邸の中、なのか」

何を不思議に思っているのだろうか。わたしはちょっと首をかしげた。火の国では、お邸というのはもっと立派なものなのかもしれない。

「いや、すまない。妙なことをいうと思っただろう。……邪魔をしてすまなかったな」

使者が立ち去ろうとする気配を感じて、わたしはあわてた。こんな機会、もうあるとは思えなかった。

とっさに垂れ布の近くまで駆け寄っていた。

「ねえ、火の国のお話を、聞かせてくださらない？」

そう口に出してしまってから、わたしはうろたえた。相手は家族でもなければ、導師のようなお爺さんでもない、大人の男の人なのだ。

「あの、わたし……その」

なにか言い訳をしなければならぬと、そう思うのだけれど、焦るとよけいに言葉が出てこなかった。少しして、垂れ布にうつる影が揺れた。

「どうした」

うながされて、わたしは恥じ入りながら、小声でたずねた。

「その、はしたないと思う？」

訊きながら、いたたまれなかった。垂れ布の向こうから、使者が喉の奥で笑うのが聞こえた。

「お前はまだ、子どもだろう」

とっさに反論できなくて、わたしは口を開閉させた。

たしかにわたしは歳のわりに幼いと、姉たちからも母さんからも、口癖のようにいわれている。自分でもちょっとそう思うふしはある。けれどいくらなんでも、男の人に話しかけて、子どもだからと笑って済ませてもらえるような年ではない。

けれど、そう誤解してもらえるのなら、わたしにとっても都合のいいことではあった。慙然として、わたしは答えた。「そういうことにしておくわ」

使者が、今度は声を立てて笑うのが聞こえた。こっそりふくれながら、わたしはその場に座り込んだ。

「地上の、どんな話を？」

使者はどうやら、子どものわがままにつきあってくれるつもりになったようだった。面白がるようにそう囁く声は、けれど、意地悪そうではなかった。

わたしは気をとりなおして、顔を上げた。訊きたいことは、いくらでもあった。火の国の人たちは、どんな姿をしているのか。いつもたくさん運んでくる、あの不思議な品々は、だれがどうやって作っているのか。火の国をつねに覆っているという炎に焼かれても、ちっとも熱いと感じないのか。どれくらいの数の人がいて、どんな暮らしを送っているのか……。

「火の国のことを、あなたがたはなんというの？」

まっさきに口から飛び出したのは、そんな疑問だった。

使者はさっき、お前たちが火の国と呼ぶ、という言い回しをした。ならば、彼らは自分たちの国を、ほかの名で呼んでいるのだ。

「俺たちの町は、ファナ・イビタルという。中央砂漠にある、大きく美しい、オアシスの町だ」

いいながら、使者は少し口ごもったようだった。わたしが話を理解できないでいる気配が、沈黙に乗って伝わったのかもしれない。

「オアシス、という言葉はわかるだろうか。砂漠は？」

「いいえ。それは、どんなもの？」

使者は少し、言葉をさがすような沈黙を落とした。それからゆっくりと説明を足した。

「ここと違って、地上はとても暑く、ひどく乾いているのだ。見渡すかぎり、焼けた赤い岩の大地か、そうでなければ、乾いた砂を敷き詰めたような地面が広がっている。その中にときおり、水の湧く場所がある。その水場のことを、オアシスと呼ぶ。そうした水のそばに、人が集まって暮らしている」

使者はいったん言葉を切った。それから、わたしの頭に砂漠の情景が沁みるのを待つような間をおいて、続けた。

「それらの中でもっとも美しく、とびきり豊かなオアシスが、ファナ・イビタルだ」

声は全体に落ち着き払っていたけれど、そのことを口にしたときだけ、子どものように、自慢げに弾んだ。

地上、という言葉にはなじみがなかったけれど、きっと火の国のある場所のことなのだろう。それよりも、火の国の人も水がなければ渴くのかと、わたしはそのことに驚いた。

灼熱の大地で暮らすことができるのは、かの国の人々が、けして炎に焼かれることのない、特別な肌を持っているからだと教わっていた。それなのに、水がなければ生きてはゆかれないのだと思うと、それはとても、不思議なことのような気がした。

ファナ・イビタル。口の中で、そのきれいな響きの音を転がすと、それは神々の住まう天のどこかではなく、生きた人の暮らす里なのだという感じがした。

その考えは、わたしに先ほどの本を思いださせた。母さんの話ではいかにも英雄然として、神々の眷属のようにしか思われなかった人物が、書物の中では生き活きとした、ひとりの人間として描かれている……

「このように水の豊かな土地は、地上ではとても珍しい。羨ましいことだ」

そう囁いた使者の声には、憧れるような響きがあった。その声音が、言葉の内容よりもなお雄弁に、遙かな土地の乾いた風を、わたしに想起させた。

「火の国は、とても遠いところだと教わったわ。どれくらい遠いの？」

「ああ、そうだな。地上までは一日も歩けば着くが、ファナ・イビタルへは、そこからさらにひと月ほどだ」

ひと月！ わたしは自分の耳を疑った。それがどれほどの距離なのか、見当もつかなかった。試したことはないけれど、里の端から端まで歩いて、二日もかからないだろう。

わたしがあんまり驚いていたからだろう、使者は笑って付け足した。「途中のオアシスに立ち寄りながらの旅だ。ひと月のあいだ、ずっと歩き詰めというわけではない」

それにしたって、途方もない話だった。それに、荷のこともある。使者とお話するのはこのときがはじめてのことだったけれど、火の国から運ばれてきた荷ならば、わたしも見たことがある。あんなにたくさんの荷物を、ひと月もかけて、ここまで背負ってくるというのだろうか。

わたしがそう言うと、使者は首を振った。

「荷は、駱駝をたくさん連れてきて、運ばせるのだ。いまも、里の外で待たせている。仲間が一人残って、面倒を見ているが」

ふと気づいたように、使者は言葉を途切れさせた。「ああ、駱駝も見たことがないだろうな」

駱駝というのは、火の国に棲む動物なのだと、使者はいった。四つ足で歩き、気性が大人しいのだと。また賢くて、人のいうことをよく聞くのだとも。

「この里には、人より体の大きな動物はいないようだな」

使者の言葉に、わたしは何度も頷いた。鼠や蝙蝠よりも大きな動物がいるのだということも、獣がひとのことを聞くだなんていうことも、とても信じられないような気持ちだった。それこそおとぎ話か、神話の中の出来ごとだとしか思えなかった。

人よりも体の大きな動物。そんなものがたくさんいるのなら、食べるものは足りるのだろうか。蝙蝠だって魚だって、ものを食べる。大きい動物なら、食べものもたくさん必要とするだろう。

ああ、だけどあれほどたくさんの荷を、惜しげもなくもたらしてくださるのだから、火の国はきっと、とても豊かな土地なのだろう……。

なにかをひとつ訊ねるたびに、ますます疑問はあふれかえるようだった。

「さっき、暗くて迷ったと仰ったけれど、そんなにここは暗い？」

「ああ、俺たちにとってはな。……お前たちのその眼には、暗闇の中でも、ちゃんともものが見えるのだろう

が」

その返答に、わたしは目をしばたいた。

「暗いところでは、明かりを使うわ。あなたがたは違うの？」

「いや、同じだ。けれど、俺たちが明かりがないと何も見えないような暗がりでも、お前たちはなんなく歩き回っている……」

使者は、ため息のような声でいった。

「はじめてお前たちの同胞に会って、その眼を見たときには、とても驚いた。地上でも、明るい色の瞳をした人間は、稀に見ないではないが。お前たちの瞳は、どういったらいいか……そう、暗がりの中で、うす青く光るだろう。あんな眼をもった人間は、ここ以外では見たことがない」

「青い？ ひとの目が？」

わたしが素っ頓狂な声を上げると、使者は訝しげにいった。「俺には、そのように見えるが」

「そんなふうを考えてみたことなんて、なかったわ」

わたしの声は、よほど途方に暮れていたのだろう。使者はゆっくりと言葉を考えるようにして、説明を足した。

「いままで会ったこの人々は皆、うすい灰青というか、そのような色の目をしているように見えたな。あるいは、青という言葉のさす色が、お前たちと俺とでは、少し違うかもしれないが……」

その言葉の内容を、少し考えて噛み砕いてから、わたしはわかったような気になって、うなずいた。

「そうかもしれない。言葉か、あるいは、色の見え方が」

「見え方、というのは？」

訊ねかえされて、わたしは向こうに見えるわけでもないのに、大きくうなずいた。

「たまに、ほかの人と違う目のつくりをしていて、明かりのあるところでも、うまく色が見分けられない子どもが生まれてくるのだそうよ。記録に書いてあったわ。あなたがたとわたしたちとでは、もともと色の見え方が違うのかもしれない。同じものを目にしても、同じような具合には、見えていないのかも」

使者はいっとき黙り込んだ。なかなか返事がかえってこないことに、わたしが不安になりだしたころ、囁くような声で、ようやく使者はいった。

「面白いことを考えるものだ。……お前は、字が読めるのか」

ええ、と頷いてから、わたしは少し声を沈ませた。「おかしいかしら？」

「いいや。なぜ？」

「女が読み書きなんかできたって、それが何になるのって、姉さんはいうわ。母さんも」

わたしはいつ、うつむいた。そもそも、里で書物の集められている場所といたら、この導師のお邸らしいものなのだそう。何か知りたいことがあればみな、導師を訪ねてここまでやってくる。わたしたちが特別で、ふつうの家で暮らしていれば、書物に触れる機会などほとんどないのだと、母さんはいう。

ずっとこのお邸で育ったわたしには、それは、なかなか飲み込みにくい話だった。けれど母さんは、繰り返しわたしにいつてきかせる。導師はとても偉い方で、本当なら、わたしが気安くお話しをできるような相手ではないのだと。

姉さんたちやわたしは、たまたま父さんが早くに死んでしまったために、里のしきたりに従って、導師の邸においでいただいている。導師はお優しいから、本当の家族と思うようにとってくださるけれど、わたしたちはそれを当然のこととってはならないのだと。

ひととおりのお説教のあとに、かならず母さんはいう。あなたはいずれお嫁に行くのだから、字が読めたって、何にもならないのよ。

「さて、学があって悪いことはないように思うが」

わたしはぱっと顔を上げた。けれど使者は、ふと考えなおすように、苦笑した。「ただ、そうだな。学のある女を煙たがる男は、いるかもしれないな」

「なぜ？」

わたしはとっさに訊きかえした。わたしがよく知っている男のひとつといたら、導師くらいのものだけれど、導師はわたしが新しいことを学ぶと、とても喜んでくださる。

使者は苦笑の気配をさせた。

「さて、なぜだろうな」

それはいかにも、大人が子どもを煙にまくときのいい方だった。わたしはちょっと唇をとがらせた。けれど、抗議するよりも早く、垂れ布にうつる使者の影が立ち上がった。

「あまり長居をすると、探されてしまうな」

使者は今度こそ、立ち去るようだった。衣擦れと、それからかすかに、なにか金属のぶつかって鳴る音がした。

「また、お話しできる？」

使者はすぐには、答えなかった。わたしは息をつめて、返事を待った。

「……そうだな、明日も来よう。暇を見つけることができたなら。お前は、明日もこの部屋にいるのか」

「昼間はずっといるわ」

そう答えながら、もどかしくてならなかった。聞きたいことはいくらでもあったし、明日かならず使者がいらっしゃるとは限らないのだ。ああ、どうしてもっと大急ぎで、色んなことを訊かなかったのだろうか？

わたしは歯噛みした。

それでも、これ以上使者を引き止めて、もし彼がこの場所にいることが誰かに知られてしまえば、きっと次はない。そう考えるくらいの分別はついた。

「来た方向へ戻って……そうね、よく見えないのなら、左手を壁についたままゆくといいわ。角をふたつやりすごしてから、今度は反対側の壁に手をつけて進んで、最初の角を折れると、広間に出ます」

戸口の布にかすかにうつった使者の影は、こちらを振り返ったようだった。

「ありがとう」

そういった使者の口調は、子どもにける言葉にしては、いささか丁重すぎるように思えた。気恥ずかしいような、いたたまれないような、複雑な気分をもてあまして、わたしは口早に言葉を重ねた。

「きっと、いらしてね」

その声は自分の耳にも、いかにも幼い子どものおねだりと聞こえた。恥ずかしさのあまり、頬が熱くなるのがわかった。

布ごしに、かすかに笑いを含んだ声が出た。「努力しよう」

やがて足音が立ち去ったあとも、わたしはその場に座り込んだまま、呆然としていた。たったいまああった出来事が、夢ではないのかと思えて。

そんなふうと思うくらい、勉強室は元の通り静まりかえっていて、布一枚へだてたヤァタ・ウイラには、もう何の気配もなかった。

いや——立ち上がり、そっと垂れ布をくぐって通路に顔を出すと、ほんのわずかに、空気が違っていた。かすかに甘く、涼しげな匂い。いつか、使者さまがたの荷のなかにあったという香料を、導師が見せてくださったことがある。どうやって使うのか見当もつかない、やわらかい石のような塊。その匂いと、よく似ていた。

けれど、それはほんとうにかすかなもので、じきにわからなくなってしまった。

姉さんはまだ奥の裁縫室で、炎の乙女の歌を歌っていた。まるで時間が経っていないような気もしたけ

れど、気づけば、机の上の手燭はすでに消えかかっていた。

戸棚から新しい蠟燭を取りだして、わたしは書き物机に戻った。そうして本のページに手をかけたまま、長いあいだ、ぼんやりしていた。

奇妙な魅力にいろどられた空想の切れ端が、幾度となく頭の中にひらめいては消えていった。火の国からやってきた使者。見渡すかぎりどこまでも広がるという、砂の大地。とびきり美しいという彼のオアシス……。

明日も来ようと、使者はいった。ならばそのときに、何をたずねよう。今度はよく考えておかなければならない。知りたいことは限りなく、そう、星の数ほどあった。

星の数ほど（セイラ・ウェルヤ）という言い回しを、そういえばわたしは、この勉強室にある古い書物の中で覚えたのだった。そういうひとくくりの言葉として覚えていて、語源なんて考えたこともなかったけれど、母さんのいう星とは、この星（ウェル）と同じものだろうか。

「トウイヤ、そこにいるの？」

その母さんの声がして、わたしはほとんど飛び上がるように椅子を蹴立てた。母さんがここに来たということは、もうかなりの夜更けということだ。使者の方々に夕餉を出して、その始末が終わるまでは、とても娘たちの様子を見にくるような暇は、ないはずだから。自分がとんでもなく長い時間、ぼうっと心を飛ばしていたらしいということに気がついて、わたしは驚いた。とっくに消えていた手燭に、母さんが新しい蠟燭を挿した。

「食べるものを持ってきたのよ」

そうって母さんは、わたしの顔を、心配げに覗き込んだ。「姉さんたちのところに運んであったのに、食べにこなかったというから」

「ごめんなさい。本に夢中になっていたの」

自分の声に、嘘の気配がにじんでいないか、ひやひやししながら、わたしはそう返した。

そうして、ようやく気づいたのだけれど、お腹はとっくに空っぽだった。当たり前だ。朝の早い時間にここにやってきて、それからずっと食べることも忘れていたのだから。

母さんが持ってきてくれたエトヤ豆のスープは、すっかり冷めていたけれど、どちらにしても、じっくり味わうような余裕はなかった。大慌てで流しこむと、ゆっくり食べなさいというお小言が降ってきた。

「ねえ、母さん」

空っぽになったスープ皿を、母さんに手渡ししながら、わたしはなんでもないふうを装って訊いた。「使者の方々って、どんなふうな人たちなの？」

「さあ。母さんは直接お会いするわけではありませんからね」

なあんだと、思わずがっかりした声を出すと、母さんの目がつりあがった。

「こっそり広間をのぞいてみようなんて、思っていないでしょうね」

大慌てで首を振ると、母さんはいつとき疑わしげにわたしを見下ろしていた。それからふっと、短いため息を落とした。

「そんな愚かな真似をするほど、もう小さい子どもではないわね？」

はい、と生真面目な顔をとりにくろって頷くと、母さんはもう一度、今度は長いため息をついた。

「あなたはほんの小さなころから、好奇心が強すぎて、お母さんはいつも苦勞のしどおしでしたよ。……今日はもう遅いわ。裁縫室の姉さんたちのところにいなさい」

「……はい。でも、明日もここにきていいでしょう？ 読みたい本がたくさんあるの」

母さんが渋い顔をするのに、慌てて言いつのった。「だって、ふつうのときは、こんなに一日中勉強室にいられる機会なんてないもの」

裁縫室などは、そもそも女たちしか使わないけれど、勉強室はそうもいかない。というよりも、むしろここは本来、男の人たちが使うための部屋なのだ。それを、彼らの用のないときに、わたしたちが使わせてもらっているというのが正しかった。

導師は里のみんなの先生だから、ここには色々な人がやってくる。毎年ユヅの月になると、大人になる手前の年頃の少年たちが導師のもとにあずけられて、さまざまのことを学ぶ。けれどそれ以外のときにも、何かあると皆、導師の知恵をあおぎに、ここまでやってくる。水場のようにすがおかしいときにも、作物の出来がよくないときにも、複雑な諍いが起きてしまって誰もが仲裁に困るときにも。

そして、そうやって導師を頼ってくる人たちのほとんどが、男の人だ。それだから、わたしたち女は、あまりここに長くはいられない。

母さんは肩を落として、けれど、頷いてくれた。「いいでしょう。でも、少しはお裁縫の練習もなさいね」「ありがとう、母さん！」

わたしは思わず声を上げて、母さんの細い肩に飛びついた。それを慌てて受け止めながら、母さんは苦笑した。

「ほんとうに、あなたは本が好きなのねえ」

その呆れた、けれど優しい声を聞きながら、ほんの少し、気が咎めるような気がした。

けれど本当のことを口にしてしまえば、叱られてすむような話でないのはわかっていた。だから、素直にはしゃぐふりをして、わたしは裁縫室へと向かった。

裁縫室の戸口をくぐると、姉さんたちは皆そろって、仮の寝床の支度をしていた。わたしたちがいつも使っている部屋に行くには、使者の方々をお泊めしている部屋のそばを通らなくてはならないので、予備の敷布や毛布や枕を、あらかじめ運びこんでいたのだった。

「ずっと見かけないと思ったら、また本なんか読んでたの？」

そういったのは、二番目の姉——三月ほど前にそれまで長く一番年上だったイラバが嫁いだことで、二番目に年かさになった、カナイだった。その声には嘲笑のひびきがあって、いつもだったらかちんときているところだったけれど、わたしはこのとき、半ばうわの空だった。「ええ、そうなの。つい夢中になってしまって」

「本なんて、何が面白いの」

信じられないというふうには、カナイはいった。「まあ、あんたは導師のお気に入りだから、点数稼ぎをするのもわかるけれど」

姉がそういう底意地の悪い口をきくのは、いまに限ったことではなかった。それにまともに反論することは、とっくの昔に諦めていた。本の中に記されているものごと、たとえば古い時代の人々の暮らしや、これまで作物を改良してきた一々の工夫、物語の中の神々や乙女たちのようす、そうしたものがどれほど面白いかということ、わたしがいくら言葉を尽くして語っても、姉の心にはそれらの事は、ちっとも響かないらしかった。

「どんな本を読んでいたの？」

とりなすようにそういったのは、三番目の姉だった。

「すごく、古いお話。わたしたちの祖先が、この里へ移り住んできたときの。姉さんは聞いたことがある？」

姉はあいまいに首を傾げた。

「さあ、あったかもしれないわね」

わたしは落胆した。母さんはしばらく忙しいし、姉さんたちが知っていれば、記憶の中の母さんの話や、書物のなかの物語と比べられるかと思っていたのだ。というのも、わたしの記憶のほうが、母さんの話と違ってしまっているかもしれなかったのだ。なにせわたしは幼い頃、とても夢見がちな子どもで、ときには聴いたお話の続きを、勝手に自分で作ってしまったりしていた。

「さあ、そろそろ寝ましょう。もう遅いわ」

一番上の姉さんがいうと、下の姉さんたちもその言葉に従って、それぞれの寝床にもぐりこんだ。

明かりが吹き消された。かすかなヒカリゴケの明かりだけが残る室内で、眼を閉じずに、ぼんやりと天井を見上げていた。

——いい声だな。

使者はたしかにそういった。そのときの声が、きゅうに耳の奥に蘇って、わたしは暗闇の中で、ひとり赤面した。

いい声ですって！ 姉たちを起こして、話して聞かせたいくらいだった。けれどじっとこらえて、わたしは毛布のうえから自分の胸を押さえた。心臓の音があまりにうるさくて、姉たちに聞こえるのではないかと、心配になった。

だけど、本当かしら。そう思ったとたん、浮かれていた気分が急速に沈んでいった。今まで声を人にほめられたことなんて、あつただろうか。姉さんたちは三人とも（嫁いだイラバもあわせれば、四人とも）、とても美しい声をしている。母さんや、ほかの姉さんの母さんたちだってそうだ。けれどわたし一人は、昔からちょっと低くてかすれた、あまり可愛らしいとはいえない声をしているような気がして、わたしはそのことをひそかに気にしていた。

声の美しいのは、裁縫がじょうずなのと同じくらい、女にとっては素晴らしいことだと、誰だってそう思っている。そしてそのどちらも、わたしには持ち合わせがない。読み書きならばわたしが一番だなんて、そんなふうに強がってみせても、ちっとも気にしないでいられたわけではなかった。

いい声だといったあの言葉は、もしかしてただのお世辞だったのだろうか。ひとたびそう疑ってしまうと、もうそうとしか思えなくなった。

だけど、火の国の女の人たちは、わたしたちと声の感じが違うかもしれない。その思いつきに、わたしは縋った。

目の見え方が違うというくらいなら、耳の聞こえ方だって、ずいぶん違うのかもしれない。そんなふうに、わたしは自分を慰めた。わたしたちにとってはそれほど良い声ではなくても、使者様の耳には、きれいな声に聞こえたのかもしれない。

けれど、その考えがただの慰めだということは、自分でよくわかっていた。

使者さまは、ほかにどんなお話をされていたかしら。

落胆から自分の考えを逸らそうとして、わたしは記憶をたぐった。私たちの目が、暗いところでは青く光ると、使者はいった。たしかに人の目は、暗闇のなかではかすかに光るけれど、火の国のひとたちは違うのだろうか。

彼らの瞳は、どんなふうだろう。わたしたちとそんなに違うのだろうか、形は、色は？

ああ！ たったひとこと、訊いてみればよかったのだ。あなたの瞳は何色をしているのって。いまさらのように気づいて、わたしは自分のうかつさを悔いた。

明日、訊いてみようか。ああ、でも、それこそはしたないと思われるだろうか。

それより、使者さまはほんとうに明日、勉強室までやってこられるのだろうか。急に不安になって、わたしは胸をぎゅっとおさえた。誰にも見つからず、じょうずに広間を抜けだしてこられるだろうか？

もう眠らなければと思うほど、目はますます冴えて、わたしはじっと天井に目を凝らしていた。ヒカリゴケの明かりにも、時間によってわずかに強弱がある。夜にはいくらか暗くなって、よくよく目を凝らさなければ、部屋の中の様子はわからない。

姉さんたちの寝息を数えながら、ようやくうつらうつらしては何度も目が覚めて、そうこうしているうちに、やがて遠くから、夜明けの鐘が響いてきた。

はれぼったい目をこすりながら、寝床から這い出すと、姉さんたちの誰かが明かりを灯した。「あーあ、たいくつねえ！」

食事の支度をしながら、カナイが叫んだ。三日間ものあいだ、外に出ることも許されないというのは、たしかに姉さんの性分には合わないだろう。

カナイは裁縫がじょうずだけれど、けして好きではないのだ。いつだって、とてもつまらなさそうに針を使っている。それでも、その手は魔法のように針をあやつって、あつというまに布地にきれいな刺繍を縫いつけてゆく。それなのに裁縫が好きじゃないなんて、わたしには不思議でしかたなかった。あれくらい上手にできれば、わたしだって裁縫が好きになっただろう。

母さんが夜のうちに持ってきてくれた食べ物は、まだたくさん残っていた。四人でそれを等分して、いつもよりゆったりとした朝食が始まった。

この三日間、洗濯は母さんたちがかわってくれるし、菜園の世話も、ほかの子たちに頼んである。閉じこもらなくてはいけないのは、このお邸の娘たち、わたしたち四人だけなのだ。あの子たちはこのお邸に近寄らないようにして、ふつうに過ごしている。

姉たちはそれぞれ、いまやっている手仕事の相談などをしながら、ゆっくり食事を味わっていた。けれどわたしはひとり、いそいで口の中に食べ物を詰め込むと、さっさと立ち上がった。

「勉強室にいるわ」

そう声をかけると、姉さんたちの間からため息と、からかうような笑い声がそれぞれに上がった。

カナイの意地の悪い視線を横顔に感じたけれど、わたしは気にせず、くるりと背を向けて部屋を出た。あきれられはしても、誰も止めないとわかっていた。

廊下を小走りに駆け抜けると、わたしは勉強室の前で足を止めた。そうしてひとつ、息を吸い込んだ。

「どなたか、いらっしゃいますか」

返事がないのを確かめて、念のためもう一度、声をかけた。返事がないと思えば、中にいるひとが本を読むのに夢中になっていて、気づかなかったということもある。何年も前に、それで一度、恥ずかしい思いをしたことがあった。

前の日は、今の時期ならばまさか誰もいないだろうと思っていたので、声さえかけずに入ったけれど、本当ならそれはとても無作法なことだ。まして、先にあの方がいらしているかもしれないのに、同じことをする度胸はなかった。

手燭に気をつけながら戸口の布をくぐり、静まり返った勉強室に入った。

書き物机の上に手燭を置くと、ごとりと重い音がした。石の机は、何百年もここで使われ続けているうちに磨り減って、天板がまっすぐではなくなっている。手を放しても手燭が傾かないことを確認して、わたしは奥の書棚に向かった。

本に読みふける気にはなれなかったのだけれど、もし誰かが様子を見にやってくるのであれば、その

ときに何もせずにぼんやりしているというの、言い訳に困るような気がした。

この日も涼しく、前日のように霞が出てはいなかったけれど、人のいない部屋の空気は、ひんやりしていた。適当に選んだ古い書物を持って、わたしは机についた。そうしていつとき、表紙を開いたり、また閉じたりしていた。

けれど使者は、なかなかやってこなかった。わたしはやがて、自分を落ち着かせようと、本のページをめくりはじめた。そうしていつときの間、ちっとも頭に入ってこない文面を流し見していた。

途中、はっとして手を止めたのは、火の国という文言が目飛び込んできたからだった。

――火ノ国ヨリ来タル使者、数ハ七、何レモ天ヲ突ク偉丈夫ニテ、頭髮マタ眼ハ黒色、膚モ暗キ色ヲシテ、古ノ作法ニテ祝詞ヲ述ベ……

とても背が高い人たちなのだわ。そう思うと、なんだか妙にそわそわした。昨日の使者も、ここに書かれているような姿をしているのだろうか。それともこの記録のときにいらしたのが、たまたまそういう方々だったのだろうか。

これは何年前の記録だろう。文体の古めかしさからして、二百年か三百年前、あるいはもっとだろうか。代々の導師が残しておられる正式の記録ならば、冒頭に必ず日付が記されているのだけれど、この書物はどうやら誰かの私記、ちょっとした覚え書きをまとめたものようだった。

なかなか見つからない日付をさがすことを諦めて、もとのページに戻った。続きには、そのときの里の状況が記されていた。

――其ノ節、草苗ノ病アリ、麦実ラズ、餓エニ因リテ死スル者数拾余ノ折、使者ノ下サレシ麦、乾酪ナル食物、干シタル果実等、数多ニテ、長、跪キテ謝意ヲ述ベ……

ざくりとして、わたしは文字をなぞる手を止めた。

とても、偉い方々なのだわ……。ようやくそうした実感がわいてきた。昨日の自分の物言いを思うと、冷や汗が出るようだった。長がひざまずいて礼を述べるような方々なのだ。導師よりも、長よりも、もっと偉いひとたち。

そのときト・ウイラのほうから足音が近づいてきて、わたしはびくりと肩を竦めた。

「中にいるか？」

前の日に聴いたのと同じ、やわらかな声だった。今度はト・ウイラのほうから、見当をつけてやってきたらしかった。もしかすると、誰かにヤアタ・ウイラの意味を教わったのかもしれない。

あれほど使者の訪れを望んでいたにもかかわらず、わたしは戸口に駆け寄るのをためらった。ひと呼吸、いや、ふた呼吸だろうか。声も出せずに息を吞んでいると、ふたたび声がした。「――まだ、来ていないか」

呪縛を解かれたように、わたしは立ち上がった。

「使者さま」

どうにか振り絞った声は、自分でわかるくらい、震えていた。

「なんだ、いたのか。……どうかしたのか」

使者の声は訝しげで、そこには怒っているような気配はなかったけれど、それでもわたしは肩を縮めた。

「その、わたし、昨日は失礼な口を……」

いいかけた言葉が途中で細って、消えた。布越しに、使者が笑う気配がしたのだった。

「なんだ、今日はずいぶんとしおらしい声を出す」

からかうようなその声は、優しかった。「気にすることはない。どうせ、ほかに誰が聞いているわけでもないのだから」

そう悪戯っぽく笑う声に、心臓が撥ねた。ああ、秘密という言葉は、どうしてあんなにどうしようもなく魅力的に響くのだろうか？

「だけどー」

まだためらうわたしを制するように、使者はいった。

「それに、俺も、お前の話に興味がある」

はっとして、わたしは顔をあげた。使者の気配は、たしかに生身の人のそれとして、布一枚隔てた向こうにあって、わたしの言葉を待っていた。

もう、無理に振り絞らなくても声は出た。

「ほんとう？」

「そんな嘘をついてどうする」

使者の声は、まだ可笑しそうに笑っていた。

ようやく胸のつかえがとれると、訊きたいことが、いっぺんに体の底からあふれてきた。けれど、その勢いがあまりに強すぎて、わたしはかえって言葉を詰まらせた。

やがて使者のほうから、何気ないふうに口を開いた。

「先ほど、お前たちの畑を見せてもらった。土の畑と、水耕池のほうと。なかなか美しいものだな。水がいいのか、土がいいのか……。あのようなわずかな陽射しで、よくあれほどの作物が作れるものだ」

「わずか？」

素っ頓狂な声が出て、わたしはとっさに自分の口を押さえた。大声を出したら、姉さんたちに聞こえるかもしれない。

わたしが驚いたことに、使者は戸惑ったようだった。

男の人たちが世話する畑を、わたしは見たことがないけれど、女たちの管理する菜園と、それほどつくりは違わないと聞いていた。

菜園には毎日きまった時間、目の眩むようなまばゆい光が降り注ぐ。光輝の神の恩恵だというその白い光は、作物が育つには不可欠のものではあるけれど、同時に、恐ろしいものでもある。眩しすぎるのだ。不用意に昼間の光を見つめすぎて、失明してしまったという人さえいる。

それを、わずかな光だなんて。驚きの波が弱まると、持ち前の好奇心が、胸に突き上げてきた。

「火の国は、昼間の畑よりももっと明るいよね？」

使者は、あっさりと頷いた。

「地上では、むしろ陽の光は強すぎて、水を干上がらせ、草木を枯らせてしまうのだ。とって、陽がなければそもそも作物は育たない。水さえもっとあればと、いつも思う」

「水……」

わたしが呆然と呟くと、使者は苦笑まじりに続けた。

「地上にこのような、豊かな水があれば。あるいはここにもっと明るい陽射しが入れば、どれほど豊かな実りが望めるだろうかと思う。ままたらぬものだ」

ため息のようなその言葉は、わたしに、一冊の書物を思い起こさせた。古くから続く、作物についての綿密な記録、そこに記された、途方もないような工夫の積み重ねを。

わたしは記憶を手繰りながら、そのことを使者に話した。魚の脂を利用して作る肥料。いくつもある畑の、光の射す具合に応じた作物の選択。同時に近くに植えるものの組み合わせ。ひとつの作物を収穫したあとは、続けて同じものを作らないこと。そのうえで一年を通して実りの偏らぬよう、細かく計算して作られた暦。あるいは間引きの時期や病害への対処……。数え上げればきりのないような、そうしたさまざまな手順を、いまある形に整えるまでに、どれほどの苦勞と積み重ねがあったかということ。

豊穰の神は、ただ恩恵を伏して待ち、己の知恵を尽くそうとしないものには、けして加護を与えてはくたさらないと、その記録の序文には、記されている。そうしたことを話すうちに、使者が小さく唸った。

「たいしたものだ。そうしたことを、すべて書物で学んだのか」

その声の、感心したような調子のなかに、子どもにしてはというような含みを感じて、わたしはちょっとむくれた。

「あなたが思っているほど、わたし、小さな子どもじゃないわ」

その抗議に対して帰ってきたのは、笑いぶくみの謝罪だった。「これは失礼した」

それがいかにも子どもをなだめる調子だったので、わたしはますます拗ねて、自分の沓（くつ）のつま先を握りしめた。そうしてから気づいたのだけれど、わたしのほうから使者の影がうっすらと見える以上に、机上に置いた手燭のあかりは、わたしの影を垂れ布へと投げかけているのに違いなかった。

気づいてみれば、座り込んで身を乗り出している自分の格好は、話をせがむ小さい子どもそのままだった。きゅうに頬が熱くなった。きちんと座りなおして姿勢を正すと、布越しに、またかすかな含み笑いが届いた。

「このような場所に、ずいぶん多くの人が暮らしていられるものだと、不思議に思っただけだ」

感心したように、使者はいった。わたしははっとして顔を上げた。

「けれど、人の数は……」

いいかけて、わたしは口ごもった。その先を口に出すことが、恐ろしかったのだ。それは、これまで誰もいってこなかった話だった。

「どうした？」

わたしはためらい、けれど、結局はそれを口にした。

「人の数は、少しずつ減っているの」

そのことを、このときまで誰にも話したことはなかった。導師にさえも。訊いてはならないことではないかと、そういう気がしたので。だからなるべく、意識に上らせないようにつとめていた。

だけど、わたしはずっと、怖かったのだ。誰かに不安を打ち明けたかった。口に出して、ようやくわたしはそのことがわかった。

その怯えは、声にもにじんでいたのだろう。使者はなだめるような声でいった。「どれくらい減っているのか、わかるか」

「三百年前には千二百あまりの人がいたと、記録には残っているわ。それが少しずつ減って行って、いまでは、もうじき千を割る」

ほかの誰も、そのことを憂いているような素振りがないことが、わたしには怖かった。どうして誰もそのことに気づかないのかと、そう思ったこともあったけれど、しかし目に見えてどんどん人が死んでいるというわけではなく、それは長年にわたるゆっくりとした変化だったから、普通にしていれば、気づかなくても無理のないことなのかもしれなかった。

けれど、このままずっと人が減り続けていったら？ 百年後はまだ大丈夫かもしれない。でも、五百年、千年が経てば？

抱え込んでいた不安を吐き出して、わたしはようやく口をつぐんだ。使者は、いつか沈黙したあとに、ようやくいった。

「そうしたことを、誰に教わった？」

誰からも、とわたしは答えた。わたしは何年も前から、導師が記録をつけたり、写本を作ったりされるのを手伝っていた。そうした中で、あるときそのことに気づいた。それから古い記録を辿っていった……。

なかなか返事がかえってこないのも、わたしはますます不安になって、自分の服の裾をきつく握りしめた。やはり、口に出してはいけないことだったのだろうか。それとも、使者が気を悪くされるようなことを、なにかいってしまったのだろうか。

やがて使者は、半ばひとりごとのように呟いた。

「智というのは、こうしたものなのか」

その声は、何かに驚いているようだった。その反応をどう受け取ったらよいのかわからなくて、わたしは戸惑った。どうやら自分が褒められているらしいということにも、すぐには気づけなかった。

「十年後にオアシスの水が枯れることをおそれる者は、いくらでもいる。だが、男たちのうちでどれほどが、千年先の部族の行く末に、思いをめぐらせることができるだろう？」

その声は、どこか熱を孕んでいた。

「それにしても、たいしたものだ。ファナ・イビタルならば、そうした記録の管理は通常、部族の中でも特に選ばれた男たちが任されるものだが」

わたしはそのあたりでようやく自分が褒められていることに気づいたけれど、喜ぶよりもむしろ、うろたえた。やはり、自分のようなものがこうしたことを口にするのは、分をわきまえないことなのだ。それだけがはっきりとわかった。

すっかり黙り込んでしまったわたしに、ようやく気づいたのだろう。こちらの様子をうかがうように、使者の影が揺れた。

「どうした？」

「わたしは何も、そんな……」

その声は、よほど萎縮していたのだろう。使者はふっと、我にかえったようだった。

「いや、驚かせてすまなかった。何も咎めてはいないのだ。ただ、そうだな。もしお前が……」

いいかけて、使者は口をつぐんだ。「いや……、なんでもない」

使者はあのとき、なにをいいかけたのだろう。わたしは語られなかった言葉の先を、想像した。もしわたしが、男だったなら？ それとも……

もしわたしが、火の国の人間だったなら？

なぜ自分が、そんなことを思いついたのか、自分でもわからなかった。けれど、その思いつきは、思いがけないほどの強さでわたしの胸を掴んで、激しく揺すぶった。

もしも。

それはひどく荒唐無稽な空想だった。もしも自分が神様だったならと、幼い子どもが思い描くのと、なんら変わらない。その上、そう——とても不遜な考えでもあった。

けれど、子どもが夢想することを、誰に止められるだろう？ わたしはその頃、まだ幼かったのだ。少なくとも、子ども扱いをされてむっとするくらいには。

わたしの内心の葛藤には気づかないようすで、使者は感慨深げに続けた。

「ファナ・イビタルの族長の邸にも、書庫はあり、教師はいる。その門戸はつねに開かれている。学ぼうと思えばその機会はあったのに、俺はそうしたことに、ほとんど興味をもとうとしなかった」

使者はそう言って、ため息をついた。わたしは我にかえって、使者の言葉に耳を傾けた。

「そうだな。お前の年の頃には、ただ剣の腕を磨くことばかりを考えていたように思う。そのほかに学ぶことといえば、迷わず砂漠を渡るための知恵くらいで……」

つい可笑しくなって、わたしはくすりと笑った。「きのうはお邸の中で、迷っていたのに？」

考えてみれば、それこそ不敬も甚だしい言い分だったのだけれど、使者はちょっと苦笑ただけで、怒りはしなかった。

「このような暗さではな。星さえ読むことができたならば、砂漠のどこであっても、迷いはしない」

「星？ いま星と仰った？」

驚いたわたしは、とっさに身を乗り出して、廊下と部屋とを隔てる布を掴んだ。その剣幕に驚いたのか、

使者がのけぞるような気配があった。「どうかしたのか」

「星を、知っているの？」

わたしの声は、よほど興奮していたのだろう。使者は面食らったようだった。けれどわたしの頭の中は驚きでいっぱい、恥じる余裕もなかった。

「知っているも何も……ああ、そうか。星を、見たことがないか」

言葉を切って、使者はなぜだか、答えをためらったようだった。けれど少しの沈黙のあとに、返事があった。「ああ。よく知っている」

「教えて。それは、火の国にあるものなの？」

そうだ、と使者はいった。

「どう説明したものか……。星というのは、天に輝くしるべなのだ。夜ごとに遥か高い空にあらわれる、小さな光の粒だ」

使者はまたそこで言葉を切って、少し考えるようだった。待ちかねてわたしが身を乗り出していると、かすかに笑うような気配があった。けれど今度は、むくれるような余裕はなかった。

「夜になると、数え切れないほどたくさんの星が、空いっぱいに輝きだす。それが時のたつにつれて、ゆっくりと頭上を巡ってゆく。ひとつひとつはとても小さいが、ほかの何よりもたしかな輝きだ。砂漠を旅するものを、つねに導いてくれる」

その光景を、わたしは頭のなかに思い描こうとしたけれど、それは成功したとはいいがたかった。

「天井に光るしるしが描かれているの？ ト・ウイラの壁に、二本の線が刻まれているみたいに？」

答えに迷うように、使者がかすかに首をかしげるのが、うっすらと布にうつる影と、空気の動く気配でわかった。「まあ、そのようなものだ。星は、ひとが作ったものではないが」

驚いて、わたしは目を丸くした。「では、誰が作ったの？」

「さて。色々な話がある」

使者はまた少し考えてから、ゆっくりと、いくつかの物語を語りだした。

――砂漠で迷って死んだ男がいた。干からびたその遺骸を見たひとりの賢者が、死したる旅人を哀れんで、その手にしていた杖を掲げると、それが空高くへまっすぐにのぼり、煌々と輝くみちしるべとなって、以来、砂漠を渡るものを末永くたすけるようになった。

――あるオアシスにひとりの鍛冶師がいた。男は妻を大変に愛し、仲睦まじく暮らしていたのだが、その腕があまりにすばらしかったために、あるとき神々の目に留まり、星を鍛える者として天に召し上げられてしまった。男の妻はひどく嘆いて泣き暮らし、夜毎に神々を呪った。天高くからそのようすを見ていた夫は、一夜にひとつの星を地上へと流し、妻への慰めとした。

――銀を巧みに磨いてうつくしく輝かせる、とびきりのわざを持った細工師がいた。それを知ったずる賢い商人が、細工師をだましてその粒を安くで買った。商人は粒を持ってほかの人々のところへ行き、高く売りつけようとした。これは地上に落ちた星であり、手にすれば願いが叶うと、そんなふうに乗っかって。最初の客を騙そうとしたその夜、たくさんあった銀の粒はすべて、音もなくひとりで商人の手を離れて、そのまま天高く上っていった。呆然と見上げる商人の前で、それらはほんものの星になってしまった。

どれも、聴いたことのない話ばかりだった。わたしは息をつめて使者の話に聞き入った。途中、何度もこの話を書き留めることが許されるなら、誰かに話して聞かせることができるのならと考えた。

星というものは、小さな光の粒なのだ、と、使者は教えてくれたけれど、その色やあかるさは、ひとつひとつ違っているらしかった。

話を聞きながら、わたしはたくさんの光の粒が頭上に輝いているところを、なんとか想像しようとしてみた。けれど、それらの印象はいつのまにか、見慣れたヒカリゴケの明かりと、重なってしまうのだった。

星はゆっくり動いているというけれど、いったいどうやって動くのだろう。星というのは、生きているのだろうか。

けれどそうたずねる前に、影が揺れて、衣擦れの音がした。

「もう行ってしまうの？」

「ああ、そろそろ戻らねば。来年の荷のことも、導師殿と、もう少し打ち合わせねばならないのでな」

「明日もお話しできる？」

使者は、少し困ったようだった。「いや。明日は、出立の支度で忙しい」

「そう……」

肩を落として、わたしは唇を噛んだ。引き止めたかった。もっと色んな話を聴きたかった。けれどそれが、ひどくわがままなことだというのは、自分でもわかっていた。

わたしはじっと、垂れ布越しにかすかにうつる影を見つめていた。引きとめるまいと口をつぐむのでせいっぱいで、旅の無事を祈る言葉どころか、話を聞かせてくださったことへの礼さえ、口にできなかった。

やがて、影がゆれた。

「それでは、達者でな」

使者は今度こそ、立ち去るようだった。その足音に縋るように、わたしは声を上げていた。

「お名前を、教えてください？」

足音が止んだ。

ほんのわずかなためらいのあとに、使者は名乗った。「ヨブ。ファナ・イビタルの、ヨブ・イ・ヤシャルだ」

——ヨブ。その名をけして忘れないように、わたしは口のなかで繰り返した。どこに書きとめるわけにもいかないと、重々承知していたので。

「——知恵の女神の娘よ、お前の名はなんというのだ」

その大それた呼びかけを、畏れ多いと感じるだけの気持ちの余裕さえなかった。わたしは慌てて名乗った。「トウイヤ」

「いい名前だ」

使者は、ほほえんだようだった。顔を見たわけではないけれど、その言葉に、やわらかな笑みの気配が滲んでいた。

「お前の名もまた、星にちなんでいるようだ」

わたしはひどく驚いた。トウイヤというのは、はるか昔、空に星がまだなかったころの世に、いちばん最初に輝くようになった星なのだ。ヨブはそう説明してくれた。

まだわたしが驚きから醒めないでいるうちに、ヨブはいった。「エルトーハ・ファティスのトウイヤ。また会おう。来年の、サフィドラの月に」

使者の足音が遠ざかり、すっかり聞こえなくなってしまうと、彼がそこにいたという痕跡は、やはり何も残ってはいなかった。

ヨブ・イ・ヤシャル。聞きなれない響きの名前の気配だけが、古い書物のおいと混じって、部屋の中に、まだ漂っているような気がした。

話していた時間は、どれほどのものだっただろうか、あっという間に過ぎたようにも思えたし、百年も話

しこんでいたようにも感じられた。

トウイヤ。使者がわたしの名を呼んだ、その抑揚が、耳に残っていた。彼が口にすると、ほんのすこし響きが変わって、まるで別の人間の名前のように感じられた。

来年のサフィドラの月に。

夢から醒めたように、わたしは目を瞬いた。長い時間おなじ姿勢で座り続けていたために、体はすっかりこわばっていたけれど、手のひらは火照って熱かった。

ふらつく足取りで書き物机にもどると、短くなった灯心が、音を立てて炎を揺らした。

火の国より来たる者（2）

日常はすぐに押し寄せて、いつもの忙しい朝がやってきた。

菜園の世話は早朝、日の射す前からはじまるし、そのためにはもっと早い時間に水汲みをしておかななくてはならない。洗濯や掃除や竈の番、危なっかしい手つきでの繕いもの、そうした雑事のくりかえしの日々。けれど、それらの時間は、以前とすっかり同じものではなかった。

表面的にはなにひとつ変わっていない。それでも日々のささやかな出来事をとらえるわたしの心は、以前と少しずつ違ってしまっていた。

菜園で、頭上から降り注ぐ光を受けるたびに、これよりもずっと眩しいのが当たり前だという、火の国のありように思いを馳せずにはいられなかった。ヤアタ・ウイラの足元に刻まれた模様を眺めているとき、天高くに数え切れないほど輝くという、星々のすがたを空想した。

写本をつくるために、紙束を前に羽根ペンを手にしているときだけが、以前とまったくかわらなかった。心は自然と針のように引き絞られて、目の前の作業に集中した。紙もインクも、とても貴重なものだ。気を散らして書き損じるなんて、とんでもない話だった。

けして間違いのないよう、一字一句に心をとぎすませて、わたしは古い書物を引き写していった。言葉が古くてわかりづらい言い回しがあれば、紙の余白に注釈を加える。虫に食われたり、インクが劣化して読めなくなった箇所は、導師と相談しながら失われた言葉をさぐり、ときには空白のままとして先に進んだ。写本を作る作業が、わたしはとても好きだった。ひとつの記録と濃密に向きあう、その時間が。

まだ十四歳だったわたしにとって、一年というのは、途方もなく長い時間だった。そのあいだ、わたしは何度も何度も使者の語った言葉を思い返した。

火の国には水が乏しいという一方で、なぜ彼らは毎年、あれほどたくさんの品々を運んでこられるのだろう。火の国の天に輝くというしるべの名前が、なぜわたしたちの暦や、わたしの名前に使われているのだろう。考えることはいくらでもあって、けれど、そのほとんどが、答えのみつからない問いだった。

ひとりで考え込む時間が増えるにつれて、母さんのため息も増えたようだった。けれどその頃のわたしには、人のようすを気にするだけの余裕もなかった。新しく目の前に開けた世界に、夢中だったのだ。

ようやく母さんの態度の変化をはっきりと意識したのは、その年も終わりに近づいてからのことだ。

ある日、乾いた洗濯物を抱えて部屋に戻る途中で、誰かの話し声が聞こえてきた。

声は、知っている人のものだった。ひとりにはカナイの母さん。もうひとりはその兄、つまり、カナイの伯父だった。

盗み聞きをするつもりはなかったのだけれど、部屋の前を通るあいだ、いやでも会話は耳に飛び込んできた。

「カナイにもそろそろ、相手を見つけてやらなきゃならんのだろう」

わたしは一瞬、部屋のほうを横目に見た。姉さんの縁談がなかなか決まらないという話は、その前にも何度か耳にしていた。

「それがなかなか、いい人がいないのよ」

「バルトレイはどうだ。あれは真面目な、いい男だぞ」

バルトレイ。その名前は、わたしも知っていた。

成人前の男の子たちは、ユヴの月になると、この邸に学びにやってくる。ふつうはそのひと月のあいだに限ってのことだけれど、ときには書物に興味を持って、そのあともここに通うようになる人がいる。

そういう男の人たちがいまも何人かいて、その中から誰かがいずれ、導師のあとを継ぐことになるだろうといわれている。バルトレイは、その中のひとりだった。わたしは直接話をしたことはないけれど、ときどき導師がおっしゃるのを聞くかぎりでは、カナイの伯父のいうとおり、気持ちのいい人物のようだった。「だめなの。あの人はカナイにとっては、父方のはとこにあたるのよ」

カナイの母さんはそう言って、ため息を落とした。「ままならないものね」

三代さかのぼるまでに父祖を同じくするものとは、婚姻をゆるされない。その戒律は、わたしも知っていた。

けれどずっと昔には、そうではなかったのだそうだ。

わたしたちの祖がこの地に移り住んできたという、あの古い物語のなかには、いところ同士であるという夫婦が登場した。不思議に思って、導師にお尋ねしたことがある。古い時代にはそうしたことは珍しくなかったようだ、導師は教えてくださった。

いつ頃から、どうして禁じられるようになったのか。気になるならば、自分で調べてごらん。導師はそうも仰った。古い記録を順に紐解けば、そうした戒律が出来たのは、いまから三百年ほど前のことのようにだった。そしてそれは、当時の火の国の使者よりもたらされた助言なのだという。そうすることが何の役にたつのかは、記録の中には見当たらなかったのだけれど……。

ともかく、その戒めがさまたげとなって、姉さんの婚約は、なかなか決まらないらしかった。カナイの曾祖父というひとには、とてもたくさんの子どもがいたのだそうだ。そのためにカナイには、血縁のある人が多い。

部屋の前を通り過ぎていくらもいかないうちに、当のカナイが向かい側からやってくるのが見えた。

「姉さん」

わたしはとっさに、カナイを呼び止めていた。このまま歩いていけば、二人の話が聞こえてしまうに違いなかった。そうなればカナイの機嫌は悪くなるだろう。

なかなか相手が決まらないことを、姉はどうも、屈辱的なことのように感じているふしがあった。まだ嫁ぐのに遅すぎるという年齢ではないし、相手が決まらないのは、カナイのせいではないのだけれど。

足を止めて、カナイは怪訝そうな顔をした。それもそうだろう、わたしのほうからカナイに話しかけることは、近ごろではあまり多くなかった。

「なによ」

「母さんを見なかった？」

とっさの思いつきでそうたずねると、カナイは迷惑そうに首をすくめた。「さあ、知らないわ」

そう、とあいづちをうったはいいけれど、あとに続ける話は何も思い当たらなかった。迷っていると、カナイのほうから口を開いた。

「それより、あんた、まだ洗濯も終わらせてなかったの？ あんたひとりだけ裁縫も料理もへたなんだから、せめてほかのことぐらい、手早くこなしたら？」

とげのある声でそれだけ言い捨てると、カナイはさっさと歩き出してしまった。

わたしはため息をついて、自分の手の中の洗濯物を見つめた。

どうしてカナイはわたしを嫌うのだろう。

カナイが誰にでもおなじように意地の悪い口をきくのなら、がまんできる。でも、ほかの姉さんたちとは、仲良くしているのだ。ちょっとした失敗を、いちいち咎め立てることもなく。

わたしの何が、あんなにカナイを苛立たせるのだろう。手先が不器用なことが？ それとも、おかしいものばかりに興味をもつことが？

いつからわたしたちは、こんなに険悪になってしまったのだろう。わたしは肩を落とした。昔からずっとそうだったわけではなかった……。

わたしは気を取り直して、顔を上げた。わたしたちの交わした声はそれなりに大きかったから、向こうで話していたふたりも、カナイがいることに気づいただろう。

カナイの相手が、早く決まるといい。あまり褒められたことではないかもしれないけれど、そのころ、わたしはよくそんなふうに考えていた。カナイも嫁いだあとまで、わざわざわたしに意地悪をいうために顔をだしたりはしないだろうから。

そんなことがあってから、数日も経たないうちだった。じぐざぐになってしまった縫い目を相手に、わたしが苦戦していると、母さんが自分の針を止めて、ふと思い出したようにいった。

「そろそろあなたの嫁ぎ先のこと、考えなくてはならないわね」

わたしはぎょっとして顔を上げ、その拍子に針を指に刺した。

「ほら、気をつけて。なにやってるの」

わたしは慌てていった。「母さん、わたし、まだ十四よ」

だけど、母さんは眉を吊り上げた。

「早すぎることはありませんよ。それに、話が決まってすぐにお嫁に行くわけではないもの。準備だっているあるのだし」

カナイの件といい、母さんたちが急にそろってそんなことをいいたしたのは、理由があった。エオンの月が迫ってきているのだ。

婚礼は毎年きまって、エオンの月に執り行われる。去年はイラバが嫁いでいった。今年は、いまいる姉たちのうちで一番年かきの姉、シーリーンが。いま母さんが縫っているのは、その祝いに贈るための壁掛けだった。

「だけど、母さん」

わたしが抗議の声を上げると、母さんは眉をひそめた。それでもくじけずに、わたしはいった。「わたし、お嫁になんか行きたくないわ」

「馬鹿なことをいわないの」

母さんがそんなふうに強い剣幕でものをいうのは、めったにあることではなかった。わたしは首をすくめたけれど、引き下がりはしなかった。

「だって、お嫁にいったら、もう本は読めないのでしょうか」

母さんは手にしていた縫い物を床に置いた。その表情は、初めて見るくらい、険しかった。

「本を読むのが、お前の仕事ではないのよ」

「だけど……」

「わきまえなさい」

ぴしゃりといって、母さんは首を振った。「いつまでもここにご厄介になっているわけにはいかないのよ」ぐっと言葉に詰まって、顎を引くと、母さんは眉間を指先で押さえて、ため息をついた。

わたしは邸の厄介者なのだろうか。その考えは、ひどい悲しみをわたしにもたらした。導師はわたしが

いつまでもここにいたら、お困りになるのだろうか……。

「トウイヤ、よく聞きなさい。嫁いで子どもを産み育てるのは、すべての女の大切なつとめなのよ。いい家庭を作って、幸せになることもね」

ふっと声音をやわらげて、母さんはいった。「心配しなくても、かならずいい人を探してあげるから。あなたを不幸せにするような、おかしな人のところになんて、お嫁にやったりしませんよ」

わたしを安心させようとするように、母さんは微笑んだ。けれどわたしの心はちっとも晴れなかった。

母さんは矛盾したことをいっている。二度と書物に触れることもなく、この世界について新たに何も学ぶことができないというのなら、夫となる人がどんなにいいひとだろうと、わたしの幸せはそこにはない。

だけどわたしがそういうと、母さんはそんなものは甘えだといって、また眉を吊り上げるのだった。

母さんが、わたしのために思ってくれているのはわかっていた。だけどわたしは嫁ぐ相手に不満があるのではなく、このお邸を出てよそに嫁ぐということそのものが、嫌でたまらないのだ。

微笑んだまま、母さんはいった。

「不安に思うかもしれないけれど、子どもを持ってみればわかるわ。わたしはお前を産んで、とても幸せでしたよ」

話がかみ合わないのが悲しくて、悔しくて、わたしはそれこそ子どものように、声を荒げてわめいた。「そうじゃないの。そういうことじゃないのよ……」

いいあう声は、響いていたらしかった。次の日になって、姉さんたちからかわれた。

「おかしな子ね。わたしは早いことお嫁にいきたいわ。この辛気臭いお邸をさっさと出て！」

そう明るく笑ったのは、三番目の姉だった。

「あんたの母さんのいうとおりよ。ここを出て行きたくないなんて、そんなのあんたが甘ったれてるだけだわ。どうせおおかた、男のひとが怖いんでしょ」

カナイは鼻の頭にしわをよせて、そんなふうにいって。「自分の父親だって知らないんだから、無理もないかもしれないけどね」

「カナイ、それはあんまり意地悪ないいかただわ」

シーリーンが眉をひそめて、そんなふうにかナイをたしなめたけれど、わたしは打たれたように固まっていた。カナイは鼻を鳴らして、そっぽを向いてしまった。

「大丈夫よ、きっといいひとが見つかるわ」

「そうよ。心配いらないわ、うんと優しくて、トウイヤのことを大事にしてくれるようなひとが、きっと見つかるから」

ふたりの姉さんたちは、口々に慰めてくれたけれど、それらの言葉はわたしの心に、ろくに届かなかった。

カナイのいうとおりなのだろうか？ わたしは黙り込んだまま、そのことを考えた。父さんは、わたしが生まれる少し前に死んでしまったという。わたしは生まれたときから、ずっとこのお邸にいた。たまたまほかの姉さんたちにも、兄や弟はいないし、導師にも子どもがない。だから、わたしにとって男の家族は、導師ひとりだった。

わたしにとっては、ずっとそれが当たり前のことだったけれど、姉さんたちは違う。姉さんたちにはみな、多かれ少なかれ、それぞれの父さんが生きていたときの記憶がある。それまで暮らしていた場所、ここではない家についての思い出が。

だからわたしは、こんなに嫁ぐことがいやなのだろうか？ 男のひとのことを知らないから、漠然と不安を感じているだけなのだろうか。だから姉さんたちのように、恋物語に強く心を惹かれたりしないのだろうか。

たしかな答えは、すぐに見いだせそうにはなかったけれど、わたしはひとつ、大事なことに気がついた。少なくとも、母さんはそう思っているのだ。

そう考えれば、これまでの母さんの頑なな態度のわけが、わかったような気がした。

もうすぐお嫁に行くシーリーンが、ぽつりといった。

「不安になるのも、ちょっと、わからないではないわ」

とっさにわたしが縋るような目を向けると、シーリーンはわたしを安心させるように、微笑を返した。

「でも、大丈夫よ。イラバだって、いい人のところに嫁いだじゃない」

わたしは落胆して肩を落とした。

誰にもわかってもらえないのだと、そう思った。悲しくてたまらなかった。姉さんたちは、書物にも、その中に記されている世界のありようのことにも、ちっとも興味がないのだ。本が読めなくなるということが、わたしにとってどれだけつらいものなのか、誰もわかってはくれない。

それに嫁いでしまえば、もう使者さまとお話しできる機会だって……。

けれどそれは、誰にもいえないことだった。母さんにも、姉さんたちにも。

ほかの人には絶対にいわないでと、そんなふうに秘密をわかちあえるほど親しい女の子は、わたしにはいなかった。ただのひとりも。

菜園や水場、あるいは竈で、近くの家の人たちとは、毎日のように顔をあわせる。年の近い子も何人かいる。雑事の合間に、ちょっとした短い会話をかわすことは多い。だけど、それだけだった。

彼女たちの興味は、まだ見ぬ婚約者や、恋物語や、そうでなければ彼女らの家族のことに限られていた。わたしは本ばかり読んでいる変わり者で、そのうえ、導師のお邸の娘なのだった。

何も、特別に避けられたり、嫌われたりというようなことではない。けれど彼女らとわたしのあいだの距離は、いつまでも埋まることがなかった。わたしがほんのちょっとでも真面目な話をするとならそれが書物のことや、導師のお話のことではなくて、たとえば菜園に埋める肥料のくふうだったり、暦のなかに見出した不思議な法則のことだったりといった、彼女らにとってもけして全くの無縁ではないはずの内容であっても、彼女らはちょっと目を瞠って、首をかしげるのだ。トウイヤはとてもかしこいのね。あなたのお話は難しく、わたしにはよくわからないわ。導師のおそばで育ったひとは、やはり違うわね。

そう、非はいつだって、わたしのほうにあるのだった。自分でも、よくわかっていた。ほかの女の子たちが好きなことに興味をもてず、皆が関心のもてないことばかりを愛するわたしがいけないのだ。

どうしてわたしひとり、こんなふうなのだろう。

ことさらに天邪鬼になって、わざとみんなと違うことを好きになろうとしたつもりはなかった。気づいたときには、皆が好むことをあまり好きになれず、皆があたりまえにできることがうまくやれなかった。人より得意なこともいくつかはあったけれど、それはほとんど誰からも喜ばれず、姉さんたちを呆れさせ、母さんの眉をひそめさせるばかりで。

わたしが情熱をもって語ることを、導師だけはいつだって微笑んで聴いてくださる。だけど導師は誰のいうことにだって、やさしく耳を傾けてくださるのだ。わたしのいうことは、ほかのひとにはいつだって、まともに理解されることも、共感されることもなかった。しかたのない子ねと、やさしく呆れられることはあっても。

そう、ヨブ・イ・ヤシャル、あの方のほかには。

あの一ひとがわたしの話に興味があるといってくれたことが、わたしには、とても大切だった。たとえそれが、単なるものめずらしさのためだったとしても。

遠く離れた国の使者さまには伝わる言葉が、いつも一緒にいる母さんや姉さんたちには、どうしてこんなにも伝わらないのだろう。

いくらそばにいても、たくさん言葉を交わしても、本当にいいたいことをちっともわかってもらえないのは、もどかしくて、寂しい。

そんなふうに思うのは、とてもぜいたくなことだ。わかっている。この邸のなかでいちばん末のわたしは、母さんたちからも、姉さんたちからも、よけいに甘やかされて、可愛がられてきた。それなのに、それ以上の何を望むというのか。そんなのは、ただのわがままだ。

だけど、わかっている、わたしはいつでも寂しかった。

わたしはずっと、理解者に餓えていたのだ……。

エオンの月が目の前に迫り、ひと月をかけての婚礼がはじまろうとする頃になると、わたしはため息をつくことが増えた。シーリーンが嫁いでしまったら、寂しくなる。

当のシーリーンはというと、毎日とても忙しそうだった。婚礼衣装を自分で縫うのが近ごろの流行りだったし、そのほかの嫁入り道具だって、いくら支度をして、しすぎることはないのだそうだ。あれこれと忙しく母さんたちに相談するシーリーンの声は、いつも明るく弾んで、新しい暮らしへの期待に満ちていた。

姉さんたちにとっては、このお邸は仮の住まいで、いつか出て行くべき場所だった。わたしだけが多分、そのことを本当にはわかっていなかった。

それを思えば姉さんたちが、学ぶことにあまり興味をみせなかったのは、賢明なことだったのかもしれない。好きになってもしかたのないものから、距離をおくというのは。

そんなふうに考えると、自分がいかにも愚かしく、みっともないように思えてきて、気分は重く沈んだ。

ふつうの衣服や日用品につかう布は、水草からつくる糸で織るけれど、婚礼衣装のそれは、火の国よりもたらされた、特別の布をつかう。滑らかな手触りの、白い布だ。縫いあがった衣装を、試しにまもってみせたシーリーンは、美しかった。

いよいよ明日からエオンの月になるというその晩、イラバが邸に泊まりにきた。前に嫁いでいった姉さん、わたしにとっては血の繋がった唯一の姉だ。

シーリーンも嫁いでしまうし、久しぶりに姉妹でゆっくり過ごそうということのようだった。イラバはその腕に、ちいさな男の子を抱いていた。姉たちは歓声をあげて、かわるがわる赤ん坊を抱いた。「みんな、元気そうでよかったわ。もっと早くに顔を見にきたかったのだけれど、一度出てしまうと、ここはなかなか敷居が高くて」

そうって微笑んだイラバは、以前よりも、少し痩せたようだった。

その腕に、青黒く変色したあざがあることに、誰もがすぐに気づいた。ちょっとね、とって、イラバはわけを話そうとしなかったけれど、おそらく赤ん坊の父親が原因だろうということは、誰もが察していた。婚姻のときにはとても優しそうに見えた、イラバの夫。だけどそれを口に出してしまえば、いまからまさにお嫁にゆこうというシーリーンの幸福に、水をさすことになる……。

わたしは口を引き結んで、姉さんの腕にしがみついた。

「あらあら、小さな子どもみたいね」

イラバはそう笑ったけれど、わたしはその手を放さなかった。

間近でみるわたしの甥は、まだ歯も生え揃わないようすだった。その丸い頬にそっとさわると、赤ん坊の肌はおどろくほどすべすべしていて、やわらかかった。くすぐったかったのか、赤ん坊は声を上げて笑い、

わたしの指を、そのちいさな手で掴んだ。よだれでべとべとした指がくすぐったくて、わたしは戸惑った。「可愛いでしょう？」

イラバが微笑んでそういうのに、頷き返ししながら、わたしは唇を噛んだ。母さんのいったことを思い出した。たしかに、子どもは可愛い。だけど……

姉の腕に広がる痣に、わたしはそっと触れた。イラバは困ったように笑った。「たいして痛くないのよ。なんでもないの」

その言葉を素直に信じることは難しかったけれど、それでも寝息を立て始めたわが子を揺するイラバの横顔は、まるで本当になんでもないというように、穏やかだった。姉さんの長く白い指が、赤ん坊のやわらかい髪をそっと梳くのを、わたしは飽かずにじっと見つめていた。

――姉さん、いま、幸せ？

喉のところまで出かかった質問を、わたしは何度も飲み込んだ。そうではないのだといってほしい自分が、浅ましいような気がして。

もしわたしが、火の国に生まれていれば。

その考えは、ふとした拍子に何度も胸の奥から立ち上ってきては、わたしの心を遠くへ飛ばした。その考えがあまりに不遜だというのはよくわかっていたつもりだけれど、それでも夢想は、それ以上に魅力的だった。

もしわたしが、火の国で生まれ育っていたならば、何かが違っていただろうか？

火の国でも、部族の記録をあつかうのは一部の男の人たちなのだと、ヨブはいった。それなら火の国でもやはり、女が学びたがるのは喜ばれないのかもしれない。そういえば、賢い女を好まない男もいるともいっていた。

もしも、わたしが火の国の、それも男として生まれていたら。それならもっと気兼ねなくいろいろなことを学んで、その知恵を、ひとの役に立てていられたのだろうか。あるいは天に輝くというしるべを読んで、みわたすかぎり広がるという砂の大地を、自在に渡ることができただろうか。

空想はひどく胸を高揚させたけれど、いつもそんな夢物語ばかりを考えていられたわけではなかった。

エオンの月には、婚姻にまつわるさまざまな儀式が執り行われる。花嫁であるシーリーンの身内として、わたしも当然、それを手伝わなくてはならなかった。

シーリーンの夫となる人とも、何度か言葉をかわす機会があった。なんだか気弱そうな話し方をする人だな、と思ったけれど、それ以上の印象はなかった。

姉さんはこのひとのことを、好きになるのだろうか。ただ漠然と、そんなことを思った。そうして、幸せになるのだろうか。

普段よりも忙しくはあったけれど、慌しいのはほかの人たちも同じことで、誰も勉強室を使わない日は、普段より多かった。それでかえって、わたしは本を読む時間をとることができた。

ある日、古い帳面をながめていた。火の国からの荷について書かれたものだ。そのほとんどが、ごく淡々とした記録だったけれど、そのときの変った出来事や、使者の仰った言葉なども、併せて書き留められていた。

じきに日暮れというころだった。ト・ウイラのほうから足音が近づいてきて、わたしは本を手に立ち上がった。誰か男のひとがここを使うのなら、いそいで出て行かなければならないので。

「入るよ」

穏やかな声に、わたしはほっとして、本を机に戻した。いらしたのは導師だった。

垂れ布をくぐって中に入ると、導師はわたしの顔を見て、微笑んだ。

「ゆっくりお前の顔を見るのは、何日ぶりだろうね」

導師には、新たに生まれた夫婦への祝福をさずけるお役目があって、毎日のように、色々な祝いの場に呼ばれていた。なんせこの年には、里じゅうで十二組もの婚姻があったのだ。

書棚に向かうと、導師は一番手前の棚から、一冊の厚い書物を取り出した。それがあまりに分厚く、重そうだったので、わたしは思わず駆け寄って導師を手伝った。

「ことし夫婦になった者たちの名を、控えておかねばな。早いうちに手をつけねばと思いながら、いまになってしまった。手伝ってくれるかね、トウイヤ」

近ごろ導師は眼のぐあいあまりよくなくて、普通に過ごすにはともかく、読み書きに不自由するようになった。わたしは導師の口にした名前を、ひとつずついねいに帳面に記していった。その中にはもちろん、シーリーンの名もあった。

全ての名を書き終えると、導師は感慨深げに、ため息をついた。

「シーリーンが嫁いで、寂しくなったな」

はい、とうなずいて、わたしはそっと、羽根ペンを拭った。ときおり蠟燭の灯芯がくすぶって、炎が大きく揺れる。その明かりに照らされて、導師はいつとき瞑目した。それから目を開いて、わたしの手元を見た。

「今日は、何を読んでいたのかね」

「火の国の記録です」

わたしは答えて、さっきまで読んでいた記録を開いてみせた。導師はうなずいて、かすかに首を傾けた。

「何か、面白いことは書いてあったかね」

「荷の中身が、その年によってずいぶん違うのを、なぜだろうと考えていました。この年には、妻が不作だったのだろうかとか、次の年にはずいぶんたくさんの銀を運んでいかれたのだとか……」

そう答えると、導師はゆっくりと頷いた。

「さて、天つ国の方々にも、なにか私たちにはわからないご事情が、おありなのだろうか」

導師はそこで言葉を切って、やわらかく苦笑した。

「お前は昔から、なぜ、と問うのが得意だった」

わたしは反応に困って、首をかしげた。導師は懐かしげに目を細めて、机の上で、ゆっくりと指を組んだ。

「答えるのには、なかなか骨が折れた。思いもつかぬことを訊いてくるのでな」

「ごめんなさい」

とっさに謝りはしたけれど、わたしはあまり悪びれてはいなかった。笑いを含んだ導師の声は、あきれているというよりも、むしろ楽しげだったので。

「火の国のことに、興味があるのかね」

どきりとして、わたしはとっさに背筋をのばした。「少しだけ」

導師は頷いて、わたしの顔をまじまじと覗き込んだ。その瞳は、母さんのそれと同じように、白い薄膜のかかったようになっていた。けれどその瞳にはいつでも、ほかの誰の目にも見たことのない、ふしぎな輝きがあった。

導師はなにかご存知なのだろうか。内心では不安を感じていたけれど、わたしはなんでもないふうをよそおって、言葉を足した。

「わたしには、不思議に思えてしかたがないのです。火の燃え盛るという国で、どうして人が生きていられるのか。そのようなおそろしい場所で、どうしてあんなふうにたくさんの豊かな品々が得られるのか……」

その言葉に、嘘はなかった。導師はゆっくりとうなずいた。

「古い物語もそうだが、トゥイヤ、お前は、いまここにないものに、心を惹かれる向きがあるようだ」

わたしは叱られているように感じて、首を縮めた。けれど導師は、いつもどおりの穏やかな声で、ゆっくりと続けた。

「遠くのものに思いをめぐらせるのは、悪いことではない。だが、すぐ傍にあるものにも、もっと目を向けてみるといい。みなお前のことを、心配している」

わたしははっとして顔を上げた。みな、というのは誰のことだろう。姉さんたちか、母さんか。母さんが嫁ぐのを厭うわたしの強情さに困って、導師に相談したというのは、いかにもありそうなことだった。

何か反論の糸口をさがそうとしたけれど、導師の眼を見つめかえしているうちに、何もいえることはなような気がした。導師は本当のことを仰っている。母さんはわたしのことを心配している。わたしの幸せを願ってくれている……。

わかっている、間違っているのはわたしのほうなのだ。

導師に頭を下げて、記録をもとの棚に片付けると、わたしは静かに勉強室を後にした。

ヤアタ・ウイラを歩きながら、急に悲しくなって、わたしは唇を引き結んだ。どうしてわたしは自分の気持ち、導師に打ち明けてしまわなかったのだろう。いえばよかったのだ。わたしは嫁ぎたくはないのです。ずっとこの邸においていただけませんかと。

いえなかったのは、隠していることの重さが、胸をふさいだからだった。ああ、どうして秘密というものは、あんなに魅力的なくせに、ときが経つにつれて心に重くのしかかってくるのだろうか？

その年も終わりに近づき、ソトゥの月も残りわずかとなった頃、とうとう母さんが口火をきった。

「あなたも、名前くらいは知っているかしら。ムトという人がいてね。シーリーンのいところにあたるのだけど。年が明けたら十七になるそうだから、あなたの二つ上ね」

わたしは身構えて、手にしていた食器を置いた。けれど母さんは、何気ない調子をよそおって続けた。

「とても穏やかで、真面目な人らしいのよ。導師にもお聞きしてみたけれど、いい青年だと仰ったわ。導師がそう仰るなら、何の心配もないわね」

「母さん」

わたしはとっさに声を上げたけれど、母さんはそれを無視した。「導師のほかにも、いろいろな人から話をきいたのよ。ほかにも評判のいい人は何人もいたけれど、この人が、一番あなたに合っていると思うの」

「母さん、待って」

「話を進めるけれど、いいわね？」

呆然として、わたしは母さんの眼を見つめた。母さんは微笑んでいたけれど、その眼はとても真剣だった。有無を言わせない、強いまなざしが、わたしをじっと見つめ返していた。

けれどわたしは、引かなかった。

「ちっともよくなんかないわ。わたしは――わたしは、お嫁になんかいきたくない」

母さんは笑顔が消して、眉をひそめた。

「まだそんなことをいつているの？」

「いつまでだっていうわ——」

わたしはいつ、まっすぐに母さんの目を見つめ返した。息を吸い込むと、喉がひきつれた。「女が本なんか読んでも仕方がないなんて、どうして母さんはそんなふうに思うの？ たくさん勉強しても、何の役にも立たないの？ ただ女だというだけで？」

言い募るうちに、涙が滲んだ。「このお邸から引き離されて、もう本も読めなくなって、それでわたしが幸せになれるなんて、どうしてそんなことがいえるの？ 相手がいいひとかどうかなんて、そんなことじゃないの。わたしは——」

「少し落ち着きなさい」

母さんはぴしゃりと言って、短くため息をついた。その目の色を見て、わたしは失望した。母さんの瞳には、理解の色どころか、わたしのいい分について考えてみようとする気配さえ、ちっとも見当たらなかった。

「そんなにすぐのことではないのよ」

母さんは、静かな声——なるべく穏やかな調子を心がけようとしているのがわかる声で、噛み含めるようにいった。「でも、あなたもじきに十五になるのよ。もう子どもではないわ」

母さんはわたしに喋らせまいとするように、早口に続けた。なにも心配いらぬのよ、お前はずっとこのお邸で育ったから、不安になるのもわかるわ。だけどみんな最初はそうなのよ。わたしもそうだった、嫁ぐ前にはお前と同じように、不安でいっぱいだったわ。うんと悪い想像もした。でもね、あの人と一緒になれてとても幸せだった。イラバやお前を産んで、幸せだった。大丈夫、トウイヤにも、これからたくさんの幸せが待っているわ——

わたしは耐えられなくなって、部屋を飛び出した。母さんが慌てて追いかけてくるのがわかったけれど、足を止めはしなかった。走って、走って、闇雲に邸から遠ざかろうとした。

悲しかった。どんなに言葉を尽くしても、なにひとつ伝わらないことが。母さんがちっともわたしのことをわかってしてくれないことが。それなのに、母さんはあくまでわたしの幸せを考えてくれているのだということが。

走って、走って、途中でカナイの母さんとすれちがって叱られたけれど、それも振り切って、わたしは邸の外に飛び出した。誰とも話したくなかった。

邸からずいぶん離れて、水辺へたどりつくと、わたしはやっと足をとめて、壁のくぼみに背中を預けた。ここには夜は誰もやってこないし、もし近くを誰かが通っても、ここなら水音がわたしの気配を押し包んでくれるのではないかと思ったのだ。

そのままずると座り込むと、服越しに岩壁の冷たく硬い感触が伝わってきた。そこでじっと膝を抱えて、長い時間、水の流れを見つめていた。

水面は黒々として、ところどころが白くきらめいている。この天井はひどく高くなっていて、菜園ほどではないけれど、上からかすかに光が降ってくる。ヒカリゴケの淡い明かりとはまた違う、その独特の光は、夜にはあるかないかのわずかなものだけれど、昼間にはもっとはっきりして、水面できらきらとまばゆく輝く。いまは、黒い水面がわずかにきらめく程度だった。

水のそばは、空気が冷たく澄んでいる。わたしは何度も大きく息を吸って、気持ちを落ち着けようとしたけれど、その試みは、なかなかうまくいかなかった。

嫁ぎたくないというのは、わたしのわがままなのだろう。本が読みたいというのも。里の多くの女たちは、書物になど触れることさえないまま生きてゆく。みなそれで不自由なく暮らしている。母さんのいうとおりだ。

なぜ、わたしはそれで満足できないのだろうか。ほかの多くの女たちのように。

ただ知りたいのだ。まだ見ぬものを、この眼で見たい。

そう考えること自体が、強欲なのだろうか。戒律は、欲得をかたく戒めている。人より多くのものを得ようと思っはならない。すべてのものは平等に分け与えられなければならない。

食べ物や着るものを、欲張ったことはないつもりだったけれど、不相応に知識を得たいと思うのも、それと同じことだろうか。考えてもわからなかった。わかりたくなかっただけかもしれない。

それでも、水の音をずっと聞いているうちに、いくらか気分がやわらいできた。

日をおいて、母さんともう一度話をしてみよう。今度はできるだけ、感情的にならないように。そんなふうによく考えられるようになった頃には、かなりの時間が経っていた。

遠くで、慌しい足音が交錯していた。探されているのかもしれない。

母さんは心配しているだろう。気づくと急にいたたまれなくなって、わたしは立ち上がった。

そこに、カナイがやってきた。

姉さんはわたしに気づくと、足を止めて、うんざりしたように首を振った。それから来たほうを振り返って、こっちにいたわ、と一声叫んだ。その声が通路に反響して尾を引いて、遠くで誰かが叫び返した。

「あの……」

「馬鹿じゃないの」

怒った声で、カナイはいった。「皆があんたに甘いからって、いくらわがママをいっても通ると思ってるんなら、あんたは馬鹿だわ。自分がどれだけ恵まれてるか、わかっているの？」

何も言い返せなくて、わたしは黙り込んだ。いつものようにカナイに腹を立てるのも難しかった。

カナイからしてみたら、わたしはさぞ腹立たしいにちがいがなかった。姉さんは早く嫁ぎたいのに、うまくゆかない。わたしは嫁ぎたくないのに、お嫁にいかされそうになっている……。

どうして逆ではなかったのだろう。代われるものなら代わりたかった。

「ごめんなさい」

謝ると、カナイは舌打ちして歩き出した。足音がひどく怒っている。話しかければ、ますます機嫌を損ねそうだった。

カナイの背中を追いかけて歩きながら、わたしは子どもの頃のことを思い出していた。小さい頃、わたしが道に迷って戻れなくなったり、おかしなところに入り込んだまま眠り込んでしまったとき、いつだって探し出してくれたのは、カナイだったのだ。ずっと昔には、わたしたちは、仲のいい姉妹だった。

あの頃に戻ってしまったかのような錯覚を覚えて、わたしは切なくなった。本当にそうだったなら、どんなにいいだろう。まだカナイと険悪になる前。いつかお邸を出なければいけないだなんて、そんなことを考えてもみなかった頃に。

火の国より来たる者（3）

そしてサフィドラの月がやってきた。

姉さんたちに断って、わたしは早朝から勉強室に向かった。書き物机の上にそっと手燭を置くと、灯心が揺れて炎が躍った。

わたしはまだ読んだことのない本を選んで、机に広げたけれど、内容はちっとも頭に入ってこなかった。ページをめくるたびに顔をあげて、落ち着かない思いでト・ウイラ側の戸口を見た。そうしていればヨブが早くやってくるというわけでもないだろうに。

裁縫室のほうでカナイが歌っているのが、かすかに聞こえていた。炎の乙女の歌。ああ、一年前にも、誰かがあの歌を歌っていた……。

待つあいだ、次から次に不安が差し込んで、わたしの胸を引き絞った。ヨブは約束を覚えているだろうか。覚えていたとして、ここまでうまく人目をさけてやってこれるのだろうか。

短くなった蠟燭をかえたとき、かすかな足音が耳に届いた。はっと顔を上げて、わたしはト・ウイラのほうを凝視した。あわてて駆け寄るのは、かろうじてこらえた。もしかしたら、導師かもしれないのだから。

けれど足音が近くに迫ると、そうでないことがわかった。足取りが違う。それに、衣擦れに混じって、金属のかすかに擦れあう音がした。ほとんど椅子を蹴立てるような勢いで、わたしは立ち上がった。

「使者さま」

戸口に駆け寄って呼びかけると、笑いを含んだ声が返ってきた。「久しいな」

記憶の中とたがわない、語尾のやわらかく溶ける声だった。

その声を聞いた途端、あれから一年もの時間が経ったというのが、嘘のように思えた。あの日の続きが、そのまま目の前にあるような気がした。

逸る気持ちを抑えて、わたしはたずねた。

「今年もまた、ひと月ちかくも歩いていらしたの？」

「ああ」

使者はうなずいて、それからまた少し、笑ったようだった。

「去年、俺が話したのを、覚えていたのか」

わたしは目を見開いた。覚えていたか？ 覚えていたのかですって！

忘れられるはずがなかった。叫びだしたい衝動を堪えて、わたしは何度も強くうなずいた。

「覚えているわ。砂漠のなかの美しいオアシス。夜になると天に輝く、道しるべの光——」その声は、自分でも気恥ずかしくなるほど弾んでいた。「ねえ、また星の話聞かせてくださる？」

使者が、喉の奥で笑うのが聞こえた。

「まるで幼い子どもようだな。好奇心でいつもはちきれそうになっている……」

わたしはうろたえて、熱くなった頬を手で押さえた。

「だってこんな話、ほかの誰ともできないし、一年も……」

しどろもどろになって言い訳をすると、使者は小さく笑い声を立てた。それから、ゆっくりと星にまつわる話を語りだした。

ときおり天から降ってきて、天の神々の言伝てをつげるといふ、ほうき星のこと。地上に落ちてきた星を、拾ってしまった男の話。空の上でぐるぐると永遠に追いかけてをしている、二匹の鼠の話もあった。思わず笑い声を立ててしまったわたしは、あわてて自分の口元を抑えた。姉さんたちに聞こえてしまわなかっただろうか？

しばらく耳を澄ましたけれど、幸い、誰かがやってくる気配はなかった。

「火の国の天は、とてもにぎやかなのね」

わたしがため息とともにそう言うと、ヨブはまじめな調子でうなずいた。

「ああ。空に輝く星の数は、とても多い。とうてい数えきれぬほどにな」

それからヨブは、星の数を数えようとして、毎夜毎夜、砂漠の真ん中に座り続けて、いつしかすっかりお爺さんになってしまった男の話を教えてくれた。ひとが老いて死ぬまでずっと数え続けても、なお数え切れないほどの数というのは、どれほどのものだろう？

星のひとつひとつはごく小さな光だけれど、それがあまりにたくさん空に輝いているものだから、その明かりで、くっきりと足元に影が落ちるのだと、ヨブはいった。

「いまの時節でもそうだが、イデイスの月の頃になると、見上げるのが眩しいほどになる」

はっとして、わたしは顔を上げた。

「月のイデイスという名前は、星と関わりがあるの？」

ヨブはなぜか、その問いに答えるのを、わずかにためらったようだった。ひと呼吸ほどの間のあとに、返事があった。

「その月の夜半によく見える星の名前が、そのまま月の名前にあたる。いまならばちょうど真夜中に、青白く輝くセタ＝サフィドラを見ることができるという具合に」

ああ、やっぱり月の名前には、ちゃんとしたわけがあったのだ！ 嬉しくなって、わたしはさっきの不自然な間のことも、すぐに忘れてしまった。

「わたしたちの暦は、あなた方からもたらされたものだったのね。ねえ、ソトゥの月がほかの半分しかないのはなぜ？」

「ああ、それは、星のめぐりのためだ」

今度はあっさりと、ヨブは答えた。

「星は、ゆっくりと天を巡るといっただろう。その周期が、一年なのだ。十六か月と半分でちょうど、星がもとの位置に戻る」

ため息をついて、わたしは頭上を見上げた。そんなことをしても、この眼に星が見えるはずもないのだけれど。

天井に描かれた模様が、いつも決まったとおりの速さでゆっくりと巡っていくようすを、わたしは想像しようとした。それはとても、不思議なことのように思えた。

「どの星もそろって、同じ速さで動いているの？」

そうだ、とヨブはいった。わたしは首をかしげて、考えた。

「星ではなくて、星の描かれた天井が、まるごと動いているのかしら……。だけど、それは誰が動かしているの？ どうやって？」

「さて。神々の偉大なる御手によって、と話にはいうが」

ヨブは言葉を切って、一呼吸おいてから、ゆっくりと話し出した。火の国に伝わる古い話によれば、星が天を巡るようになったのは、世界のはじまりから、長いときが経ったあとのことだったという。

世界のはじまりには、ただ暗闇のみがあり、やがてその中で闇が凝（こご）って、大地が生まれた。大地の上には、死があった。死せるものと死せる獣だけが、そこに存在していた。やがて途方もなく長い時が過ぎた頃、星が生まれ、火の国の空に光がともされるようになった……。

「星ははじめ、空を巡ることのない、ただの光の粒だったという。あるとき空がゆっくりと回り始め、そうして昼と夜とが生まれた。生きた人間、生きた獣が大地の上に暮らすようになったのは、それからのことなのだそうだ」

それはとても、不思議な話だった。聞き終える前から、いくつもの疑問がわたしの頭の中に渦巻いていた。

「でも、そのときのようすを誰が伝えたの？ 人はまだその頃、生きていなかったのでしょうか。それとも、死者が書物を残したの？ 死者はそこには、生きているもののようにふるまえたのかしら……」

口に出してそういつてから、自分で恥ずかしくなった。それこそ子どものような疑問だった。これはお話なのだ。神話は、なにもかもが本当に起こったこととは限らない。

「さて、どうだろうな」

ヨブも堪えかねたように笑ったけれど、その声音は温かかった。そのことに勇気付けられて、わたしは話を続けた。

「でも、どうしてかしら。死者が先にいたことになっているのね。生きていた人が死んで、死者になるのがふつうでしょう？」

「生まれてくる前には、誰もが死んでいる」

歌うような抑揚で、ヨブはいった。「砂漠ではそのようにいうが、さて、どうだろうな。少なくとも俺は、自分の生まれてくる前のことを、覚えてはいない。覚えているという者に会ったことも、まだないな」

それにしても、学問に興味を持たなかったというわりに、ヨブは、いろいろな話を知っているようだった。わたしがそういうと、苦笑が返ってきた。

「これは学問や書物とは、かかわりのないことだ。砂漠の男なら誰でも、物語や詩の百や二百は誦んじてみせる。お前たちだって、書物ばかりではなく、歌や物語によって子どもらにもものを教えたりするだろう？」

それはそのとおりだった。書物には興味のない姉さんたちが、炎の乙女の物語には、目を輝かせる。

「そのような物語は、それぞれに示唆に満ちてはいるが、お前がそうしてみせたように、遠い先を見通すような知恵は、そこにはない」

ヨブはそんなふうにいったけれど、わたしは首をかしげた。そんなふうを考えてみたことはなかった。むしろ古い予言などは、お話として語り継がれてこそいるけれど、書物にはほとんど残されていない。

だけどわたしがそのことを口にするよりも先に、垂れ布の向こうで影がゆれ、かすかな衣擦れの音がした。

もう行ってしまふの。そういいたいのを、かろうじて飲み込んだ。話したいことは尽きなかったけれど、引き止めるわけにはいかなかった。

わたしはおそろおそろ、去年にたずねたのと同じ言葉を口にした。

「また明日もいらっしゃる？」

訊きながら、これもまたわたしのわがままだろうか、そう思った。

迷惑に決まっている。帰りの支度もあるだろうし、長い道のりにそなえて、しっかり身体も休めなければならぬのだから。

「ああ。また明日」

けれどヨブは、そう答えて、その声には、かすかに微笑みの気配があった。

その夜、ふたりの姉さんたちと何か話をしたと思うけれど、わたしはやはり、なかば上の空のままだった。カナナイにいつもの意地悪をいわれても、気づきもしなかったかもしれない。

昼にヨブから聞いたたくさんの話を、何度も思い返して、どきどきする胸をおさえては、明日のことを心

配した。気を抜くと、悪い考えばかりがどんどん胸の底から浮かび上がってきた。ヨブは忙しくて時間が取れないかもしれない。誰にも見咎められずに勉強室までやってくるができないかもしれない……。

どうか、明日も話せますように。わたしは何度となく祈ったけれど、それを誰に祈っていいのかは、ちっともわからなかった。

部族をお守りくださるどの神に祈るにも、それは、あまりにあつかましい願いのように思えた。わたしは部族の禁を破り、導師にさえ隠して、火の国の使者と口をきいているのだった。そのことを思えば、いったいどの神様がわたしの願いなど聞き入れてくださるだろう？

夜が更けても、なかなか寝付かれなかった。何度も寝返りを打っては、姉さんたちの寝息に耳を澄ました。

あまりにいつまでも眠りが訪れないので、いっそのこと、そっと抜け出して勉強室へゆこうかとも考えた。そんなことをしたところで、こんな真夜中に、ヨブがやってくるはずもないのだけれど。

ああ、それにしても、今日の出来事はほんとうにあったことだろうか。ついにはそんな考えまで頭をよぎるようになった。もし眠りに落ちて目覚めたら、何もかも夢だったら？

けれど昼に交わした会話の記憶はたしかなもので、夢などであるはずがなかった。

ヨブ・イ・ヤシャル。あの方がいらして、星の話をきかせてくれた。

夜明けを告げる鐘が鳴り、寝床から出ると、一睡もできなかっただけあって、体が重かった。けれど、頭はしっかりと冴えていた。

姉さんたちはふたりともまだ寝具のなかにくるまって、寝返りを繰り返していた。

「おはよう！」

声をかけて二人の肩を揺ると、姉さんたちは、そろって訝しげな顔をした。

「どうしたの、今日はやけにご機嫌ね」

「機嫌がよすぎるんじゃない？」

カナイは眉をしかめて、手のひらで眼をこすった。「まあ、あんたは好きな本を、めいっぱい読めるからね」

寝床を片付けて朝食をとりながら、カナイは唇をすぼめた。

「ああ、つまらないったら。毎年毎年、こんなところに三日も押し込められて」

けれどそういいながらも、カナイはそれほど不機嫌ではないようだった。どちらかという、表情は明るい。なにかいいことがあったのだろうか、わたしはもう一人の姉さんと顔を見合わせた。

食事を終えたあと、姉さんたちはそれぞれに裁縫道具を広げた。カナイの手にあるのは、いつも使うのとは違う、太い針だった。

不思議に思っていると、姉さんが縫っているのは、どうやら帯のようだった。男の人が身につけるものだ。導師に差し上げるものだろうか、それとも伯父さんにだろうか。

このごろカナイは、急に裁縫が好きになったようだった。どういう気持ちの変化があったのだろう。不思議に思いはしたのだけれど、それよりもヨブがほんとうに今日もやってくるかどうかのほうに気を取られていたので、わたしはそのことを、あまり深く考えてみようとはしなかった。もともと姉さんは、針の扱い自体は上手だったのだし、最近になって楽しさに目覚めたのかもしれない。そんなふう考えたきり、忘れてしまった。

わたしも一応、言い訳していどに針をつけたけれど、すぐに片付けて、落ち着きなく立ち上がった。

「勉強室のほうにいるわね」

よく飽きないわね、と呆れたような声が飛んできたけれど、わたしは足を止めもせず、いそいそと裁縫室を出た。

その日に手にとった書物は、何代か前の導師が遺した、覚え書きのようなものだった。今度は少しまともに読むつもりだった。前日のように不安に押しつぶされそうになりながら待つよりも、少し気を紛らわしていたかった。

書かれている内容のほとんどが、淡々とした日常の記録だった。誰それのところに女子が生まれた。姪から婚礼の祝いに壁掛けをもらった……。何気なくページを繰っていたわたしは、途中、どきりとして手を止めた。

レヴェの月の第五日、早朝より水が濁り、それを口にした二人の男児が、高熱を出して命を落とした。記録には、そのようなことが書かれていた。

動揺したのは、少年たちの痛ましい話に同情したためだけではなかった。わたしの父もまた、急な病で落命したと聞いていたからだ。

あとに続く文面は簡潔なものだったがけれど、その筆致は乱れていた。疫が出たときの作法に従い、二人の亡骸は速やかに死者の川へと運ばれた。二人の父親が、ちょうど銀を掘りに出ているところで、流す前に合わせてやることのできなかったのが、哀れだった……。

病によって死んだ人の亡骸は、弔いさえ待たずに、すぐに死者の川に流される。それは、古くからの定めだった。そうしなければ死の穢れが凝って、ほかの人々にも障るのだという。疫神が、その骸に依って力をふるうのだそうだ。だから遺された者がどれほど泣いて縋っても、けして遺体を運ぶ足をゆるめてはならない……。

父さんもそんなふうにして、大急ぎで川に流されてしまったのだろうか。母さんはそのときのことを、詳しくは語りたがらなかったから、わたしのほうから改めて訊ねたことはなかった。

手記によると、そのあと半日ほどで、用水の濁りは元通りになったそうだ。それからも大事をとって、さらに丸一日は水を使わなかった……。

水以外のものには異常がなかったか、そのときの導師が里を見回って気づいたことや、ほかの人々から集まってきた話の仔細が、事細かに書き取られていた。そのページには、さらに後年のものだろう、別の人物の手跡による検討や覚え書きが、いくつも重ねられていた。

智とはこうしたものかと、一年前、ヨブはいった。過去を詳細に記録し、それについて複数の人が考えをめぐらせ、時とともに工夫を重ねてゆく。知恵とは、書物とは、そのようなものだ。

里の男のひとたちが重んじている、そうしたものごとに、なぜ女だというだけで、触れることを望まれないのだろう。そんなことは男の人たちにまかせておきなさいと、母さんはいう。

ゆううつな物思いに捉えられかけたころ、待ちかねていた足音が響いて、わたしは顔を上げた。駆け寄りたいのをこらえて待つ、ほんのひと呼吸ほどのあいだが、とても長く感じられた。やがて衣擦れの音とともに、ヨブの声がした。

「来ているか」

わたしは戸口のそばに駆け寄ると、いつものように、そこで膝を抱えた。「来年の荷のお話は、もう済んだの？」

「いいや。いまはみな、まだ休んでいるのでな」

「こんな時間に？」

わたしが驚いて訊きかえすと、ヨブはなんでもないように答えた。

「砂漠では、夜に旅をするのだ」

深夜にここを発つと、翌日の昼過ぎに暗闇の路の果てにたどり着く。そこでしばし休んで、日が暮れるのを待ってから火の国に入るのだと、ヨブはいった。

「そうなの……」

なぜ夜に、と訊ねることは、そのときには思いつきもしなかった。不思議に思ったのは、ずっと後になってからのことだ。それよりも、出発の話が出たことに寂しさを覚えて、わたしは黙りこんだ。

話ができるのは、今日まで。明日にはまたヨブは旅立ちの支度におわれて、その夜に、発ってしまうのだ……。

わたしの元気のないのに気づいたのかどうか、ヨブはふと、声を和らげた。

「今日も、本を読みながら待っていたのか」

ええ。うなずくと、ヨブは感心したように唸った。

「ここにどれほどの書物があるのか知らないが、その調子では、じきに読みつくしてしまうのではないか？」

その声には、からかうような調子があったけれど、わたしはますます悲しくなった。

「無理よ」

その声は、自分でそうと思うよりも、悄然としていた。垂れ布の向こうで、ヨブが首をかしげたのだろう、かすかに影が揺れた。

「なぜ」

「ここは、男の人たちが使っていないときだけしか、わたしには使わせてもらえないし、それに……」

わたしはうつむいた。喉の奥に、熱いかたまりがあるようで、言葉はなかなか出てこなかった。「いつか嫁いでこのお邸を出ることになれば、もう本を読むことなんて、できなくなるわ」

いって、わたしは唇を噛んだ。無性に悲しくなった。ヨブと話せる時間はかぎられている。こんな話をしたいわけじゃなかった。

そうかといって、ヨブは黙り込んでしまった。沈黙のなかに言葉をさがす気配を感じて、わたしは無理に明るい声を作った。

「だからいまのうちに、なるべくたくさんの本を読んでおくの。ねえ、火の国のお話を、聞かせてくださる？」沈黙をおそれたわたしは、いそいで言葉をかさねた。「わたしくらいの年のころには、剣の練習をしていたとおっしゃってたけれど」

ああ、とヨブは頷いた。

「砂漠の男なら、誰でもそうだ」

「誰でも？ ひとり残らず？」

「そうだ。男にとって剣を使えないのは、恥だからな」

「そんなの、古いお話の中だけのことだと思っていたわ。いまも、剣をもっている？」

答えのかわりに、金属のぶつかる音がした。それは美しい音だったけれど、わたしはどきりとした。刈り入れの鎌よりも大きな刃物なんて、目にしたこともなかった。

「ときには水をもとめて、他の部族と争うこともある。砂漠をわたるときには、追いはぎのたぐいも出るしな」

追いはぎ、という言葉、わたしはしらなかった。けれどその言葉の物騒な響きだけは感じ取って、とっさに身を縮めた。

「わたしたちの祖先は、あまりに争ってばかりいたせいで、神々の怒りにふれて、水を奪われたのだそうよ」

「そしてお前たちは、ここへやってきた。すべての争いを捨てて……」

歌うような声で、ヨブはいった。その言葉の中にある、憧憬のような気配に、わたしは戸惑った。

「争いなど、遠い過去のものとして生きてゆけるのなら、それがいい」

言葉をきって、ヨブは少しのあいだ、何かを考えるようだった。

「だが、あいにく砂漠に争いは絶えぬ。それに、気の荒い獣もいることだしな。……お前たちの一族の男たちも、暗闇の路と呼ぶのだったか、里の外に出るときには、短刀のひとつもさげてゆくだろう？」

その問いに、わたしは答えられなかった。

「よく知らないの。わたしにはずっと、男の家族がいたことがないから。父さんは、わたしが生まれる前に死んでしまったのだそうよ」

その日の朝に思い浮かべた、死者の流れてゆく光景が、話すわたしの瞼の裏をよぎった。

「俺と同じだな」

ヨブはぽつりと、言葉を落とした。「俺も、父という人の顔を知らぬのだ。戦で命を落としたのだというが」

ああ。意味のない音が、唇からこぼれた。何か、いうべきことがあるような気がしたけれど、そうしたことに対してふさわしい言葉を、わたしは知らなかった。顔も知らない父さん。ときおり母さんの話の中に顔を出し、言葉の端々にわずかな気配ばかりの残る、影だけの家族……。

少しのあいだ、ふたりとも黙っていた。やがてわたしは静かに口を開いた。喋ろうと思ったというよりも、言葉が勝手に唇からすべりでてきたようだった。

「この里では、死んだ人の亡骸を、死者の川に流してしまうの。その水はね、ほかの水場と違って、とても冷たくて、すごい勢いで流れてゆくよ。火の国にもそういう場所がある？」

いいや。囁くように、ヨブはいった。「砂漠では、死者がでると地面に穴を掘って、そこに埋めてしまう」
「ああ、では死んでしまった人たちも、ずっとそばにいるのね」

死んだあとも近くにいるのならば、残されたものは心強いだらう。わたしは単純にそう考えたのだけれど、ヨブはわたしの言葉を、意外に思ったようだった。

「面白いことをいう。だが、なるほど、そのように考えることもできるのだな」

布一枚を隔てているだけで、話している距離はとても近いのに、それは、どこか遠いような声だった。歩いてひと月かかるという彼のオアシスに、ヨブは、心を飛ばしているのかもしれない。

「ふつう、死者の魂は肉体を離れて、冥府に旅立ってゆくのだという。地の底には、抜け殻となった体だけが残って……」

冥府、という言葉には、おぼえがあった。古い物語のなかで使われていたのだ。それは、死者の国の別称のようだった。

「わたしたちのほうでは、死者の流れをずっと下っていった先に、水底の国があるというの。死んだひとたちは皆、そこで静かに眠っているのですって」

そこはきっと、とても寂しい場所だろう。子どものころ、はじめて水底の国のことを聞かされたときに感じたことを、わたしは鮮やかに思い出した。眠れる死者のゆらゆらとたゆたう、冷たくて暗い水……。

「あなたがたの冥府は、わたしたちのゆく死者の国とは、きっと違う場所ね」

そういったとたん、なぜだか胸が痛んで、わたしは戸惑った。

ヨブがふと、優しい声を出した。「さて、どうだろうな。いずれ、いやでもわかるだろう」

その声が、まるでおさない子どもをあやすときのような柔らかさをもっていたので、わたしは急に恥ずかしくなった。

「あきれてる？」

「いいや。何故？」

「わたしが、あんまり何も知らないから」

ヨブが首を振る気配があった。

「人はみな、己が暮らす場所のほかのことは、驚くほど知らぬものだ」

その言葉はわたしの胸にふわりと落ちて、そのままお腹の底まで、染みとおっていった。そんなことも知らないのといって、カナイに無知を笑われるたびに、わたしはいつも恥ずかしくて、悔しかった。姉さん

こそ、書物の中に書かれているようなことを、何も知らないじゃない。そんな反発を、こらえて飲み込むばかりで。

ヨブは柔らかな声で続けた。「遠い異国には、驚くほど奇妙な暮らしを送る人々がいるという。それこそつくりごととしか思えないような……」

「遠い国？」

わたしは自分の耳をうたがって、目を見開いた。

さきほどまでの話の中身など、どこかに吹き飛んでしまうくらい、ヨブの言葉は、大きな衝撃をともなっていた。「遠い国って？ ねえ、火の国のほかにも、まだべつの国があるの？」

勢い込んで訊いたけれど、ヨブはなぜか、返事をためらったようだった。そのわずかな間に、わたしは違和感を覚えた。昨日もヨブが一度、答えを言いよんだことを思い出した。

うっかり口を滑らせたというふうに、その間合いは感じられた。ヨブには何かわたしに、あるいはこの里の人間に、教えてはならないこと、隠さなければならないことがあるのだろうか。そのことにやっと思い至った。けれど、飛び出した問いをひっこめて口の中に押し戻せるほどには、わたしは器用ではなかった。

それでもヨブは、かすかなため息のあとに、ゆっくりと話を続けた。

「ああ。だが俺も、あまり詳しいことは知らないのだ。この世界にいくつの国があって、どれほどの数の人々が暮らしているのか……。そうしたことを正しく知っている者は、おそらく、どこにもいないだろう」

わたしは今度こそ、言葉をうしなった。

この瞬間まで、わたしにとって世界とは、このエルトーハ・ファティスと、そこから続く暗闇の路とのことだった。その範囲、手で触れることのできる世界でさえ、自由に歩き回れるところはかぎられており、まだ見ぬ場所はいくらでもあった。火の国のことも、ヨブからその話を聞くまでは、本当に存在する場所だという実感をもてずにいた。

けれど、その外にもさらに広がる世界があるという。ヨブの話しぶりからすれば、おそらくは、たくさんの国と、果てしなく続く、途方もないほど広大な大地が。

それは、どのような土地だろう。どの場所も火の国のように、炎の燃え盛る乾いた土地なのだろうか。それとも中には、こことよく似た、水の豊かな場所もあるのだろうか。そこにはどのような人々が住んでいるのだろうか。ヨブのいう、まるで異なる暮らしというのは、どういうものだろうか。

勢い込んで、わたしはたずねようとした。けれどヨブは、それを制するように、静かにいった。

「だが、それらの国々は、ほんとうに遠い場所にあるのだ。歩いてひと月どころではない、遥かなところに。俺も、これまで一度も行ったことはないし、おそらく生きているうちに、行くことはないだろう」

ああ。わたしはため息をついた。無知の闇の向こうから鮮やかに立ち上ってきた世界は、ふたたび物語の中の幻想へ戻っていった。けして見ることも触れることもかなわない場所に。

わたしの声は、よほどがっかりしていたのだろう。ヨブはすこし、慌てたようだった。

「だが、そう。人から人へ、遠い異国より、荷が受け渡されることはある。俺がこうして年に一度、この里までやってくるように。……そら」

声がして、垂れ布が揺れた。見ればその下、布の端が床にふれている部分から、何かが差しこまれるところだった。

ほんの一瞬、わたしはヨブの手を見た。大きく骨ばった、手の甲を。

記録にあった使者の風体から漠然と想像していたような、漆黒の色ではなかった。自分の手とくらべれば、いくらか浅黒い色をしてはいるけれど、ごくあたりまえの人間の手に見えた。

その手が布の向こうに戻ると、何か細長いものが残った。手のひらに収まるほどの、小さな塊。それは蠟燭の光を受けて、眩しくきらめいた。

「もともとお前たちの里で採れた銀を、異国の細工師が彫ったものだ。……手にとって、見てみるといい」
わたしは長くためらったあとに、おそるおそる手を伸ばした。指先にふれた感触は、ひやりと冷たく、見た目からは意外なほど重かった。

手のひらに載せると、それはとてもなめらかな手触りをしていた。

わたしは眼を凝らし、まじまじとそれを眺めた。銀というものは、もっとごつごつとした、鈍い色の塊であるはずだった。いずれ火の国へわたる荷のひとつとして、お邸に運び込まれた銀の塊を、見せてもらったことがある。こんなものを運んでいって、どうするのだろうと、そんなふうに思っていた。けれど目の前にある細工は、記憶の中の銀塊とは、まるで違うものとしか見えなかった。

銀の表面には、細かな彫りが入っていた。顔を近づけてよく見れば、それは、なにかの生き物をかたどっているようだった。

それが何かに似ていると思って、わたしは首をかしげた。それから思い出した。菜園の入り口の壁に彫ってある、守り神の彫刻に、よく似ているのだ。

「この獣は、火の国の神様？」

「いいや」

ヨブは首を振った。「それは、鳥だ」

「とり……？ それは、その遠い国の生き物なの？」

「そうだ。砂漠の空にも、ときおり舞っている。翼があるだろう。それで空を飛ぶのだ」

「蝙蝠みたいに？」

「蝙蝠より、ずっと高いところを、優雅に飛ぶ。……そうだな、書き物をするといったが、鳥の羽で出来たペンを、見たことがないか」

とっさに振り返って、わたしは書き物机へ視線を走らせた。紙は里の男たちが作るけれど、ものを書くときに使うペンは、火の国から持ち込まれたものだと聞いている。

あの複雑なつくりをした羽が、もとは生き物の体の一部なのだという事実に、わたしは驚いた。けれど同時に、腑に落ちるような気もした。はじめて導師に字をおそわった幼い日、いったいどのような人間の手が、これほどにこまかい造形をなしえるのだろうと、しげしげと眺めてはため息をついた。あれは、細工ではなかったのだ。

手の中に視線を戻せば、銀色の小さな鳥は、とても優美な姿をしていた。この生き物が、どのように翼を動かして空を舞うのか、知りたいと思った。

「俺たちの部族はいつも、この里の銀を外へ運んでゆくばかりだからな。回りまわって、お前たちの手元に戻るものが、ひとつくらいあってもいいだろう」

その言葉の意味を理解するには、すこし時間が必要だった。何度か瞬きをしたあと、わたしはようやく気付いた。つまり彼はそれを、わたしにくれると知っているのだ。

「それは髪飾りだ。髪に挿してみるといい」

わたしは喜ぶよりも、むしろ恐れた。「でも、こんな……」

手の中の鳥と、垂れ布の向こうの影とを交互に見て、わたしはうろたえた。遠い異国からはるばる運ばれてきたというくらいだから、とても価値のある品なのではないだろうか。

もし彼がそれを、使者のひとりとして、里の皆に対してくださるのであれば、わたしは気にしなかったかもしれない。けれどわたしが個人として、おいそれと受け取っていいようなものだとは、とても思えなかった。

迷うわたしを促すように、ヨブはいった。「それは俺の私財だから、気にしなくていい」

その声には、まるで気負うようすはなかったけれど、それでもわたしは、なおためらった。受け取るに

も、返すにも思い切りが足らなくて、いつまでも戸惑っていると、やがてヨブが、ふと思いついたようにいった。

「どうしても気になるというのなら、その代価と思って、何か歌を、歌ってくれないか」

「歌？」

わたしはびっくりして、聞き返した。からかわれているのかとも思った。わたしの歌なんかが、こんな細工に見合うとは、とても思えなかったのだ。

けれどヨブは、どうやら真面目にいつているようだった。はじめて会った日のことを、わたしは思い出した。いい声だといった、あのときのヨブの声が、まだ耳に残っていた。

ためらいを振り切って、わたしは腹をくくった。

「――何の歌を？」

「お前の好きなものを」

そういわれて、なぜわたしは、あの歌を選んだのだろう。

いや、そのときには選んだという自覚もなかった。最初の一節は、それくらい自然に、唇から滑り出ていた。

――麗しき乙女、ひとり、
明け方、水辺にて憩う。

それは、自分の声ではないようだった。いったいわたしの歌声は、こんなふうによわらかい響きをしていただけるか？ 歌うこと自体が久しぶりだったせいか、わたしは自分の耳に届く音に、戸惑った。

――迷い込みたる男、
乙女をみとがめていう。
うるわしき者、汝が名は。

歌が終わらないうちから、後悔していた。

炎の乙女は、その場にいるはずのない男の人の存在に驚いて、あわてて逃げ出してしまう。けれどなぜか彼女は、その日のできごとを誰にもいえないまま、次の日の朝、ふたたび水辺へやってくる。二人はすぐに惹かれあい……。

途中で、わたしは歌い止んだ。その続きでは、乙女は去ってしまった使者を追って、暗闇の路へと入り込んでしまう。男のことを思う一心で、乙女は暗く恐ろしい路を越え、そして命を落としてしまう。火の国の炎に焼かれて。

悲しい気持ちになって、わたしは俯いた。どうしてこの歌にしたのだろう。自分の愚かしさが胸を刺した。歌なんて、ほかにいくらでもあるのに。もっと明るくて、聴いていて幸せな気持ちになれるような歌、贈り物の礼にふさわしい歌が。

「よい歌だ」

だけどヨブはそうやって、静かな声で、続きはあるのかと聞いた。わたしは首を横に振った。「あるはず

だけれど、詞を忘れてしまったわ」

わたしの嘘にヨブが気づいたかどうかは、わからなかった。ヨブはそうかといって、立ち上がった。わたしははっとして、書き物机のほうを振り返った。蠟燭は短くなって、じきに燃え尽きてしまいそうだった。「もういってしまうの？」

前の日には飲み込むことのできた問いを、このときは押しとどめることができなかった。ヨブは少しためらうような素振りを見せたけれど、無理をいつていることは、自分でよくわかっていた。彼がなにかを答えるよりも先に、わたしは言葉を重ねた。

「また来年も、いらっしゃる？」

ヨブは少し、返事をためらったようだった。困らせているのだと思うと、悲しくて、けれどももう来ないといわれたらと思うと、もっと辛かった。

「――おそらくは。そのときは、またここで」

柔らかな声の残響を残して、ヨブはいってしまった。

遠ざかっていく足音を耳で追いながら、わたしはじっと座り込んで、自分の膝を抱えていた。垂れ布をくぐってト・ウイラに踏み込み、ヨブを追いかけて引き留めたいと、そんな馬鹿げたことを考えている自分に、戸惑いながら。

追いかけて、それでどうするというのだろう。追いつがって、もう少しだけここにいてと、そう懇願すれば、ヨブは彼の役目を後回しにして、足を止めてくれるだろうか？ それでほかの使者さま方や、あるいは導師が、姿の见えないヨブを探しにきたら、わたしはどう言い訳をする気なのか？

やがてすっかり足音が聞こえなくなると、わたしはきつく自分の腕を掴んで、目を閉じた。去年のように、夢見心地でぼうっとしてはいられなかった。

一年！ 一年後なんて、どうしようもなく遠い未来のこととしか思えなかった。わたしはほんとうに一年後、まだこのお邸にいられるのだろうか？

母さんはわたしの結婚を、そんなにすぐのことではないといった。おそらく今年のエオンの月ということはないだろう。まだ嫁入り道具の用意だって、手付かずだ。けれど、ヨブは来年のことをはっきりとは約束しなかった。おそらく彼にだって、確実なことはわからないのだ。来年がだめだったとして、その次の年は？ わたしには、二年後はもうここにはいないかもしれない。

もう一度会えるという、確信が欲しかった。

わたしは手のひらの熱でぬくもった鳥を握り締めて、いつまでもじっと、その場にうずくまっていた。

火の国より来たる者（４）

どこか上の空のまま、わたしの十五の年は過ぎていった。

想像の中のものでしかないはずの遠い風景は、いつの間にかわたしの中に深く根付いてしまっていた。まばゆいほどの星明かりに彩られた、広く高い空。乾いてひび割れた大地の上に点在するオアシス、まばゆい光にきらめくその水面。水辺で眼を輝かせて剣を振るう子どもたちの姿。はるかな遠い異国に暮らすという細工師が、背中を丸めて銀の髪飾りに鳥を彫りつける、その工房に響くであろう鑿の澄んだ音でさえ、わたしはまるでこの耳で聞いたことがあるかのように、ありありと思いうかべることができた。それらの空想が、実際の光景とどれほどかけはなれているかは、知りようもなかったけれど。

ああ、この目でほんとうの砂漠を見ることができたなら！

サフィドラの月が終わりかける頃になっても、ふとすると心はすぐに現実を離れて、空想の中をさまよった。

ヨブはまだ、旅の途中だろうか。そんなことを考えながら針を使っていて、ただでさえ不器用なこの指が、まともな縫い物をできるはずがない。何度目かに指先に穴をあけたわたしを、カナイが鼻で笑った。「あきれた。本当にいつまでたっても、ちっとも上達しやしないのね。十にもならない子だって、もっとましなものを縫うわ。恥ずかしいったら」

わたしは顔を上げて、カナイを睨んだ。似たようなことは、ほかの姉さんたちだって口にする。けどそれらの言葉にはいつでも、しかたのない子ねという、親しみを含んだからかいがあった。カナイは違う。その声には、わたしを傷つeketくてしかたがないという、悪意がはっきりとにじんできた。

「そんな調子で、あんた、いったいどこにお嫁にいくつもりなの？ あんたみたいなおかしな娘をもらってくれる人なんて、里じゅうを探したって、みつからないんじゃないの」

カナイの意地悪な態度に、わたしはとっくに慣れて、あきらめていたつもりだった。だけど、ときには堪えるひまもなく、かっとなってしまうこともある。

このときがそうだった。わたしはヨブが行ってしまっけて気がふさいでいたし、以前よりも嫁入りの話を頻繁に繰り返すようになった母さんに、苛立っけてもいたのだった。

「お嫁に行きたいなんて、一度だっけて思っけてことはないわ」

叩きつけるようにそういうと、カナイは鼻で笑った。

「へえ。それで、どうするの。本とでも結婚する気？ 虫食いだらけの、ほこりっぽい紙きれの束と？ ああ、それならあんたにはお似合いかもしれないわね」

わたしはカナイに掴みかかろうとした。実際のところ、ほとんどその寸前までいったのだった。頭の芯がじんじんと痺れていた。悔しかったし、悲しかった。カナイがとっさにすくめた肩を、掴んで、思い切り揺さぶっけてやりたかった。どうしてそんなことしか考えられないのと、問い詰めたかった。

書物のなかで、どれほど豊かな物語が読まれるのを待っているか、カナイは知ろうともしない。古い時代を生きた人々が、いまのわたしたちとどんなに異なっけて暮らしを送っけていたか。この里の外に、どれほど広大な世界が広がっているかということ。たっけて一度でも、想像して見たことがあるかと、問いただしたかった。

けれど、そうした思いが、どんなに言葉を尽くしても、カナイに届くことはないのだと、胸のどこかでわたしはそのことを、わかりすぎるくらいにわっけていた。それに、わたしにはあまりにも、いえないことが多すぎた。誰にも話せないことが……。

わたしは結局、振りあげかかっけて手を下ろして、カナイに背を向けた。なによと、虚勢と侮蔑の交じった

声が追いかけてきたけれど、わたしは振り返らなかった。そのまま裁縫室を出て、足早に歩いた。

どうしてカナイはわたしにだけ、あんなふうに意地悪な口をきくのだろう。

ほかの人に対しては、カナイはふつうに接している。ときおり皮肉な口をきくことはあっても、それは誰かがそっかしい失敗をしてカナイに迷惑をかけたときか、そうでなければ、明らかに相手に非のあるときだ。それなのにわたしにだけは、取るに足らないような小さなことまで一々あげつらって、意地悪をいう。カナイはわたしのすることなすこと、全てが気に入らないのだ……。

どうしてこんなふうになってしまったのだろう。

悲しくなって、わたしは唇を噛んだ。姉さんたちも次々に嫁いで、いまはもう三人しかいない姉妹なのに、どうしてこんなふうに、いがみあっていなくてはならないのだろう。

どんなふうにも振る舞えば、カナイを苛立たせなくてすむのだろう。そんなふうにも、冷静に考えてみようともした。けれど、どうしてカナイはわたしのことを、これっぽっちもわかってくれようとししないのだろうと、そんなふうにも拗ねてみせる自分の声のほうが、いつも少しだけ、勝っていた。

気がついたときには、わたしは勉強室の前にいて、ぼんやりと立ち尽くしていた。垂れ布を透かして、中からかすかに明かりが漏れていた。

「どなたか、いらっしゃいますか」

声をかけると、中で誰かが本を机に置くような気配があった。「入っておいで」

かえてきたのは、導師の声だった。その声音は、とても温かかった。わたしはためらったけれど、結局は垂れ布をかきわけて、勉強室へと足を踏み入れた。

部屋のなかにはいつものように、古い紙とほこりと、それから蠟燭の燃えるにおいがしていた。わたしが空気を動かしたためだろう、炎がかすかに揺れて、壁にうつる導師の影をそっと揺すぶった。

中にいらしたのは、導師おひとりだった。

男のひとと同じ部屋で、それも二人きりで過ごすなんて、それこそ家族でなければ、とんでもない話だ。けれど男といっても、導師くらいのお爺さんだったら、うるさくいう人もそういないし、なにより導師はわたしたち姉妹に、ほんとうの家族と思うようにと、そう仰ってくださる。

それでも姉さんたちは、導師とさし向かいで話すのが、とても苦手なようだった。カナイやほかの姉さんたちが勉強室によりつかないのは、ただ本が好きでないからというだけの理由ではない。

緊張するというのは、わからないことではなかった。導師はとても偉い方なのだから。でも、それと同時に、おひとりの人間なのだ。

そんなふうにもわりきれないと、姉さんたちはいうけれど、導師ははやくに奥様をなくしていらして、子どもがない。わたしたちに家族と思ってほしいと仰っているのは、ほんとうのことだと思う。姉さんたちが距離をおくのを、導師が寂しく思っておられることも、わたしはずっと前から知っていた。

「トウイヤ、先に頼んだ記録の写しは、どれくらい進んだかね」

わたしは棚から紙束を取り出して、導師にお見せした。

「もうあとほんの少しです。お急ぎでしたら、いま、続きをおわらせてしまいます」

「いいや。二、三日のうちに仕上げてくれれば充分だ」

導師はいつ、微笑んだ。「お前はほんとうに、読み書きが達者になった。この家の男たちの誰ひとり、お前ほど早く正確に書物を写すことはできないだろう」

わたしは頭を下げた。導師は子どもたちのよいところを、手放してたくさん褒める方だ。そのお言葉も、そんなふうなものの一つだったのだろう。けれど、わたしは急に胸が詰まってしまった。

「どうしたね」

穏やかな声に促されて、わたしは胸のつかえを吐き出した。

「わたし、お嫁になんかいきたくありません」

導師は首をかしげて、話の先を促された。それに勇気を得て、わたしはずっといえずにいた一言を、ようやく口に出した。

「ずっとこのお邸の娘でいさせていただくわけにはいきませんか」

わたしの剣幕に、蠟燭の火がゆれて、机にうつる影が歪んだ。導師は瞬きをして一呼吸おき、それからゆっくりと仰った。「そういうわけにはいかない」

わたしは失望して肩を落とした。導師がそれをおゆるしにならないのであれば、わたしが何をどう母さんに訴えたところで、きいてもらえるはずがなかった。

だけどこここを出て、わたしの居るべき場所がどこにあるというのだろう。読み書きの機会を奪われて、遠い異国の話を耳にすることもなければ、菜園を任されることすら、おそらくはない。女はただ家事と歌を歌うことと、夫の言葉に相槌をうつ以外には、何も求められない。そのような暮らしの中で、わたしにできることがあるだろうか。

「お前の母からは、相手はムトを考えているときいたが」

導師はそう仰った。わたしは頷いたけれど、導師の顔を見ることはできなかった。

「あの子がここに学びに来ていた、ほんのいつかの様子しか、わたしは知らないが。しかし話をした印象では、とても気持ちのよい青年だったよ。何ごともおろそかにしない、思慮深い子だった。お前とはきっと、気が合うだろう」

導師もまた、わたしが子どもじみた人見知りから結婚を怖がっているのだと、そう思っておられるようだった。わたしはうつむいたまま、ただ唇を噛みしめていた。導師はかすかなため息を漏らして、それから仰った。「さて、どうしたものか。お前の望まぬことを、強いたくはないのだが……」

けれど、ここにずっと留まることを許すわけにはいかないのだと、導師はみなまで仰らなかつたけれど、その声の響きだけでも、十分すぎるほど伝わってきた。

少しのあいだ、沈黙が落ちた。それから導師はふっと、遠くを見るような目をされた。

「智恵が必ずしも、人を幸福にするとは限らぬ……」

ゆっくりと、導師は諷んじた。それは、古い物語からの引用だった。「お前の母の心配も、私には、わからないではないのだ」

「――智に対して眼を塞ぎ、真実を求めることをやめてしまったならば、たとえこの心臓が動き続けていたとしても、わたしの魂は死にいたるでしょう」

わたしもまた、べつの書物からの引用で答えた。「知ることをやめ、考えることをやめて、どうして生きていられるというのです？」

導師は困ったように微笑まれた。けれどその笑みの中に、喜びもまた含まれていたように、わたしには感じられた。それともそれは、都合のよい思い込みだったのだろうか。導師にとっての自分が、ただきかん気の強い末娘というだけではなくて、役に立つ弟子のひとりでもあったと考えることは。

「お前のように健やかで賢い娘を、この邸に縛り付けて、年寄りの世話ばかりさせておくわけにはゆかぬ」

「縛るだなんて。わたしはここが好きなのです」

ああ、わかっているとも。導師は優しく仰ったけれど、わたしは悲しくなった。

思えば小さいころには、よくわがままをいって、こんなふうに導師にあやされたり、なだめられたりしていた。思い出して、わたしは唇を噛んだ。導師にとってもまた、わたしのいうことは、所詮は子どものわがままなのだ。

わたしが何をいっても、みな、幼い子どもをあしらうように、お前はまだ嫁いで子を持つ幸福を知らぬだけなのだという。女たちばかりか導師でさえそうなら、この餓えるような思いを、誰がわかってくれるだ

ろう。まだ見ぬ遙かな地を、遠い過去や未来のことを、どうしようもなく知りたいと願いつけてしまう、この心を。

失望するわたしの様子を、導師はいつとき、その白い膜のかかった目で、見つめておられた。

「さて。何か、考えてみることにしよう」

いつまでも嫁がずにいてよいとは、いえないが。導師はそんなふうに、微笑まれた。「お前の幸せは、私の望みでもあるのだよ」

その優しいまなざしを見つめ返したとき、いっそ隠し事の何もかもをさらけ出してしまいたいという、唐突な衝動に駆られて、わたしは息を詰めた。来年の不確かな約束のこと。使者が歌うように語った遠い火の国の情景。懐にずっと隠し持っている、銀の髪飾りのことを。

けれど結局、わたしはただ黙って頭を下げ、やりかけの写本を棚に片付けて、勉強室を後にした。

その頃から、わたしはときおり、夜更けにひとりで邸を抜け出すようになった。

母さんも姉さんたちも、すっかり寝静まっている時間。誰かに見つかったら、ひどく叱られるに決まっていたけれど、それでもいいと思っていた。

足音を忍ばせてひとけのないヤアタ・ウイラを辿り、邸の外へ出ると、いつもほんの少し、息がしやすくなった。

人目につかぬようにと、明かりのひとつももたずに出かけると、夜の通路は暗かった。ヒカリゴケの明かりは、夜になると弱まる。それでもよく見知った路だけあって、歩くのにさしたる苦労はなかった。何より、わたしはもっと、暗い場所を知っていた……。

わたしはかつて、暗闇の路に足を踏み入れたことがある。

葬儀のために、皆とつれだって死者の川のほとりまでいったことなら、誰にでも経験のあることだろう。けれどそうではなく、いつかの幼い日、わたしは誰にもいわず、ひとりで里を抜け出したのだった。

なぜそんなことをしようと思ったのか、じつはよく覚えていない。姉さんたちと喧嘩でもしたのかもしれないし、いつか参列した叔母の葬儀のときに、お前の父もこの川をくだっていったのだよと、そう聞かされたためだったかもしれない。

十になったばかりの頃だった。うるさく鳴る心臓をしずめようと、自分の胸に手をあてて、もう片方の手で壁をさぐりながら歩いた。真っ暗闇の中を、ひとりきりで。

里の中なら、昼間であればどこにいても、いつも誰かの話し声が反響して聞こえているものだ。しかし暗闇の路では、自分の足音のほかには、ほとんど何の音もしなかった。

静寂というものを、わたしはそこで生まれてはじめて体験した。立ち止まるたびに、自分の耳がおかしくなったのかと思って、何度も頭を振った。死者の川を下った先にある、水底の国というのは、こんな場所だろうか、そう考えたのを覚えている。

その静まり返った場所で、かすかな生き物の気配がするたびに、わたしは震え上がって足を止めた。母さんから寝物語に聞かされていた、暗闇の路にひそむおそろしい獣、毒をもつ蜘蛛や蛇たちや、ひとの心に忍び込んで惑わすという姿のない魔物の話が、頭の中をぐるぐると回っていた。

里から遠ざかるほど暗闇はますます深くなり、まったく何も見えなくなるまでに、たいした時間はかからなかった。

分かれ道がたくさんあって、迷えば戻れないという話が、きゅうに身に迫って感じられた。わたしは歩

きながらずっと、片方の手をごつごつした岩肌に触れさせていた。この壁を辿りながら引き返せば、必ずもとの場所にたどり着くはずだと、自分に言い聞かせて。

やがてわたしは暗がりやで転び、膝をすりむいて、ひとりで泣いた。その声が暗闇の中で幾重にも反響することに怯え、泣き止んで、嗚咽をこらえた。跳ね返るうちに籠もって歪んだ自分の声が、魔物のそれのように思えたのだ。実際に、残響が暗闇に吸い込まれて消える一瞬、わたしは自分のものではありえない誰かの呼びかけを、その中に聞いたように思った。こっちへおいで、と。

怖くて、怖くて、それでも勢いよく走って逃げるには、あたりは暗すぎた。足を引き摺り、泣きべそをかきながらもと来た路を辿って、ようやく里の明かりが見えたときには、わたしの顔は涙でぐちゃぐちゃだった。邸に戻って家族に顔を見られる前に、どうやって人にしられずに顔を洗うか、わたしは子どもなりに知恵を絞らねばならなかった。あのとき、まるで半日もずっと歩き続けていたかのように思っていたけれど、帰ってすぐに、日暮れの鐘が鳴った。実際にはたいした時間は過ぎていなかったのだ……。

あの静寂、おそろしいもののひそむ真の暗闇にくらべたら、ヤアタ・ウイラのちょっとした暗がりなどは、どうということもなかった。すぐ近くに誰かが寝息をたてていることがわかっている、このような場所では。

菜園にたどりついて、わたしは足を止めた。

空気は、とても清々しかった。首を上げて、わたしは深呼吸を繰り返した。ここの天井は、とても高い。高すぎて、どこに天井があるのかわからないほどだ。

もっとも、天井が見えないのはそのためばかりではなく、いつも光が差し込んでいるからでもある。明るすぎて、たしかには見定めがたいのだ。

夜に降り注ぐ光は、その時どきによってずいぶん明るさが変わる。それでも昼間とは違って、もっとも明るいときでさえ、眩しすぎて目のつぶれるほどにはならない。

隅に座り込んで、胸元からそっと髪飾りを取り出すと、銀細工は天からの光を受けて、きらきらと輝いた。

いつ見ても、細工の鳥は美しかった。その生き物が、高いところを優雅に飛ぶという様子を、わたしは想像した。

髪に挿すといいとはいわれたけれど、けしてほかの人に見られるわけにはいかなかった。わたしはこの細工をずっと身につけて、水浴びのときにも、けしてほかの娘たちの目に触れることのないように、慎重に衣服のあいだに隠していた。

それにしても、この細工のきれいなこと！

銀なんて、あんな重たいばかりの塊をたくさんもって行って、火の国の人たちはいったい何に使うのだろう——以前にはそんなふうには不思議に思っていたのだけれど、その答えが手の中にあった。磨いてこれほど美しくなるというのなら、ひと月も歩いて運ぶだけの甲斐もあるだろう。それにこうやって光の中で眩しく煌めくのなら、ここよりもずっと明るいという火の国にあっては、いっそう美しく輝くに違いなかった。

この細工を差し出したヨブの手を、わたしは何度も思い出した。大きな浅黒い手の甲。長く、節くれだった指。それでもわたしたちの手と、それほど大きくは変わらないのだと、そう思ったことを。

ああ、けれどヨブはたしか、はじめてわたしたちの姿を見たときには、驚いたといていた。目が青く光るとも。だけど、手が二本しかないとはいわなかったし、怪物のように違うということはないだろう。

ヨブと話していて、驚くことは数え切れないほどあったけれど、それでも彼が、人間ではないもっと特別の存在で、ひとのいうような神の使いなのだとは、わたしは思っていなかった。そう、導師がとても偉い方であるのと同時に、ひとりの人だと思うように。

こんなことを口に出していえば、それこそ不遜だといって咎められてしまうだろうけれど。

不遜。不遜というなら、わたしはもっととんでもないことを考えていた。

きっかけは、暦だった。ヨブの話聞いたとき、わたしたちの暦はかつて火の国からもたらされたのだろうと、わたしはそう考えた。

だけど、自分で思いついたこととはいえ、その仮定は、どこか妙な気がした。わたしは何度となく、その違和感の理由を考えてみた。そうしてあるとき気付いた。わたしたちの祖先のもとに、この里にはじめて火の国からの使者がおいでになったのは、いつのことだったのか？

そのときの記録を、わたしはたしかに、この目で見ることがあった。そしてその記録には、すでに暦が記されていたのだ。ファティス暦三年、サフィドラの月の一日と。

どういうことだろう？ 暦が火の国からもたらされたというのは間違いで、使者がやってくる前から、すでにわたしたちはそれを用いていたのだろうか。けれどそれならば、月の名前に、火の国に独自の言葉を使っていたのはおかしい。

いや——わたしは首を振った。そもそもその記録自体、最初に書かれたものの写しなのだ。あとになって、誰かが後年の暦にあわせて日付を書き換えたのかもしれない。

それとも、移住よりももっと前から、わたしたちの祖先は、火の国の人々と何かしらの親交があったのだろうか。そう考えれば、無理がないように思えた。

そんなふうに考えていたとき、突拍子もない思いつきが、わたしのなかにぽっかりと浮かび上がってきた。

わたしたちの祖先は、はるか昔、神々から水を奪われて、やむなくこの里へ移り住んできたのだという。長くけわしい、暗闇の路をこえて。

——暗闇の路の、そのむこうには、何がある？

その考えに至った瞬間、わたしは激しく首を振って、あわてて自分の思いつきを打ち消そうとした。けれど一度考えついたことは、消えてなくなってはくれなかった。

わたしたちの祖先は、火の国からやってきたのではないの？

だからわたしたちは、星の名前を用いた、かれらと同じ暦を使っているのではない？

セイラ・ウェルヤ。星の数ほど、というその言葉のことを、わたしは思い出した。そのいいまわしもまた、火の国からやってきたのだろうか？ そんなふうに、遠い異国の想像しがたいようなたとえが、わたしたちの言葉に、当たり前のように深く根付くものだろうか？ 誰も疑問には思わなかったのだろうか、星（ウェル）とはなんだろうか。

わたしたちの祖先は、空に広がる数えきれないほどの星々を、その目で見えていたのではないの？

暗闇の路はとても複雑に入り組んで、長く広く、どこまでも続いているという。火の国へ続く路は、そのなかのひとつに過ぎないのだと。だからその考えは、ほんとうにただの思いつきで、何も確証のあることではなかった。

だけでもし。もしもその突拍子もない思いつきが、本当のことだったとしたら。

わたしたちは、火の国へゆくことだって、出来るのではないだろうか。この眼でみわたすかぎりの砂漠を、星のしるべが無数に煌くという天を見ることだって、できるのではないか。

ひとの暮らす火の国が、燃え盛る炎に包まれた土地だなんて、ほんとうにそんなことがあるだろうか。火の国の人々は、神の加護によって炎に焼かれることのない肌を持っているのだと、これまでいわれたとお

りに信じてきたけれど、そのようすを目の当たりにした者が、いったいどこにいるだろう。

かつて炎の乙女は、火の国に踏み入って、炎に焼かれて死んでしまった。けれど、あの歌がただの作り話ではないのだと、誰に証を立てることができるだろう？

その考えが頭をよぎるたびに、わたしはぎくりとして身をすくませた。心臓は恐怖に縮み上がり、忙しない鼓動を鳴らした。

何度となく、自分に言い聞かせようとした。そんなのは子どもじみた空想だ、自分につごうのいい夢物語だと。

だって、もし仮にその考えが当たっているのだとしたら、どうして誰も火の国へいってみようとしなの？ そう思う一方で、もうひとりの自分がいう。みな、まさかそのようなことは、夢物語にも思わないからだ。

火の国へゆけば、炎に焼かれて死んでしまう。もしそれらの話が嘘だとしたら、誰がなんのために、そのような嘘をついたのか。

あれほど詳細な記録を残しつつづけている代々の導師が、なぜ移住の前のことは、ほとんど記していないのだろう。もっとも古い記録は、そう、あの神話なのだった。一族の移住にまつわる英雄譚。あれよりも古い記録は、残されていないのだ。

そのことを、これまで一度も疑問に思わなかったわけではなかった。けれど、過酷な旅のあいだには、誰も書物を持ち歩くような余裕はなかったのだろうと、そんなふうになんげしていた。以前の記録はそのときに失われてしまったのだろうと。

だけど、それがもし、故意に隠されているのだとしたら？

——智慧が必ずしも、人を幸福にするとは限らぬ。

導師の声が、ふいに耳に蘇った。知らないままでいるほうが幸せなこともある。導師が引用したもとの書物は、そのような訓話ではなかっただろうか。

考えは四方に散り、だからといって何が何でもなく、わたしは自分の想像に怯えた。

ああ、人にはいえないようなことばかり！

炎を待たずとも、自らの考えの罪深さに焼かれて死んでしまうのではないか。ときにはそんなふうを考えることさえあった。そんなとき、わたしは手の中の銀細工を握り締めて、恐怖が去るまで、じっと膝を抱えていた。

やはり菜園へ忍び込んで物思いに耽っていた、ある晩のことだった。

長い時間をそこで過ごしたあと、わたしは服についた土を払い、立ち上がった。戻って寝床に潜り込むつもりだった。

空気はつめたく澄んで、見上げると、天から降り注ぐ白い光は、眼の痛くなるような眩しさだった。ヨブの語った砂漠の空、眩しいほどになるという星明かりも、こんなふうだろうか。そんなことを思いながら、わたしは菜園をはなれた。

そのとき、人の話し声がした。

わたしはとっさに息をつめて、その場で立ち止まった。誰だろう、このような時間に。耳を澄ますと、話し声はどうやらすぐ近く、竈のあたりから聞こえているようだった。

近くの家々の女たちが共同で使う竈だ。真夜中に用のあるものなどいるはずがない。訝しく思って、わ

たしは耳を澄ました。

よく聞けば、ひとつはカナイの声のようだった。わたしは意表をつかれた。カナイがこんなふうに夜中に抜け出すことがあるなんて、思ってもみなかった。けれど考えてみれば、あのお邸の中が窮屈でたまらないというのが、姉さんの口癖だった。もし彼女がひとりでここにいるのだったら、わたしはそれで納得しただろう。けれど、聞こえてきたのは二人ぶんの声だった。

「――帯をありがとう、カナイ」

わたしは打たれたように立ちすくんだ。それは低い、男のひとの声だったのだ。

先にカナイが縫っていた、男物の帯。急に裁縫が好きになったカナイの、嬉しそうに針を使う横顔が、脳裏をよぎった。

「このつぎは、いつ会えるの？」

「――わからない」

わたしはぎゅっと自分の服の裾をつかんだ。カナイの声は、いつもの調子とはまるで違って、切実な、すぎるような響きをしていた。

それと対照的に、男のひとの声には、ためらうような間があった。

「だけど、もう会わないほうが……」

「いや、そんなの！」

叫んで、カナイは口をつぐんだ。声が響いて、誰かに聞かれることをおそれたのだろう。それからひそめた声で、カナイはいった。「ねえ、お願いよバルトレイー」

どきんと、強く心臓が跳ねた。わたしはその名前を知っていた。導師のもとに通う青年たちのひとり。カナイと曾祖父を同じくするという、そのひとの名前だった。

わたしは状況を理解して、悲鳴を上げそうになった。かろうじてそれを飲み込むと、足音を立てないように、じりじりと後ずさって、菜園へ引き返した。

握りしめた手が、ひどく冷たくなっていた。お願いよと、すぎるようなカナイの声が、耳の中をぐるぐると回った。

ああ、なんてことだろう。カナイ、それはきっと許されない。

どうしたらいいのだろう。引き返して、ふたりを思いとどまらせるべきなのだろうか。ほかの人に知られる前に、もう会うのはよしたほうがいいと。けれど、カナイがわたしのいうことなんて聞くはずがない。

それならばそっと、誰かに耳打ちするべきなのだろうか。導師か、そうでなければ、カナイの母さんに。けれどそんなことをして、どんな騒ぎになるか……。

知らないうちに、自分の手が服の上から、銀の髪飾りをきつく握り締めていることに気がついて、わたしはうろたえた。

カナイをたしなめる？ どんな顔をして？

わたしのしていることが、カナイのそれと、どれほど違うというのだろう。わたしはあの方と恋仲にあるわけではない。けれど、ほかの人の眼からみたら、なにひとつ変わらないように映るのではないか。いや、使者さまに無礼を働いているという点を考えれば、わたしのほうがよほど、罪は重いのだ……。

けどわたしは、そのことを認めたくなかった。わたしたちの場合は、ふたりとは違う。わたしが遠い異国の話を聞かせて欲しいとせがんで、あの方はその子どものわがままに、ただつきあってくれているだけなのだから。けれど、そう考えた瞬間、なぜかわたしの胸はひどく痛んだ。

自分が何に傷ついているのか、どうしてこれほど動揺しているのか、わからなかった。混乱したまま、わたしは長い時間、じっと菜園のすみでうずくまっていた。

長い時間が過ぎたあと、ふらつきながら立ち上がり、もう二人の姿がないことを確認して、お邸に戻っ

た。

けれどそんな状態で、寝付かれようはずもなかった。わたしは寝床の中で、まんじりともせずにひと晩をすごした。どうしたらいいのだろう。わたしはどうすべきなのだろう。

ぐるぐると答えのないことを考え続けて、やがて夜明けを迎えたとき、わたしはようやく心を決めた。昨夜耳にした会話のことを、誰にも明かすまいと。

一年はひどく長かった。

けれど、早くときが過ぎることを待ちわびつつも、わたしはその同じ心のどこかで、そのときがやってくることを、恐れていたような気がする。

来年のサフィドラの月、ほかに誰もいない静まり返った勉強室で、ひとり落胆するくらいなら、いっそのこと、また会えるかもしれないいつかの日を、永遠に待ち続けているほうが幸せなのではないかと、そんなふうにと考えるとさえあった。

年の瀬も近づくころには、母さんは、わたしの婚礼衣装を縫いはじめていた。結婚の話になると、わたしは不機嫌に黙り込んだり、逃げ出したりしたけれど、それで話をなかったことにできるわけではなかった。わたしが何をいっても、何をしても、母さんにしてみれば、それは子どもの駄々にすぎないのだった。

いっそ、何かとんでもないことをしでかしてみてもどうかとも考えた。とてもこのような娘を嫁にもらうわけにはいかないと、誰もが思うように仕向けることはできないだろうか。

けれどいざとなれば、そんなふうにもう母さんや導師の顔に泥を塗ることを、行動に移す度胸がなかった。

勉強室にいるあいだは、そうした憂鬱から離れて、たくさんの魅力的な物語や、過去の歴史に心を飛ばすことができた。けれど、わたしがきっとそれらの半分にも眼を通せないであろうことが、ときには勉強室で書き物机に向かっているときにさえ、わたしの心を沈ませた。

ある日、導師が仰った。

「心の用意が整わないというのなら、婚礼を先延ばしにすることはできるだろう。相手がどうしてもいやだというのなら、話をとりやめて、ほかの若者をさがすことだってできる。だが、時間を止めてお前をいつまでも子どものままでいさせてやることは、誰にもできないのだよ」

それはけして咎めたてるような語調ではなかったけれど、それでもわたしには、その言葉がとても堪えた。自分がいっているのがただのわがままで、導師や母さんのいうことが正しいのだと、わたしは知っていた。けれど正しいからといって、心が沿えるわけではなかった。

やがてソトゥの月も間近になったころ、前触れなくイラバが子どもを連れて、泊まりにきた。顔を出した理由を、姉さんはいわなかった。ただ久しぶりに遊びにきたのだというふうに、母さんやわたしを抱きしめた。

イラバの子どもは、もう赤ん坊ではなかった。姉さんの裾につかまり立ちをして、不明瞭な言葉でなにかをいっしょうけんめいに喋ろうとしていた。

ほかの姉さんたちも、喜んで甥にかまいつけて、それで興奮した甥は、顔を真っ赤にして何度も高い声を上げた。母さんが眼を細めて孫の姿を眺めているのを見て、母さんがイラバを呼んだのかもしれないと、わたしは考えた。意固地になって嫁入りをいやがるわたしを、説得するために。

けれどイラバは、わたしを叱りもしなかったし、何かをいさそうという気配もさせなかった。

女たちでそろって食事を囲み、ひとしきり互いの近況を交換しおわると、広間はふっと静かになった。み

なそれぞれに洗い物も終えて、縫い物の続きをするか、部屋に戻って休むかしていた。

イラバは眠りかかった子どもを抱えて、やさしくゆさぶりながら、歌をうたってやっていた。それは、耳になじんだ歌だった。炎の乙女の歌。

「子守唄に、その歌なの？」

わたしが聞くと、イラバは自分でも気づいていなかったというように、ちょっと眼を丸くして、それから悪戯っぽく笑った。

「あら、そうね。変だわね」

そうって、けれどイラバはその歌の続きを口ずさんだ。あいかわらず、姉さんの声は美しかった。

蝋燭を手元によせて刺繍をしていた母さんが、深くため息をついた。

「よして頂戴。みんな、あんなおかしな歌にして、面白おかしく好き勝手なことばかりいうけれど、あのひとはそんな女じゃなかったわ」

わたしたちは驚いて、母さんを振り返った。

「母さん、炎の乙女を知っているの？」

「知っているもなにも。母さんの生まれた家の、すぐお隣の娘だったのよ。年もひとつしか違わなくて、よく話したわ」

姉さんとわたしは顔を見合わせた。姉もまた、初耳のようだった。

「もっとずっと昔の話だと思ってたわ、百年とか、二百年とか前のことだと」

「そんなはずがないでしょう。エヴェリーシカが亡くなったのは、イラバ、あなたが生まれるほんの少し前でしたよ。可哀そうに、川に落ちてね」

その言葉に、わたしは二度驚いた。

「炎の乙女は、火の国の炎に焼かれて亡くなったのではないの？」

「いいえ。そりゃあ、顔も手足もひどい火傷をしてね、ずっとあとが残ってしまっていたけれど。眼も、ほとんど見えていなかったのではないかしらね。結局、エヴェリーシカはお嫁にもいかないまま……。気の毒なことだったわ」

深く息を吐いて、母さんはこめかみを揉んだ。

「だいたい、あなたたちが妙な歌にして歌うような、色っぽい話ではなかったのよ。ああ、かわいそうなエヴェリーシカ。あの子はたしかに、使者さまのあとを追いかけていったのでしょうかよ。だけどね、あの子にはわけもわかっていなかったのよ」

「どういうこと？」

わたしが訊くと、母さんはきつく眉間に皺を寄せたけれど、ため息をついて、教えてくれた。

「エヴェリーシカの頭のなかは、すこし、ひとと違っていたのね。そう、彼女はずっと、小さな子どものままだったの。見た目は年頃のきれいな娘でもね」

そこで言葉を切って、母さんはわたしをちらりと見た。「トウイヤ、あなたはまたべつの意味で、いつまでも子どものようだけど」

わたしはその言葉に気が咎めたり腹を立てたりするよりも、話の中身に気を取られていた。

「じゃあ炎の乙女は、何もわからずに暗闇の路に踏み入ってしまったの？」

「そうよ。あのことがあるずっと前から、あの子はよく、ふらふらとおかしなところに迷い込んでいたものだから、しょっちゅう皆で探したわ。ひとの家に上がりこんでみたり、ト・ウイラに入り込んでみたり」

そう話す母さんの肩は落ちて、ひどく悲しげだった。もっとよく彼女のようにすを気にかけていれば、大事にならずに済んだのではないかと、いまでも母さんは思っているようだった。

「あのおかしな歌では、使者に恋焦がれてなんて、無責任なことをいっているけれど、あの子をよく知って

いる人は誰も、そんなことは思わなかったわ。男のひとのあとを追いかけていくことを、はしたないとさえ、あの子は思いもしなかったでしょうよ」

追ってきた娘の存在に、使者さま方が気づいてくださらなかったら、あの子はきっとそのまま死んでいただろう。母さんはそう言って、遠い過去を見通すような眼をした。

「気の毒に」

姉さんはいって、そっと祈りのしぐさをしたけれど、わたしは薄情にも、他のことに気をとられていた。炎の乙女が使者を追いかけたせいで死んだというのは嘘でも、火の国が、膚を焼かれ眼がつぶれてしまうような、恐ろしい場所だということは、ほんとうの話だったのだ……。

考え込むわたしの様子がおかしいことには、母さんは気づかないようだった。

「だから、あんまりおかしな歌を歌わないで頂戴」

そう言って、母さんは立ち上がった。「お茶のおかわりを用意するわ。カナイ、手伝ってくれる？ あなたの淹れるお茶はおいしいものね」

カナイをつれて母さんが出てゆくと、イラバはため息をついた。それから腕の中ですっかり眠り込んでいるわが子を、優しく揺すぶった。

その姉のしぐさを見つめながら、わたしは子どものようだったという乙女について、じっと考えていた。子どものような心をもった、無邪気な少女——危険もわからず、ただ子どもが大人になつてそのあとを無心についていくように、使者の背中をおいかけていった……。

少しして、イラバがいった。

「ねえ。炎の乙女は、ほんとうに恋をしていなかったのだと思う？」

内緒話のときの声だった。イラバの眼は、悪戯っぽく輝いていた。

「わからないわ……」

わたしはどきりと心臓が跳ねるのを自覚しながら、なんでもない調子を装って、首を振った。姉が何かに気づいているのかと思ったのだ。けれど、そうではなかった。姉は、みずからの過去を振り返っていたのだった。

「暗闇の路は、とても長くて険しいというわ。わたしだったら、好きでもない人を追いかけるのに、そんな遠くまでいったりできないわ。いくら心が子どもだったとしてもね」

姉の言葉に、わたしははっとした。それから思わず声をひそめた。

「姉さん、好きなひとがいたの？」

ふふ、と笑って、姉は肩をすくめた。

「昔の話よ。ほかの人にはいわないでね」

「それは、義兄さんのことではないのよね？」

小声でわたしが聞くと、姉は面白がるように、わたしを見た。

「ええ。……あなたがそんな話に、興味を持つなんてね」

わたしはどきりとして、動揺をごまかすように、いそいでいった。「ねえ。そのひとを追いかけてゆかなかったことを、後悔している？」

姉は少し、考えるように眼を閉じた。それから、穏やかな声でいった。

「いいえ。いま、わたしはとても、幸せだもの」

わたしは納得のいかない思いをもてあまして、姉の横顔を見つめた。けれど、よく見れば去年には姉の腕にあった青あざは、すっかり消えてしまっていたし、いつになく痩せていた去年とはちがって、姉の頬の線には、丸みが戻っていた。それに、腕の中の子どものをのぞきこむ姉の瞳には、嘘があるようにはみえなかった。

なぜか裏切られたような気がして、わたしはイラバから目を逸らした。

好きではない人のところに嫁いで、幸せだなんて、どうしたらそんなふうに思えるの。その問いかけは、すぐ口元までこみ上げていたけれど、わたしがそれを口に出すことは、ついになかった。

火の国より来たる者（5）

そうしてまたサフィドラの月がやってきた。

朝から、母さんと言い争いになった。そろそろ婚礼衣装も仕上げなくてはならないわね。そういいだした母さんに、わたしは声を荒げた。わたしは嫁ぎたくなんてないっていつてるじゃない。

何度声を嗔らしても、母さんはまともにきいてくれなかった。

「みんなそういうの。でもね、大丈夫。何も心配いらぬのよ。不安なのは最初だけのこと。よい家庭をもって幸せになるのは、あなたの義務でもあるのよ」

一年半ものあいだ、ずっと同じことを言い続けて、けれどそれらはひとつも伝わることはなく、いつまでも話はすれ違い続けた。かみ合わない口論は虚しく、わたしの言葉は次第に強くなり、しばしば母さんをひどく傷つけた。

どうして伝わらないのだろう。

その頃わたしは、母さんを憎んでさえいたかもしれない。けれど本当はその怒りが、筋違いであることを、自分でよく知っていた。わかってくれないというわたしのほうこそ、母さんにいわずに隠している秘密が、いくらでもあるのだった。隠したいことは隠し、いいたいことだけをいって、それで理解してもらおうなんて、そんな都合のいい話があるだろうか？

話はいつものようにかみ合わないまま、その日、奥に追い立てられて、わたしは勉強室に籠もった。

朝の喧嘩からあとを引いていた苛立ちは、じきに、不安にとってかわった。ああ、本当にあの方は今年もいらっしゃるだろうか？ いらっしゃらなかったとしたら、来年は？

来年。来年、わたしはこの邸にいられるのだろうか。母さんは、できれば今年のエオンの月には、わたしを嫁がせたいと思っている。わたしは十五で、それはお嫁に行くのに遅いということはないけれど、けて早すぎもしない年齢だった。

せめてもう少し待ってと、いくらわたしが縋りついたところで、母さんはそう遠くないうちに、話を進めてしまうだろう。そうすれば、イラバのようにこのお邸にたまに顔を出すことくらいはできるかもしれないけれど、サフィドラの月の一日に、ここでヨブを待つことは、もうできない。

その考えが繰り返し頭をめぐっては心を乱し、わたしは何度も立ち上がっては、書き物机に戻った。息が詰まるようだった。

「来ているか」

垂れ布の向こうから、懐かしいその声がしたとき、わたしはこらえかねて、泣き出した。

「ええ」

それでも、なんでもないふりを装って返事をしたけれど、その声が震えていることに、ヨブは気づいたようだった。

「泣いているのか」

わたしは頬を拭い、嗚咽を飲み込んで、震える息を吐き出した。それから無理に、明るい声を出した。

「なんでもないの。ねえ、また、星の話聞かせてくださる？」

ヨブは困惑したようだったが、やがて、あの低くやわらかな抑揚の声で、星の話のひとつ、語って聞かせてくれた。ひとの定めをつかさどるといふ星の話を。ときにひどく残酷で、ときにひとに希望を与える、ひときわ大きく天に輝く白い星……

その話が終わるころには、わたしは泣き止んでいた。

「どうかしたのか」

そう問いかけるヨブの声は穏やかで、けれどほんの少し、うろたえていた。

ごめんなさい、気にしないで。そういおうとした口は、けれど違う言葉をこぼしていた。「知りたいと願うことは、そんなにわがままなことかしら」

きっとそんな話をされても、ヨブは困るだけだろう。わかっている、それでもいわずにはいられない自分の幼さを、わたしは恥じた。子ども扱いされることが、いやだったはずなのに。けれどいちど話しだせば、あふれてくる言葉を押しとどめることはもう難しかった。

「わたし、もっと色んなことを知りたいわ。外の世界がどんなふうか、この目で見られるものなら、見てみたい。それが無理なら、せめてお話や書物の中でもいいから、少しでも知りたいの」

ヨブは黙って話を聞いていた。一度止まったはずの涙が、ふたたびこみあげてくるのをこらえながら、わたしは続けた。

「でもみんな、わたしがそういうと、そんなのはわがままだというのよ。そんなことを知りたがるわたしは、おかしいというの。わたしはおかしいかしら？ 幸せって何？ 目を閉じて耳を塞げば、それで幸せになれるだなんて、そんなことがあるかしら」

途中からはもう支離滅裂だった。わたしは自分でもそのことに気づき、恥じて、口をつぐんだ。

ヨブはしばらく考えるように黙っていた。それから、低い声でいった。

「多くの者は歳をとるにつれて、しだいにその目を曇らせてゆくものだ。真実を目の当たりにすることをおそれ、未知なる物を理解しようとするをおそれ、己の築いてきたものの見方を、かたくなに押し通そうとする」

わたしは膝を抱えて、その声に耳を済ませた。

「幼い頃に誰もがそうだったように、まっすぐに世界への興味を持ち続けていられるというのは、得難いことだと、――俺はそのように思う」

その声は、優しくかった。それなのに、わたしは再び泣かないようにするのに精一杯で、あいづちさえ、まともに返せなかった。

「思えば俺は、いつも欺瞞で己の目を曇らせることばかりしてきたような気がする。常に疑い、決めつけ、己の心を騙しながら、生きてきたように思う……」

わたしは驚いて、目を瞬いた。その拍子に睫毛から涙がこぼれて、床に落ちた。

「あなたがそんな方だとは思えないわ」

「さて、どうだろうか」

ヨブは苦笑した。それから何かいいかげんに口を開きかけて、思いとどまる気配が、布越しに伝わってきた。

いっときして、ヨブは切れ切れに、今年の荷の話をはじめた。火の国での作物の出来、遠い異国から運ばれてきた荷。どんなふうに星を辿って、ここまでやってきたか。途中で見舞われた砂嵐……。

嵐という言葉が知らなかったわたしに、ヨブは、風の激しく吹き荒れるさまを、苦労しながら説明してくれた。

わたしは言葉すくなくに相槌をかえしながら、せめて一言も聞き漏らすまいと、耳を澄ましていた。それ以外に何もできることはないのだからと、自分に言い聞かせて。

ときおり灯心がじりじりと音を立て、蠟燭のあかりが揺れた。ヨブの声は低く、音楽的な抑揚をもって、心地よく響き続けた。

「トウイヤ？ 誰と話しているの？」

わたしはびくりと肩を跳ねさせた。

声がしたのは、ヤァタ・ウイラのほうからだった。ヨブが立ち上がるのが、垂れ布ごしのかすかな音でわ

かった。足音を立てないように、遠ざかっていく……

声は、カナイのものだった。どうして、いまなの。わたしがここで本を読んでいても、いつもなら近寄ってこようとしめないのに。叫びだしたいのをこらえて、わたしは半ば壁にしがみつくようにしながら、よろよろと立ち上がった。

ヨブの話し声は、いつもどおり低くひそめたものだった。裁縫室まで声が届いていたとは思えない。

それとも、それまでこんなふうなことが一度もなかったことのほうが、幸運だったのかもしれない。けれどそう納得するのは難しかった。

苛立ちを押し殺し、なんでもなような声を作って、わたしはいった。

「――誰もいないわ、姉さん。ひとりごとでもいっていたかしら？」

ヤアタ・ウイラから垂れ布をくぐって、カナイが入ってきた。その表情は、はじめからひどくけわしかった。声がするまで、カナイが近づいてくる足音に気づかなかった――そのことの意味に、わたしはようやく気付いた。

「ごまかしたってだめよ」

カナイはト・ウイラのほうに視線を投げて、そういうと、振り向いてわたしを睨んだ。

「何もごまかしてなんかいないわ」

カナイはじっと、光る目で、わたしを睨みすえた。何を訊かれても、しらばっくれてみせるしかない。わたしは無表情をよそおっていた。カナイはそんなわたしを見て、皮肉げに唇だけで笑った。

「誰と会っていたの？ いつまでも子どもみたいに本に夢中だなんて、わたしたちみんな、すっかり騙されてたってわけね」

ふっと、笑みを消して、カナイは厳しい声を出した。

「わかってるの？ あんたの母さんがこのことを知ったら、どんな顔をするかしら」

「ねえ、さっきから何のことをいっているの。姉さん、何か勘違いしてるんじゃない？」

よくもまあ、そんなふうにしらを切って見せたものだ。自分でもそんなふうと思うくらい、自分の口から出た声は、平然としたものだった。

けれど、それも声ばかりで、けして心から冷静でいられたわけではなかった。わたしは自分でも気付かないうちに、服の上から、首から下げた銀細工のあたりを、握りしめていたらしかった。カナイの視線が下りて、自分の胸元をいぶかしげに見たことで、わたしは遅れてそのことに気付いた。

「あんた、何を隠してるの」

わたしはとっさに後ろに下がって、カナイの視線から逃れようとした。けれどカナイのほうが早かった。カナイは有無をいわせず詰めよってきて、すばやくわたしの腕を掴むと、服の胸元に手をつこんだ。

「やめて」

わたしは悲鳴を上げたけれど、カナイの手は容赦なく首にかかっていた紐を探り当て、手繰りよせた。銀の髪飾りが蠟燭の光に晒されて、きらめいた。

「何よ、これ。あんた、まさか――」

カナイの顔色が変わるのが、はっきりとわかった。わたしは必死で、言い逃れを探そうとした。苦し紛れでもなんでもいい、カナイを煙に巻けるような説明。

「何の騒ぎだね」

わたしたちははっとして、それぞれにト・ウイラに続く入り口を振り返った。

「導師……」

カナイもまた、青ざめているのがわかった。どこまで話が導師の耳に入ったのか……わたしはとっさに髪飾りを隠そうとしたけれど、そのときにはすでに、導師のまなざしは、手の中の細工に注がれていた。

導師はゆっくりと首をめぐらせて、カナイの表情を見ると、目を細めた。

「喧嘩の原因は、その細工かね」

その言葉に勢いを得て、カナイはいった。「そうです、導師。この子、いったいどこでこんなものを――」
いいかけたカナイに、導師は軽く手のひらをみせて、首を振った。そして、信じがたいことを口にした。
「その細工なら、私が与えたのだ」

カナイは絶句した。

わたしのほうが、より驚いていた。導師がなぜそんなことを仰るのか、わけがわからなかった。けれどカナイがわたしを振り返るのに、とっさに頷いてみせた。

いつときカナイは険しい顔で、わたしの顔を睨んで、それから導師に向き直った。

「いったいどうなさったんです、こんなもの」

「使者のお一方が、気まぐれに下さったのでな。私に妻のないことを、ご存知なかったようだ。とって、せっかくのご好意を無碍にもできぬ」

導師は平然とって、それから少し、面白がるような顔をした。カナイはいくらか鼻白み、それでもなお食い下がった。

「どうしてこの子に――？」

「全てのものは等しく分かち合い、分かち難いものがあれば、末子に与えよ。――私は戒律に従ったまでだ」

導師はゆっくりと、噛み含めるようにそう仰った。それもまた書物からの引用であり、里のすべての掟の根源でもあった。

カナイは、それで納得したわけではないようだった。唇を噛みしめ、眉を吊り上げていた。けれど、それ以上導師にたてつくことも、カナイにはできないようだった。姉さんは振り返り、きっとわたしの顔を睨みつけて、それから手を放した。

苛立ち任せに足音を荒げ、カナイが部屋を出て行くのを、わたしは呆然として見送った。

導師を振り返ると、思いがけず静かなまなざしが、そこにあった。

なぜ、あんなことを仰ったんです。その一言が舌に張り付いていたけれど、とうとう口の外に出ることはなかった。

「トウイヤ、少し、話がある」

導師のほうからそう切り出されとき、わたしはてっきり、細工の出所について、厳しく問い詰められるのだと思った。怒りに興奮していたカナイをなだめるために、機転をきかせてわたしをかばってくださっただけで、けして見逃そうというわけではないのだと。

けれど、導師は思いがけないことを仰った。

「星を手にしたいと望んだ男の話を、聞いたことがあるかね」

わたしは驚きに打たれて、顔を上げた。髪飾りをわたしにくださったのが、火の国の使者であることを、導師はご存知なのだ……。そうとしか思えなかった。

いつから導師はご存知だったのだろうか。たったいま、わたしの手の中の細工をご覧になって、それではじめてそうと気づかれたのだろうか？ けれどそれにしても、導師の顔に、驚きの色は見当たらなかった。

導師は声を荒げることもなく、ごく静かに続けられた。

「星の光に憧れて、それを手にしたいと望みつづけた男は、あるとき、とうとう星を地上に落とすことに成功した。けれどいざ星を手にしたかと思うや、男は星の火に焼かれて、死んでしまった……」

その言葉は、不思議な抑揚に満ちていて、ヨブの語りをわたしに思い出させた。そのまなざしは静かで、導師が何を思っているのか、ただ見ただけでは、とてもわかりそうになかった。

「手の届かないものに憧れることは、誰しもあるだろう。けれど、そうしたものを本当に手に入れようとす

るのは、とても不幸なことだ」

噛み含めるように、導師はいった。「トウイヤ、お前は賢い子だ。ほんとうは自分でも、わかっているの
だろう？」

わたしは唇を噛んで、うつむいた。導師の声には、けして叱責するような調子も、責める響きもなかった
けれど、それでも仰っていることの意味は、明らかだった。

わたしは星を望んでいるのだろうか？

導師はそれ以上、何も仰らなかった。ゆっくりと踵を返して、部屋を出てゆかれた。

手のなかで、細工が蠟燭のあかりを受けて、きらめいていた。それを見つめたまま、わたしはいつまで
も、じっと俯いていた。

やがて、裁縫室に戻ったとき、カナイは無言で針を使っていた。不機嫌なのはあきらかで、わたしが部屋
に入っても、姉さんは視線を上げようとしなかった。

わたしもまた、何もいわなかった。ふたりともが無口になっているのを見て、下の姉さんが心配そうに、何
くれとなく声をかけてくれていたけれど、カナイもわたしも、短く相槌をうつばかりで、せめて何ごともな
かったふりをつくらおうという努力さえしなかった。

食事は喉を通らず、わたしは姉さんたちと口をきくことさえ億劫に思えて、すぐに床についた。

眠れるはずもなかった。やがて明かりが吹き消され、わずかなヒカリゴケの光が、かろうじてものの輪
郭を浮かび上がらせていた。わたしはじっと、部屋の隅の暗がりを見つめていた。カナイの母さんが刺繍
をしたという壁掛けの、古びてもまだほつれない、裾の始末のあたりを。

ヨブは明日、いらっしゃるだろうか？ 導師はあの方に、何か仰ただろうか……。そんな不安ばかり
が胸の中をぐるぐると回って、わたしはまんじりともせずに、横たわっていた。

やがて、眠ることを諦めて、わたしは静かに体を起こした。

音を立てずに部屋を出た。ヤアタ・ウイラを進み、いつもの習慣で、勉強室の前で耳を澄ました。このよ
うな深夜に、誰がいるとも思えなかったけれど。

垂れ布をくぐって中に入り、自分の呼吸を十ほど数えて、わたしは口を開いた。

「入ってきたら？」

途中から、カナイが同じようにそっと部屋を出てきたことに、気づいていた。

垂れ布が揺れて、案の定、姉さんが入ってきた。カナイは肩をすくめた。

「深夜の逢引ではないというわけね」

わたしは何もいいかえさなかった。何をいっても、カナイは疑いとともに関心があるように思っていたので。

長い沈黙ののちに、やがてカナイが口を開いた。

「――使者さまなのね？」

その声は、断定的な響きを帯びていた。ああ、いつからカナイは勘付いていたのだろうか？

「何のこと」

しらばっくれようとしても、カナイはひかなかった。

「知らない人の声だったわ。いまの時期に導師以外の男の人が、こんなところにいるはずがないもの。ほかに
考えられないわ」

奇しくもその理屈は、わたしが二年前に、ここで考えたのと同じ筋道だった。わたしはカナイの目を、

じっと見つめ返した。

「姉さん。話を聞いて……」

「あなた、自分が何をしているかわかっているの？ ……導師にお話しするわ。あんたの母さんにも」

「待って」

わたしはカナイの腕に縋った。カナイは信じられないという顔をして、その手を振り払った。

「違うの、何もないの！」

わたしの声は、ほとんど悲鳴だった。「姉さんが思っているようなことじゃないの。ただほんの少し、お話を聞いていただけなのよ。火の国のことを」

「話しただけ？ だけ、ですって？」

カナイは取り合おうとしなかった。「信じられない。あんた、自分の立場がわかっているの？」

「お願いよ、姉さん」

わたしは必死だった。いつか己の立てた誓いを、忘れるほどには。「わたしも、知ってるのよ」

カナイの顔が強ばった。

「……何を知っているんですって」

「あなたとバルトレイのこと」

それは、自分の声ではないようだった。その一瞬、カナイの表情が見る間に歪むのを、わたしは見た。

「わたし、聴いてしまったの。アディドの月の、十日のことだったと思う。眠れなくて、夜中に外を散歩して」

カナイは目を光らせて、わたしを睨み返した。

いまや立場は逆転していた。わたしは間をおかずに口を開いた。自分でぞっとするほど、それは、冷静な声だった。

「誰にもいわないわ。姉さんも黙っていてくれるなら」

カナイはいつか、言葉を失って、ぶるぶると手を震わせていた。やがてその手が振り上げられても、わたしは動かなかった。

わたしだって、カナイに対して、腹が立っていた。その感情が半ば、八つ当たりなのだと、自分でもわかっていたけれど。

仮に姉さんが気づかなかったとしても、導師をご存知だったのなら、結果は同じことだったかもしれない。わたしの理性の声はそういったけれど、それでも、カナイさえいなければという気持ちを、胸の中から追い払ってしまうことはできなかった。

なぜなの。どうせ何も口出しなんかしなくても、ヨブと話せる機会なんて、あともう数えるほどもなかった。邪魔する必要なんて、どこにあるの。言葉はいくらでも喉の奥からせりあがってきたけれど、わたしはそれらを全て呑みこんで、ただカナイの目を見つめ返した。

わたしの頬を叩くと、カナイは背中を向けた。

「あんたがそんな女だなんて、思ってもみなかった」

その声には、力がなかった。

カナイは立ち去った。

足元がふらついた。暗がりですくまっ、わたしは自分の中からこみ上げてくる感情の奔流に、じっと耐えた。それは怒りだったかもしれないし、もっと違うものだったかもしれない。

やがてのろのろと立ち上がり、書き物机の前に座ると、眼の奥がちかちかと痛んだ。苦しかった。自分がいった言葉が、カナイの裏切られたという表情が、ぐるぐると回っていた。ときおり発作のように、乾いた嗚咽の切れ端がのどの奥に絡んだけれど、涙は出てこなかった。

そのまま勉強室で夜明けの鐘を迎えても、下の姉さんが様子を見に来る気配はなかった。カナイがどんなふうに行ったのかわからないけれど、ともかく、そのことが有難かった。その頃になると、カナイへの苛立ちはすでに冷めて、どこか遠いものとなっていた。

じっとしていると、不安を伴う益体もない考えばかりがとめどなく頭をよぎったけれど、もう、本を読んで時間を潰すことさえ考えきれなかった。

いま導師は何を思っているのだろうか。疲れて重い思考の中で、ときおりそのことを思い返した。あんなふうに遠まわしにいわなくなったって、ただひとことお叱りになれば、あるいはお命じになればよかったのだ。もう使者には会わないようにと。導師はなぜそうされなかったのだろうか？ 誰もはっきりと言葉に出さなければ、それがなかったのも同じことだと、そんな欺瞞をよしとされる方ではないはずだった。少なくとも、わたしのよく知る導師は。

それともそれは、情けだったのだろうか。わたしにあと一日だけの時間を与えようという。

けれど、その日、ヨブは来なかった。

三日目も、わたしは朝から勉強室を訪れ、そこでじっとヨブを待った。二度、食事を摂るために裁縫室に戻り、少しばかり胃にもものを入れたけれど、それ以外のときを、ほとんどずっと勉強室で過ごした。

去年も一昨年も、三日目には出立の準備で忙しいからと、ヨブはやってこなかった。今年も同じだろう。頭ではそうわかっていたけれど、もしかしたらという望みを捨てきれなかった。

昨日、ヨブはどうしてやってこなかったのだろうか。そればかりを考えていた。

導師が何かヨブに仰ったのだろうか。わたしを遠まわしにいさめたように。それでヨブはやって来られずにいるのか。

そうでなければただ単に、人目を盗むことができなかったのかもしれない。それとも、来年にはまた話せるだろうと、そんなふうに思っているのだろうか……。

色んな考えがよぎっていったけれど、ひとりでいくら考えても、わからないことだ。いつからか、わたしは考えるのをやめた。そうすると、不思議と心は静かになった。

凧いだ心の中で、次第に決意が形になるのを、わたしはどこか他人事のように眺めていた。

やがて、わたしは書棚へ向かい、過去の記録をひっくり返しはじめた。銀の採掘と、それから、葬儀についての記録を。

その日の深夜、わたしは勉強室でも裁縫室でもなく、物置に使っている、狭苦しい小部屋にいた。

皆、すでに寝静まっている頃合いだ。夜が明ければ姉さんたちは、邸の奥に籠もる暮らしから解放されて、自分たちの部屋に戻るはずだ。母さんたちも大仕事を終えて、ほっと胸をなでおろしているころだろう。わたしがいないことに、いつ気づくだろうか？

深夜に里を発つのだと、ヨブはいていた。

じっと耳をすまして、わたしは周囲の様子を探っていた。使者さま方が旅立たれた直後には、見送りのために、人が多いだろう。その気配が去るのを、待たなければならなかった。

邸内の物音が静まり返るのをまって、わたしはそっと、小部屋を忍び出た。

通路で息をひそめて広間の気配をうかがい、すっかり人のいなくなった隙をついて、通り抜けた。表へ出ると、三日ぶりの屋外で、ひとつ、大きく息を吸い込んだ。

明かりはもたなかった。目立つに決まっているからだ。そういっても、夜中に外を出歩く酔狂な人が、どれほどいるかはわからなかったけれど。

誰かに見られても、知ったことではないと、そういう自棄のような気持ちもあった。それでもト・ウイラに入り込むときには、ひどく落ち着かない思いが胸を揺さぶった。

けれど幸運なことに、わたしは誰とも会わなかった。

導師の命で、誰かに見張られているという可能性も、考えてはいた。どうやって目を盗み、あるいは振り切るか、いくら考えたところで、確実なすべなんて思いつかなかった。けれど、そんな心配も杞憂に終わった。

どうして導師はそうされなかったのか。わたしがこのような行動に出ると、少しもお考えにならなかったのだろうか。

そうではないと、わたしは思った。こんなことを人に話せば、どれほどひそかに命じたところで、次の日には里じゅうに知れ渡っているだろう。導師はわたしについての悪いうわさが広がることを、避けてくださったのだ。

そうでなければ、わたしの分別を、信じてくださったのだ……。その考えが頭をよぎった、そのときにだけ、いくらか気が咎めるような気がした。

けれどわたしは、足を止めはしなかった。

里のはての岩壁を前にしたとき、思い立って、わたしは紐で胸元にさげていた髪飾りを取り出した。ほんのわずかな明かりのもとでさえ、細工の鳥は眩しいほどにきらめいた。その輝きにしばし見とれたあとで、わたしはそれを髪にさした。それから、里の外へと足を踏み出した。

暗闇の路は、遠い記憶のなかのそれと、少しもかわらなかった。

里の通路のように磨かれてはいない、ごつごつした壁につかまりながら、足音を立てないように、そろそろと歩いた。ほんの少しの距離を歩いただけで、あたりはわずかの光も射すことのない、真の闇に塗りつぶされた。

それでもまだ里の近くにいるあいだは、さまざまな物音が聞こえていた。遠くで響く水音や、どこかの家の中で宵っぱりの人が立てる物音。けれど、じきにそれらもいっさい届かなくなった。それでもわたしはなお息をひそめ、衣擦れさえ立てないように、そっと歩いた。

静寂がいよいよ深まるにつれて、抑えきれないかすかな息の音や、自分の心臓の音さえも、うるさいほどに耳の奥に反響した。どれほど慎重に歩いても、わたしはときおり小さくつまずき、壁にしがみついても、その鋭い岩肌ですり傷を作った。

いつしか、炎の乙女の歌が、頭の中を繰り返し流れていた。

子どものような心を持っていたという、美しいひと。わけもわかっていなかったのだ、あの人は恋など知らなかっただろうと、母さんはいった。

イラバの言葉をもまた、わたしは思い出した。思い人でもない相手を追いかけて、そんなに遠くまでいったりできるかしら。

本当は、彼女には、何もかもわかっていたのではない？ その日を逃せば、もう使者とは会えなくなってしまうことも、彼を追っていけば、己の命が危ういということも。承知の上で、それでも追わずにはいられなかったのではないの？

やがて、十分に里から離れたところで、わたしは足音を殺すのをやめた。

暗闇の中で足取りを速めると、自分の呼吸がひどく耳についた。

何ひとつ見えない視界の中、自分が目を開けているのか、瞼を閉じているのかさえ、じきにわからなくなった。手足にふれる岩肌の感触と、自分の呼吸の音、ほんのわずかな空気の流れ。それだけが全てだった。

時間の感覚はすぐに消えて失せ、自分がどれほどの距離を歩いたのか、まるでわからなくなった。

気持ちばかりが急いでいた。こんなことで、本当に追いつけるのだろうか。使者さま方は、とっくに暗闇の路を抜けだしてしまっただろうか。何度もそう考えた。

けれど、体の大きな動物にたくさんの荷を牽かせてゆくことから、その分、使者さま方はゆっくりと行かざるを得ないだろう。そんな不確かな推測だけが、希望だった。

ひたすら、壁にすぎるようにして歩き続けていた。そのうちに、自分がいまほんとうに歩いているのか、自分の足で立っているのかということさえ、確かにはわからなくなった。ほんとうは自分の体は寝床の中にいて、いま自分は夢の中を彷徨っているのではないかという考えが、頭の隅をちらついて、そのすぐあとには、そうとしか思えないような気さえしてきた。感覚の喪失が恐ろしく、数歩を歩くごとに、指先が痛くなるほど壁を掴んだ。そうしながら、ただ、自分の呼吸の音ばかりを数えていた。

何の前触れもなかった。

踏み出した足が、空を踏んだ。

とっさに右手の壁に、縋ろうとした。けれど壁は、すぐ先で途切れていた。指先がかろうじて、ごつごつした岩のへりを掴んだ。浮遊感が背骨をつらぬき、勢いあまった体が壁に激しくぶつかった。息が詰まった。

どうやって自分が踏みとどまったのか、覚えていない。気付いたときには、地面に体を投げ出して、這いつくばるように突っ伏していた。右足から抜けた沓だけが、闇に吞まれていった。

沓が何かにつづかって跳ね返りながら、はるか下方へ落ちてゆく音が、ぞっとするほど長く、いつまでも響いていた。

心臓がうるさく鳴っていた。体のあちこちがひりつくように痛んだ。冷たくなった指で自分の腕を抱くと、右腕が擦り剥けて、はがれかかった皮膚と、ぬるりとした血の感触があった。

立ち上がったとき、まだ膝が震えていた。力の入らないつま先で、足元を探った。ぽっかりと、そこから先の地面が消え失せていた。

次の一步を踏み出すには、勇気がいった。

食いしばった歯の間から、震える息を吐いて、わたしはじりじりと、足で地面を探った。大丈夫、左側にはちゃんと足場がある。にじるようにして、少しずつ移動した。空に突き出した手が、左手の壁に触れるまで。

壁につかまりなおすと、わたしは思い立って、残った左足の沓を脱ぎ捨てた。

そうしてみると、ずっと歩きやすくなった。足の裏は痛むけれど、たしかな感触が伝わってくる分、足を踏みしめやすい。どうしてもっと早く気づかなかったのだろう。

まだ頭のどこかが痺れたようになっていたけれど、それでも歩きだせば、どうにか体は動いた。震える息が収まるまでに、少し時間がかかった。

いくらもいかないうちに、低い水音が耳に届きだした。はじめ、それは自分の中を流れる血の音と区別がつかないくらい、かすかなものだった。けれどじきに、澄んだ水のおいが鼻をくすぐった。

死者の川が、近いのだ。

じきに辺りが広く開けたのが、目には見えないながらも、わずかな空気の流れから察された。壁についた手に、いままでとは違う、やわらかい苔の感触がある。その一部が剥がれて、ぱらぱらと落ちた。

あたりはひんやりと湿っていた。水が岩肌から染み出しているのだ。

おそるおそる、壁際を歩くと、途中で水溜りに足をとられて、転びかけた。ぱしゃんと、水の撥ねる音が、驚くほど遠くまで反響した。

擦りむいた手のひらを服の裾で拭いながら立ち上がると、苔や水のおいにまじって、なにか、獣くさいようなおいがした。

ヨブの話の思い出していた。荷をたくさんの駱駝の腹に括って、彼らに運ばせるのだという。きっと滞在中、駱駝たちをここで待たせていたのだろう……。

さらに進むと、水音はますます大きくなっていった。それはやがて、耳を聳するような、轟々たる響きへと膨れ上がっていった。

まだ見ぬ駱駝の痕跡を追うように、空気のおいを確かめながら歩いていると、水の匂いもまた、音と同じく強まっていった。

路の湾曲したところを歩き過ぎると、急に、視界がぼんやりと開けた。

小さな青白い光が、あたりをふわふわと舞っている。その下で、黒々とした水の流れが、光を弾いていた。

死者の川は、記憶のなかにあるよりも、なお流れを増しているようだった。

その勢いに気を吞まれて、わたしは僅かのあいだ、その場に立ち止まっていた。

空中で光っているのは、小さな虫だ。いつでもここに、たくさん群れをなして舞っている。

遺体を川に流すと、彼らのいくらかが、ふらふらと釣られるようにして、下流のほうへとついてゆく。死者の魂の、水先案内をしているのだという。まれに彼らがついてゆかないことがあって、そういうとき、死者の魂は里に未練を残して、彷徨っているのだそうだ。

いまは虫たちは、ゆったりと明滅しながら、川面を飛び交っている。彼らの明かりは、暗闇にすっかり慣れた目には、まばゆいほどだった。

水辺の空気は、冷え冷えとしていた。川の水はさぞ、冷たいだろう。一瞬、顔も知らぬ父が激流に飲まれてゆくところを、この目で見たような気がして、わたしは目を瞬いた。

これまでにどれほどの死者が、この流れを下っていったのだろう。この先にあるという水底の国に流れ着くまでは、どれほどの間、冷たい水に揉まれなくてはならないのだろうか。

やがて首を振って、わたしは歩き出した。

ここから先の道は、記録を読みあさっておぼえた道順だけがたよりだった。そのうえ、記録には採掘場までのことしか記されていなかった。火の国までほんとうに行ったことのあるものなど、里には誰もいないのだ。炎の乙女のほかに。

路は、複雑に分岐しているという。自分が迷わないでいられるという確信なんて、どこにもなかった。

馬鹿なことをしていると、わたしは胸のどこかで、ちゃんとわかっていたように思う。けれど、足を止める気はなかった。暗闇の中で迷い、二度と戻れなくなってもかまうものかと、心のどこかで思っていた……。

川が視界から消えていっときしても、しばらくは完全な暗闇には戻らなかった。不思議に思って天井を振り仰ぐと、弱々しい光が、はるかな頭上にあつた。ヒカリゴケではない。もっと遙かな高みから、おぼろげに注いでいる、白い光。菜園や水場のように、ここもわずかながら、光輝の神の恩恵にあずかっているらしかった。

そのためかどうか、それまであまり意識せずに済んでいた生き物の気配が、急に強まった。虫の這ってゆくのが、何度も視界の隅をかすめた。遠くで、水音に紛れそうなほどかすかに、せわしない羽音が響いている。蝙蝠だろうか。

壁にふれる手に、あるいは裸足の足裏に、何度となく小さな虫の這う感触がした。沓を捨ててきたことを、わずかに悔いた。

けれど視界があるぶんだけ、それまでよりずっと歩きやすかった。なかば小走りに、わたしは進んだ。

いくつかのわかれ道を過ぎると、やがてぽっかりと左手の壁が消えた。その先は、深い暗闇に沈んでいる。この先は、銀の採掘場に続いているはずだった。

わたしはふたたび、右手の壁に手をついた。採掘場に向かう路を折れず、まっすぐに進んだ先の道のどこかが、火の国に通じている。書物にはそのようであった。

そんなあやふやな話にでも、縋るほかなかった。それにそのあたりから、路はどうやら、ゆるやかに傾斜していた。火の国は、ずっと高いところにあるという。上るほうへと向かえば、それだけかの地へ近づくのではないか。それもまた、ひどく頼りない根拠ではあったけれど……。

じきに路は、再び暗闇に沈んだ。水音はもう聞こえない。けれど、小さな生き物たちの気配は消えなかった。足元は、硬い岩ばかりではなく、場所によっては砂礫まじりになり、あるいは柔らかい苔か、土のようなものが広がっていた。

何度か、分かれ道らしきところがあった。そのたびに足を止めて眼を凝らし、ときには何歩か足を踏み出してみても、より傾斜の上っていると思われるほうを選んだ。それが正しい路だという確信は、どこにもなかったけれど、ときおり思い出したように、かすかな獣の匂いがした。そのことに勇気付けられながら、ひたすら歩いた。

ある瞬間、その中に異なるにおいがかぎ当てて、わたしは立ち止まった。わずかに甘く、涼やかな、香の匂い。

記憶のなかにある匂いだった。

突き上げる衝動に背を押されて、とっさに走り出そうとした、そのときだった。

何か、土でも岩でもないものを、踏んだ。

そう思った次の瞬間、右のくるぶしに痛みが走った。わたしはつんのめって、地面に手をついた。尖った石で、再び手のひらを擦りむいたようだったけれど、それよりも、足の痛みのほうがひどかった。

太い針で刺されたような疼痛、それに、痺れるように熱い。とっさに手を伸ばした、その指先に、ぬるりとした感触があった。

何かが音を立てて、勢いよく撥ねた。

悲鳴を上げた、と思う。頭が真っ白になっていた。暗闇の中で、何かが身をくねらせて、暴れている。わたしのくるぶしに喰らいついている。

痛みよりも、嫌悪感が勝った。わたしは足を振り回そうとした。けれどうまくいかなかった。右足は痺れて思うように動かず、痛みは次第に増していった。

恐慌をきたしたわたしの耳が、かすかに遠くの物音をとらえた。

足音だった。行く手のほうから、誰か、近づいてくる……。

助けてと、叫ぼうとした。けれど声は、かすれた悲鳴にしかならなかった。

光がさした。

松明の炎だった。先ほどまでの恐怖も、痛みさえも一瞬忘れて、わたしはその人を見た。明かりを手に、駆け寄ってきた人物を。

背がひどく高い。小さな松明の頼りない明かりでさえ、その肌の浅黒いのが、はっきりとわかった。

視線がぶつかった。驚きに見張られた、黒い眼。その視線が動いて、わたしの髪を見た。そこに挿した、髪飾りを。

「トウイヤ……？」

ヨブ。呼びかけは声にならなかった。

駆け寄ってくるヨブの手が、わたしのほうへと伸ばされた。いつか垣間見たのと同じ骨ばった大きな手に、わたしは縋った。

ヨブはわたしの足元を見て、表情を険しくした。その途端、忘れていた痛みと熱とが、いっぺんに蘇った。

「動くな。これを持っている」

いわれて、わたしは震える手で松明を受け取った。おそろおそろ痛む足首に視線を向けると、そこにいたのは、胴体の太い、蛇だった。白い鱗をくねらせて、蛇はしっかりとわたしの足に牙を突き立てていた。

ヨブの手が、見慣れぬ衣装の懐から、小刀を取り出した。彼の手が華麗な装飾の鞘からそれを抜き放くと、銀色の刃が炎に照らされて、ぎらりと輝いた。

その短刀が、蛇の胴体をひといきに貫いた。

とっさに、目をかたく閉じた。

手から、ヨブが松明を取り上げたのがわかった。再び眼をあけたときには、ヨブが小刀を拭って、その刃を松明の炎で炙っていた。

彼が何をしているのかわからずに、わたしは瞬きを繰り返した。

「痛むかもしれないが、じっとしている」

短くいって、ヨブはその刃を、わたしの足に向けた。

ヨブの手は迷いなく、蛇の牙の痕を切り開いた。

わたしはとっさに身をすくませたけれど、痛みは、よくわからなかった。足首から下が、痺れていた。

されていることの意味が、よくわかっていなかった。短刀を地面においたヨブが身をかがめるのを、ただ見つめていた。

蛇の毒を吸い出すのだと、気づいたときには、その唇がくるぶしに触れていた。

とっさに上げそうになった悲鳴を飲み込んで、わたしはきつく目を閉じた。

足首が、熱い。

痛みもわからないほど痺れているというのに、血を吸い出す唇の感触だけが、やけに生々しく感じられて、とても眼を開けていられなかった。

それは、ほんの短い時間のはずだったけれど、わたしにはひどく長く感じられた。吸われている傷口の熱、足首を押さえるヨブの大きな手、松明のはぜる音、炎のにおい。

吸い出した血を地面に吐き出して、ヨブは深く、ため息をついた。目をあけて彼の表情を確かめるのが、怖かった。呆れているだろうか。苦りきっているのではないか……。

「トウイヤ」

名を呼ばれて、恐る恐る、目を開けた。

思いがけず、ヨブの顔が近くにあった。

黒い瞳と、見た瞬間には思ったけれど、間近に覗き込めば、どちらかというとその眼は、濃い灰色をしていた。

何か、いわなくては。そう思うのと同時だった。新たな足音が近づいていることに気づいた。

ヨブもまた、同じことに気がついたようだった。行く手の路を振り仰いで、ヨブは一瞬、険しい顔をしたけれど、すぐに振り返って、わたしの足の傷を確かめた。その手がためらいなく短刀の柄布を外して、わたしの足に巻きつける間に、人影が近づいてきた。

「何事かと思えば、これはまた……」

湾曲した路の先からあらわれたのは、やはり背の高く肌の浅黒い、男の人だった。ヨブと同じく、見慣れ

ない、ふしぎな衣装を身にまとっている。

その使者は、ヨブとわたしを交互に眺めて、どういったらいいのか、ひどく嫌なふうに笑った。それから、わたしの顔のそばに松明を寄せた。

わたしがとっさに顔を背けるのも気にしないようすで、使者はまじまじとわたしの顔を覗き込んだ。それからヨブのほうに視線を戻して、喉の奥で笑った。

「ふん。真面目くさったやつだと思っていたが、どうして、なかなかやるものだ」

ヨブはその言葉を聞いて眉を顰めたけれど、口に出しては、何も反論しなかった。ただ無言のまま、短刀を拭って鞘に戻した。そのようすを見て、はじめてわたしは本当の意味で、自分の愚かさを思い知った。

青ざめながら振り仰ぐと、使者は、まだ笑っていた。ひどく冷たい、胸の悪くなるような笑い方だった。「さて、どうしたものだろうか。長に報告しないわけにはいくまいが」

わたしはとっさに、声を上げようとした。何をいおうとしていたのか、自分でもたしかにはわかっていなかった。弁明だろうか、反論だろうか。とにかく、すべてはわたしの愚かしさの引き起こしたことであって、ヨブには責のないことだと、伝えなくてはならなかった。

けれど、ヨブはわたしを手で制した。それからひとこと、そっけなくいった。「好きにするといい」

使者は鼻で笑った。

「そうするさ」

待って。いおうとしたわたしに首を振って、ヨブはいった。「この娘を里まで送り届けてくる。先に行っていてくれ」

「そうするほかに、どうしようもなかろうな」

使者の声には、やはり嘲弄の響きがあった。わたしは焦りと苛立ちで、混乱していた。苛立ちは、その使者に対するものでもあったけれど、それ以上に、自分自身に向けたものでもあった。

わたしたちが里の掟によって、使者さまの眼に触れる場所から遠ざけられていることは、よくわかっていたつもりだった。なのにどうしてわたしは、その可能性を考えてもみなかったのだろうか。使者さま方もまた、彼らの一族の掟によって、同じことを禁じられているのに違いなかった。

使者の足音が反響しながら遠ざかっていっても、わたしは顔を上げきれなかった。

己の幼さを、いまこのときこそ、呪わずにいられなかった。

暗闇の路のなかで迷い、ひとりで朽ち果てることになってもいい。たとえ火の国の炎に焼かれて死んでもかまわない……。心のどこかで、そんなふうには思っていた。けれど、騒ぎになればヨブがどれほど困るか、そのことを、わたしはたった一度でも、まともに考えただろうか？ もし考えていたなら、こんな愚かな真似を、できるはずがなかった。

「トウイヤ」

ヨブの声は、苦しげだった。

自分のせいで、困らせている。そう思うと、どうしようもなく耐え難かった。いっそ消えていなくなりたい、とさえ思った。

「ごめんなさい……」

自分の喉から溢れた声が、まるきり叱られた子どものようで、その幼さを、わたしは憎んだ。

ヨブはいつか、何かをいいあぐねるようになっていたけれど、やがて一度立ち上がり、そばに屈みこんだ。「松明を持って、負ぶされるか」

いわれていることを理解するのに、間がいった。いつかぼかんとして、それからわたしはあわてて首を振った。

「そんな。自分で歩けるわ」

「その足で？」

ヨブの声には、怒っているような気配はなかったけれど、わたしは慌てて立ち上がろうとした。けれどすぐに痺れた足をひきずって、つんのめった。

転びそうになったわたしを支えると、ヨブは何もいわず、背中を向けた。それでもまだ躊躇わずにはいられなかったけれど、結局、わたしはその肩にしがみついた。

「ごめんなさい」

悲しくて、情けなかった。自分が何をしてしまったのか、ヨブにどれだけの迷惑をかけてしまったのか、考えれば考えるほど、苦しかった。

「謝らなくていい」

その声は優しく、そのことが、かえってわたしには辛かった。

しがみついた背中は、広がった。松明を気にしながら体重を預けると、あの涼しげな香と、それから、汗のにおいがした。

歩き出したヨブの背で、揺られながら、わたしは何度も言葉を飲み込んだ。

何をいえばよかっただろう。どうしてももう一度、あなたに会いたかったのだと？ この目で砂漠の空をみられるのなら、それで死んでもいいと思ったと？

唇を噛んで、わたしは顔を伏せた。何をいっても、自分の愚かしさを思い知らされるだけのような気がした。

「傷跡が、残るかもしれないな……」

ふいに、ヨブがいった。それは、ひどく悔やむような声だった。彼が気に病む筋合いのことなど、なにひとつないはずなのに。わたしはそれが、申し訳なくて、いたたまれなくて――そして、嬉しかった。

気にかけてもらうことが、嬉しかったのだ。自分の救いようのない愚かさに、目の前が暗くなるようだった。

里に、戻りたくなかった。このまま一緒にいたいと、火の国までついてゆきたいのだと、まだそんなことを思っている自分を、救い難いと思った。

わたしの飲み込んだ言葉に、ヨブは気づいていただろうか。

里に引き渡した荷の中に、薬があるはずだというようなことを、ヨブはいった。それから、何かをいいかけては、言葉を飲み込む気配があった。

足の痛みは引かず、いつまでも痺れたように熱かった。ときどき手が、汗で滑った。

死者の川のほとりで、わたしは松明を取り落としそうになった。ただ黙って負ぶわれていただけなのに、体が熱く、重かった。ヨブは立ち止まって、ゆっくりと屈みこんだ。

「少し、休もう」

ヨブはそんなふうにいったけれど、彼自身の足取りには、ちっとも疲れているようなようすはなかった。気遣われていることが申し訳なくて、とっさに意地を張ろうとしたけれど、肩越しに振り返ったヨブの眼を見て、結局、わたしは頷いた。

腰を下ろした岩肌は、わずかに湿っていた。光る虫が、明滅しながらふわりと近づいて、また遠ざかって行った。

隣に座ったヨブが、小さく苦笑するのがわかった。

「それにしても、明かりももたずに、よくあのような場所まで歩いてきたものだ。やはりお前たちの目は、特別らしい」

すぐそばに身を寄せ合って話をすることに、いまさらのように、わたしは少し、緊張した。死者の川の流は速く、その水音に負けないように口をきくには、そうするほかになかったのだけれど。

暗闇の中でものが見えていたわけではないけれど、細かく説明する気はしなかった。わたしは黙って首を振った。

何度かためらうような気配のあとに、ヨブがいった。

「すまなかった」

わたしは振り返った。ヨブが何を謝っているのか、すぐにはわからなかった。昨日、勉強室にやってこなかったことだろうか、まずそのことを考えた。けれどそうではなかった。ヨブは続けた。

「酷いことをした。いくら地上のようすを話して聞かせたところで、連れて行ってやれるわけでもないのに」それはやはり、悔いるような声だった。

わたしはうまく出てこない言葉のかわりに、いそいで首を振った。謝ったりしないでほしかった。

だって、わたしは嬉しかったのだ。遠い国々の、広い世界の存在を知って。ヨブの声で語られる、遠い異国の風景に、思いを巡らせることができて。

その光景を、もしこの眼で見ることができたなら、ヨブと一緒に火の国へゆけたならと、そんなふうに、身の丈に合わぬ望みを抱いたのは、わたしの欲深さゆえのことだ。ヨブが気に病まなければならないことなんて、何ひとつないはずだった。

「あれは、去年だったか。お前たちの祖先がこの地にやってきたときの話を、していたな」

きゅうに聞かれて、わたしは戸惑いながら頷いた。ヨブはまた少し迷って、それから何かを思い切るように、首を振った。

「そのときの話は、俺たちの部族にも伝わっている」

その言葉の意味を考えて、わたしは目を見開いた。ヨブは頷いた。

「もともとは、同じ部族の民だったのだ。争いによって、分かたれるまでは。――少なくともファナ・イビタルには、そのように伝わっている」

「だけど……」

わたしは声を上げかけて、途中で口をつぐんだ。それから、ヨブの顔をまじまじと見つめた。

川の上を飛び交う虫たちの放つ、ほのかな白い明かりに、濃い灰色の瞳が照らしだされている。浅黒い肌の色、ひどく高い背丈。わたしたちの祖がもとは同じ一族だったなんて、信じられるだろうか。容貌ひとつとってさえ、これほどまでに異なっているというのに。わたしたちの祖は、火の国からやってきたのではないかと、自分で想像しておきながら、いまになって、信じられないような気がしていた。

「この話は、秘められているのだ。この里の者だけではない。ファナ・イビタルの人々にさえ、ごく限られた者のほかには、話すことを禁じられている……」

いままで黙っていて、すまなかった。ヨブはそんなふうに入った。

「だがお前は、教えずとも、自分で気がついたかもしれないな」

ヨブはふと、視線を川に向けた。つられてわたしも、黒々とした水面を見た。激しい音を立てて流れてゆく、冷たい水を。

「古くには、ひそかに里の娘を娶ろうとした長も、いたのだそうだ」

ヨブは眼を伏せて、囁くようにいった。はっとして、わたしは顔を上げた。

「つれてゆかれた娘の眼は、地上の光には、耐えられなかったという。長く地の底で暮らすうちに、お前たちの体は、この暗闇に慣れてしまったのだろう」

わたしは話に耳を傾けながら、じっと、ヨブの横顔を見ていた。その濃灰色の瞳に、飛び交う光が映りこんでいるのを。

「ファナ・イビタルにたどり着いたときには、娘の眼はすでに、光を失っていたそうだ。長は秘密を隠すため、邸の奥に娘を閉じ込めた。慣れない旅も、体に触ったのだろう、娘はじきに病みつき、ひと月を待た

ず、命を落としたのだと……」

言葉を切って、ヨブはそっと、わたしの髪に触れた。そこに挿した、銀の髪飾りに。

その指先がためらうように、揺れた。そして、長い迷いののちに、ゆっくりと離れていった。

「——できることなら、お前に、砂漠の空を見せてやりたかった」

ヨブの、苦しげに揺れる眼が、熱を孕んで、わたしを見た。

そこに自分の顔が映りこんでいることに気づいたとき、諦められると、はじめてそう思った。

水音が高く低く、反響を繰り返していた。

見つめあっていた時間は、それほど長くはなかったはずだ。やがてヨブは眼を伏せて、いった。「行こう」

黙って頷くと、わたしは差しのべられた手に捕まって、立ち上がった。ヨブはふたたびわたしを背負ってゆこうとしたけれど、それを断って、わたしは自分の足で、どうにか歩き出した。痺れはまだひどかったけれど、そうせずにはいられなかった。

ヨブの手を借りて、足を引き摺りながら、ゆっくりと歩いた。並んで歩くあいだ、不思議と、あまり悲しくはなかった。いまこのときを最後に、もう二度と会うことも話をすることも、おそらくないだろうと、わかっていたけれど。

長いような、短いような時間が過ぎて、やがて、里の入り口が見えたところで、そこに人影を見出して、わたしたちは立ち止まった。

佇んでいたのは、導師だった。

ヨブやわたしが何かをいうより早く、導師は膝を折って、ほとんどひれ伏すように、礼をとった。ヨブへの感謝の意をあらわす言葉が、その口からこぼれたけれど、それは普段の話し方とはまるで異なる、どこか儀式めいた、ひどく丁寧なものだった。

ヨブは手をさしのべ、導師を引き起こして、その礼をやめさせた。それから短く、わたしの足の傷と、その薬のことだけを、手短かに説明した。導師はそれに何一つ問い返すことなく、深々と頭を下げた。

導師は何もかもご承知のようだった。

それまでつかまっていたヨブの腕から、手を放した。その一瞬、視線が絡んで、離れた。

そっと腕を引く導師の手に促されて、わたしはその場に膝をついた。けれど、導師がそうしたように、顔を伏せて礼をとることはせずに、踵を返して去るヨブの背を、じっと見つめていた。それはきつと、ひどく無礼なことだったのだろうけれど、導師は何も仰らなかった。

ヨブの姿が闇に溶け、足音がすっかり聞こえなくなったところで、一度、記憶が途絶えている。

あとで聞いた話によると、わたしはそこで意識を失って、高い熱を出したらしかった。

気がついたのは翌朝で、いつもの、自分の寝床の中だった。そのときにはすでに熱も引き、意識ははっきりしていた。足の傷跡が、いまさらのように痛み、ひきつれるばかりで。

母さんは、何も知らされていないようだった。わたしは水場で転んだ拍子に怪我をして、その傷が原因で熱を出したのだと、母さんは思っていた。

熱が下がったことを喜びながら、母さんは一方で、手足の傷があとに残るのではないかと、そのことをひどく心配していた。わたしが曖昧に話をあわせていると、導師がおいでになった。

「熱は、すっかり引いたようだな」

穏やかな声だった。

導師は、わたしの怪我の様子をお尋ねになったきり、母さんのいるうちは、ほかに何も仰らなかった。

じきに母さんが水を汲みに部屋を出ると、導師は深く、ため息を吐かれた。

「どうして私が、あそこにいたと思う。カナイが血相を変えて、私のもとに駆け込んできたのだよ。お前がいなくなったといって」

意表をつかれて、わたしは顔を上げた。導師は穏やかなまなざしで、わたしを見下ろしておられた。

「自分が問い詰めたせいで、お前が早まった真似をしたのではないかといって。ひどい顔色をしていたが、それでも真っ先に、私のもとへやってきた。……あれも、お前とはまた違う意味で、賢い娘だ。他の人間に話せば何を言われるか、よくわかっていたのだろう」

あとで礼をいっておきなさい。導師はそう仰って、かすかに苦笑を浮かべた。そして、もうひとつ、深く息を吐かれた。

わたしは俯いた。叱責されるとばかり思っていた。叱られるどころか、罰を受けるだけのことを、わたしはいくらでもしただろう。けれど導師は、まったく違う話をされた。

「昨日の昼に、ムトと話をした」

急な話のうつりかわりに、わたしは困惑して眼をしばたいた。けれど導師はそんなことには気も留めめようすで、ゆっくりとお続けになった。

「お前が嫁いだあとも、私の手伝いをさせたいのだが、どうだろうか」と訊いた。ムトが何と答えたと思うかね」

見当もつかなかった。首を振ったわたしに、導師はかすかな微笑を浮かべて、答えを口にされた。

「お前がそれを望むのならと、ムトは即答したよ。――よい青年ではないか」

なぜだろう。それまで平気だったのに、その言葉を聞いたとたん、急にひどく胸が痛んだ。

ヨブに手をひかれている間には堪えられた涙が、いまさらのように次々に溢れて、わたしは嗚咽を漏らした。導師の手が、そっと、肩の上におかれた。

いつかのエオンの月に、わたしは顔も知らぬ夫のもとに嫁ぐだろう。

運がよければ子どもをもって、イラバがそうしたように、懐かしげに眼を細めるかもしれない。この胸の痛みも、焦がれるように求めたものも、何一つ忘れることなく、それでも微笑むことの出来る日が、やってくるのだろうか。いまはまだ、わからなかった。

導師はいつもとかわらない静かな口調で、お続けになった。

「千年をかけてここに蓄えられた記録も、知識も、そのほとんどが、ト・ウイラの領域のことばかりだ。私たちは、よほどの困りごとでもなければ、私のところまでは相談にやってこない。私のあとの役目を継ぐのは、正式にはバルトレイを考えているが、ほかに誰か、わたしの記録を残すものがいればと……。そんなふうを考えることは、以前よりあったのだ」

以前のわたしなら、その言葉に、ただ無邪気に喜んだだろう。けれどこのときばかりは、ただ胸が苦しかった。

「トウイヤ、頼まれてくれるだろうか？」

わたしは頷きながら、子どものようにしゃくりあげて泣いた。戻ってきた母さんが、驚いて駆け寄ってきても、嗚咽を止めることはできなかった。

あれからずいぶん時が経ったいまでも、ときどき、夢に見る。

見渡す限りの砂の大地。その空に、眩しいほどにちりばめられた、数えきれぬほどの光の粒。砂漠の空の高いところを優雅に舞う、美しい羽根の鳥を。

その鳥は、髪飾りの細工と同じ姿をしている。

とこしえの黄昏の国

<http://p.booklog.jp/book/38887>

著者：朝陽遥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hal00/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38887>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38887>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.